

真・恋姫†無双　～凌
統伝～

若輩侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

そこには一人の勇将がいた。その名は凌統。孫策に仕えし若き将である。

そこには一人の元江賊の頭領がいた。その名は甘寧。孫権に仕えし若き将である。

同じ孫家に仕えし若き将たち。そんな二人が織りなす外史が今、幕を開ける。

※この作品は小説家になろうでも掲載していません。

目次

第十二話	186
第十一話	169
第十話	150
第九話	135
第八話	112
第七話	98
第六話	83
第五話	68
第四話	49
第三話	32
第二話	18
第一話	1

第十三話	205
第十四話	223
第十五話	242
第十六話	268

第一話

そこは、戦場だった。

たった一言、されどこの一言が、この光景を簡潔に言い表すにふさわしい言葉だ。

剣を、槍を、弓を、各々手にした兵士達の声が響き渡る。それは敵を討ち取った者の歓喜の声か、はたまた命を奪い合う死闘を繰り広げる者達の雄叫びか、それとも命果て死の恐怖に怯える断末魔の叫び声か。

それを聞き分ける手段は無い。そんな余裕を持つ者はこの場に誰一人として存在しない。なぜならここは戦場だから。一瞬の気の緩みが死へと繋がる、黄泉路への入り口の一步手前と言っても過言ではない場所だから。だから響き渡る兵士達の声に意味が有っても、ここでは須く無意味なのだ。

助けを求めようとも誰も応じない。応じることはできない。傍から聞こえる救いの求めも、自身に向けられた殺意の声も、全てが戦場の雑音の一つ。精々聞きとる事の出来るのは、隣りの友の共闘の声くらい。黄泉路に一步でも足を踏み入れた者に差し伸べられる手は無いのだ。

緊張と狂気に支配された異質な空間……それ即ち、戦場である。

「総員突撃！ 逃げる者、降伏する者には構うな！ 目の前の敵にだけ集中せよ！」
そんな中で響き渡るのは、赤の陣羽織を羽織った一人の初老の男の声。男の背後に揺れるのは、赤地に孫の文字を記す牙門旗。そしてその隣にはためく一回り小さな牙門旗には、凌の文字が見て取れる。

初老の男の声に孫旗に集った兵士達が蹂躪の雄叫びをあげ、目の前にそびえ立つ夏口の城へと次々に突撃していく。破城槌を抱える兵士達を先頭に降り注ぐ矢を物ともせず、あるいは掻い潜り走り抜ける。

そして轟音が大地を揺らす。一度、二度、三度と続き、そして四度目の轟音と共に夏口の城の城門が破れる。城門の開いた先に待ち受けるのは、夥しい数の敵方の槍兵と弓兵。槍兵の突き出す槍が、破城槌を抱える兵士達を串刺しにしていく。

力尽き、破城槌と共に地面に沈む味方の屍を越え、友の仇と叫び突撃を再開する孫旗の兵。その先頭に立つのは、重厚な作りの鉄甲を両腕両脚に、対して動きを阻害しないよう急所のみを守るよう作られた軽鎧を纏う若い男。剣ではなく、その両手には片手でも扱える大きさの二本の小型の戦鎚を携えている。

引き締まった強靱な肉体にものを言わせ、若い男は容赦無く敵兵の頭蓋を砕き、時には鎧兜の上からでさえも筋力と戦鎚の堅牢さを頼りに敵兵を撲殺する。他の兵よりも圧倒的な強さを見せるその若い男は槍兵部隊を率いていたと思わしき兵士を討ち果た

すと、味方を鼓舞するために盛大に名乗りを上げた。

「孫家に仕えし重臣が一人、凌操が息子凌統が敵將を討ち取った！ 我もと思う者は我が背に続けえええ！」

戦鎧を高く振り上げる凌統の声に、兵士達は奮起し更なる勢いを伴い蹂躪の嵐を巻き起こす。士気は低く、もはや総崩れとなつた夏口の兵士達に対抗する術が有る筈もない。孫家の兵士達の濁流に飲み込まれ、敵兵は命辛々退却を始める。しかし時既に遅く、先陣を凌統に任せていた初老の男——凌統の父、凌操は自ら部隊を率いて追撃を仕掛けようと声を張り上げる。

「追撃せよ、一兵たりとも逃すでない！ 逃がした敵兵の数だけ、後の孫家の禍根となると心得よ！」

そんな頼もしい父の声を背に、凌統はこの戦の勝利を確信する。負け戦の中、それでも最後まで抵抗の意思を見せる敵兵達に尊敬と称賛の念を抱きながら、一対の戦鎧を振るい視界に入る敵を討つ。粗方視界に入る敵兵が討たれた事を確認し、自分も追撃に加わろうとそう思つた次の瞬間……追撃を促す凌操の声が唐突に途切れた。

「……おや……」

それが意味するところを一瞬で理解した凌統は、すぐさまその場から駆けだす。困惑する兵士達の間を駆け抜け、時には押しつけながら追撃とは逆方向に必死の形相で駆け

る。駆けて駆けて、そうして辿り着いた牙門旗の下には、喉を矢で貫かれ、目を見開き仰向けの姿で死んでいる凌操の姿があった。

「おやじ……」

小さくそう呟き、凌統は父に刺さった矢を引き抜く。そして開かれたままの瞼をそつと閉じると、湧き上がる悲しみを抑え、冷静に矢の出所と思わしき遙か遠方に視線を向ける。しかしその場には既に凌操の仇の姿は無く、凌統は怒りに手中の矢を握り潰す。矢のバキリと折れる音が響くと共に、凌統は凌操の死に混乱する兵士に怒号を飛ばした。

「うろたえるな！ 例えその身は死すとも、我が父凌操の心は我と共にあり！ ゆえに、これより全軍の指揮は俺が執る。全軍追撃を続行！ 降伏する兵士を除き、全ての敵を討てえええ！」

誰よりも一番つらいはずの凌統が、誰よりも一番怒りに我を忘れたく思うはず凌統が、涙も見せず荒ぶる事もせず、凌操の代わりを果たそうと冷静に全軍の指揮を執っている。その姿に応えぬ兵士は今この場にいるはずがなかった。

「これが最後だ、奮励努力せよ！ 父の仇をと思う者は、我に続けっ！」

追撃により散り散りになる敵兵の息の根を止めるため、凌統自らも兵を率いて追撃に出る。それは凌操が行おうとしていた、まさしくその姿と同じ。そして味方を守るため

に凌操の仇が凌統を狙うのも、また同じであった。

「……………」

突如自分に向けて飛来した矢を、凌統は難なく討ち落とす。凌操の時と同じく、正確に喉を狙った一撃。間違はなく同一人物の仕業に、凌統は姿を見ようと目を向ける。しかし時は既に夕暮れ。視界の効きにくくなった中で凌統が視認出来たのは、弓を片手に顔を隠す様に漆黒の布を巻いた者の姿のみ。顔は分からず、しかし目は完全に合っているそんな状態が続く。

戦場の音も何もかもが凌統の耳から遠ざかり、戦場の雑音の中に沈黙の空間が出来上がる。そうしてどれだけ見つめあったか、やがて凌統の耳に音が戻り、ハッと気づいた時には仇の姿は消えていた。

味方の兵士達の勝ち鬨が戦場に響き渡る中、チリン…………と、凌統は風に乗った鈴の音を聞いた気がした。

これは、後に凌統が仇と再会する事となる…………その一年以上も前の話である。



頬を撫でる風が気持ち良い。不規則に上下するこの揺れが心地良い。

袁術に命じられ、最近出没するようになった賊の討伐のために、兵達と共に乗り込んだ船の甲板の上に出た俺がまず最初に思った事は、この二つの事だった。何てことは無い、船の上にいれば当然の感想だと思う。まあ、船が苦手な人にとっては当然とは言えないのかもしれないけども。

うんと背伸びをしながら甲板の上を見回す。水夫特有の上下の裾の短い衣服から筋骨隆々とした四肢を見せつけ、水兵が操船のために声を掛け合いながら忙しくしている。帆を頼りにするだけでは無く、櫂を用いて船の速度を上げる水兵の姿は頼もしいの一言に尽きるだろう。引いては押し、押し返して躍動する筋肉などは、見ていて少し暑苦しくも感じてしまう。

ただし男共に混じり、少ないながらも存在する女性の水兵は見ていても飽きない。むしろ眼福だ。櫂を押し引きする際に……揺れるのだ。露骨に何がとは言わないが、とにかく揺れるのだ。

「凌統……鼻の下が伸びてるわよ」

「うわっ!?! ……とっ」と

突然背後から声を掛けられた事に驚き、同時に船の揺れが重なったことで危うく体勢を崩しかける。すぐさま体勢を立て直し、声の主の方へと振り返ると、そこにはあからさまに呆れを浮かべた女性の顔があった。

「いきなり声を掛けないでくださいよ、雪蓮様。びつくりしたじゃないですか」

呆れ顔でじとつとした目を俺に向けるこの人の名は孫策。真名を雪蓮と言い、俺こと凌統が仕える孫家の頭領である。ちなみに真名とは、その人が認めた人物にしか呼ばせる事の無い大切な名前の事だ。俺にとつては生涯忠誠を誓うべき王……なのだが、普段はこうして臣下に気安く接してくれるため、相對する時はあまり肩肘を張らずに済む人だ。流石に話す時は敬語を使うが。

「なによ、浩牙が水兵に見惚れてたのが悪いんじゃない」

「まあ、それはそうですね……」

まさしく雪蓮様の言う通り、非は完全に俺にある。しかし俺も男である以上、そう言った事にはやはり興味があるわけで。とは言え、これでも一応将の位に就く者として、最低限の線引きは心得ているつもりだ。ただ今回は、仕事始めのちよつとした活力源として、少しばかり欲望を優先させてしまった次第である。

「にしても、今度の任務は江賊が相手ですか。正直、あまり気乗りはしませんね」

何時までもこの話を引っ張ると弄られ話に発展しそうなので、俺は些か強引に話を交

える。変えると言っても、これこそが今回俺たちが船を持ちだしてまでここに来た理由であるので、変えると言うよりも戻したと言うべきか。

「そうね。何せ相手は江族、水上の猛者だもの。私達も水上戦には慣れてはいるけど、向こうはこっちの比じゃない。まあ、向こうの船に乗り込みさえ出来れば勝つたも同然だけど」

「そもそもそれが難しいんですよ」

戦いになった場合、兵士の實力はこちらの方が圧倒的に上でも、兵士の戦いに持ち込めなければ意味がない。弓兵での応戦も出来るが、それだと確実に長期戦となり被害が増える。それを防ぐためにも、どうにかしてこちらの船を敵方の船につけ、一気に乗り込み殲滅するのが一番手っ取り早い。

しかし相手は水上での活動を主とする江賊。その操船技術は当然高く、容易には船をつきさせてはくれない。無論、こちらの水兵も操船技術は高いのだが、ある種水上戦に特化しているとも言える江賊相手にはどうしても一歩譲ってしまう。

その代わり、白兵戦になればこっちのものなのだし、最終的に矢の撃ち合い合戦になっても物量で押し切る事は出来る。全体的に見ればこちらが優勢である事には変わらない。その中でどれだけ被害を減らせるのが、今回の戦での最大の課題と言えるだろう。

「そう言えば、かなり前の話なんだけど。蓮華の所に元江賊の将が仕官してきたって手紙に書いてあったっけ？」

江賊繋がりなのか、ふと雪蓮様がそんな事を言い出す。ちなみに蓮華とは雪蓮様こと孫策の妹、孫権の真名である。今はとある事情にて、俺たちから遠く離れた地にいるのだが……その性格たるや、雪蓮様とは正反対の生真面目な人で、どうしてこの二人が姉妹なのかと時折思ってしまうほどだったりする。姿恰好は結構似ているのに。

「しかし元江賊ですか……信用の程は？」

「できるみたいよ。仕官してからは蓮華の面倒をよく見てくれているそうで、武の腕も確か。今では蓮華の側近を務めてるって最近の手紙には書いてあったわね」

「近況報告あったんですね。と言うかそれ、冥琳様に伝えました？」

俺がそう言った途端、雪蓮様の表情がぴしっと凍りつく。どうやら手紙を読んでそのままだったらしい。何と言うか、こういう事に関しては雪蓮様はたまに……いや、結構な頻度で抜けている。それがわざとなのか天然なのかは知らないが、今回みたいな孫家に関わる事は流石に忘れちゃまずいと思う。それこそ色々な意味で。

「ほう、そんな事があったのか。初耳だぞ、雪蓮？」

そしてその意味の一つがたつた今、雪蓮様の背後に降臨する。低く、それでいて凜と通った女性の声。孫家の中で雪蓮様のため口をきく事の出来る二人の内の一人。雪蓮

様が大黒柱なら、この人は屋台骨だと言えるそんな人。その名は周喩、真名を――

「め、冥琳……」

顔を青くしながら、雪蓮様がその名を呟く。名前を呼ばれた周喩こと冥琳様は、額にいくつか青筋を浮かべながらにつこりとした笑みを浮かべた。ただしその目は断じて笑っていない。

「軍師の私に、そんなにも重要な人事の詳細を伝ええないなんて。しかもあろう事か蓮華様の傍であつた事を……一体どういうつもりなのかしら。ねえ、雪蓮？」

「め、冥琳。あ、あのね、今回のはね、単純に忘れてただけの事で、別に伝ええないなんて気は無かつたのよ？ 本当よ？」

いつもは他人を弄る側の雪蓮様も、冥琳様の前ではたちまちこうなる。孫家の頭領は雪蓮様だが、実質の力関係は冥琳様が一番なのかもしれない。と言つても、なんだかんだで冥琳様は優しく、また雪蓮様とは絶対の絆で結ばれているため、このくらいの事で二人の関係にひびが入るなんてことはあり得ない。まあ、仕事に関しては雪蓮様であっても一切の妥協を許さず、むしろ厳しく当たっていたりするのだが。

「忘れていたのなら尚更問題だ。丁度良い機会だ、最近忙しくて時間も取れなかつたのだし、久しぶりに少し話をしようじゃないか」

冥琳様に首根っこを引っ掴まれ、雪蓮様が船室の方へと引きずられていく。

「ちよ、なんでそうなるのよ！ 浩牙、助けて！ 冥琳にやられちゃうー！」

「そこ、風向きが変わったから帆の調節頼むよー！」

「あからさま過ぎる!?! 無視するなんて酷いっ！ 浩牙、臣下としてそれはあまりにも薄情過ぎるわよ！ って、痛い痛い痛い！」

雪蓮様の悲鳴が背後から聞こえてくる。しかしここは白々しくても敢えて無視。雪蓮様を敵に回すのは怖いが、冥琳様を敵に回すのはもつと怖い。幸いにも、これくらいのも事で雪蓮様もいきなり暇を出したりはしないだろうし、それに何かあっても今回は冥琳様の助力を得られるだろうから問題無し。

中間管理職の俺が生き残るには、色々と上手く立ち回る必要があります。

「うう……浩牙の薄情者おおおー！」

そんな雪蓮様の恨みの声を最後にバタンと船室の扉が閉まる音が聞こえ、それきり声は聞こえなくなる。恐らく船室内では冥琳様による説教の嵐が渦巻いている事だろうが、俺は何事も無かったかのように、驚いて動きの止まっている水兵たちに再び指示を出す。

その後もちよくちよくと揺れるアレで目の保養を行ったり、たびたび聞こえる怒声と悲鳴に耳を傾けたりしながら、初めに感じた風と船の揺れの心地良さを気休めに、船を目的地に向けてるための指示を出し続けた。



翌日、俺たちは報告にあつた江賊の出没地帯へと船を進めていた。ここまでは特に何の問題も無く至る事が出来たものの、これから先に関してはそうはいかない。

やつらの領域に侵入したのだ、いつ何時、江賊たちの襲撃を受けるか分からない。ただ、流石に真昼間から仕掛けてくる程向こうも馬鹿ではないだろうと言う事で、水兵達には一時休息を与えることになった。出没地帯直前までほぼ休まずに船を操船し続けた彼らの疲労はかなりのものだろうし、それを引きずって戦いに支障が出るようでは元も子もない。

幸い、俺を含む数名が有志で見張り役に名乗り出たので、警戒に関しては特に問題は無いと言える。夜ならともかく、先にも言った通り真昼間に敵影を見逃すほど俺たちは無能じゃない。と言うか、逆に暇が過ぎるくらいだ。なのでとりあえず、近くの水兵の寝顔を眺めたりしながら暇を潰していたりする。

墨が有つたら落書きしてみたいとか、断じてそんな事は思っていない。いや、ちよつとだけ思つてるかも？

「浩牙、見張り御苦労」

どっちだろうかと、どうでもいい事に頭を悩ませていると、船室から出てきた冥琳様
がその声を掛けてきた。特に苦勞を感じてはいなかったのも、俺は曖昧な笑みを浮かべ
て応える。少し疲れたような表情が見える辺り、今回の雪蓮様との戦いは結構壮絶なも
のになったようだ。もしくは、策を練るに際して殆ど休息を取っていなかったか……。

どっちなのかと聞いても、恐らく冥琳様は応えてくれないだろう。この人はそういう
人だ。他人の前ではまず弱みを見せる事がない。それが部下としては頼もしくもあり、
しかし少し寂しく感じることもある。

「あれ、雪蓮様は？」

「船室で伸びている。全く、説教でここまで疲れるのは雪蓮を相手にしたときだけね」

「いやあ、正直あの雪蓮様を完封する冥琳様が凄いんだと思いますよ？」

自由奔放と言う言葉と形にしたかのような人だ。あの人の相手をするのは、些か以上
に疲れる。それを言葉とほんの少しの實力行使でねじ伏せる光景を目にする度、冥琳様
がいかに怖い人であるかを実感する。この人を怒らせる事はすなわち、精神的な意味で
あの世に旅立つのと同義なのかもしれない、などと思ってしまうのも仕方がないと思
う。

「何か私に対して失礼な事を思っていないか？」

「いえ、別に」

「そうか。流石の私も、雪蓮を相手にした直後で別の誰かを相手にするのはかなり面倒なことなのでな」

眼鏡の位置を指でくいつと直しながらそう言う冥琳様に、俺の背中を冷や汗が伝う。一瞬、冥琳様の眼鏡があやしく光った気がしたが、それは日の光が反射しただけであると信じた。正直、俺には冥琳様の言葉攻めを耐えきるなんて無理だろうから……。

「さて、話は変わるが……浩牙、件の将の事をどう思う」

件と言うのは、恐らく蓮華様の側近となった元江賊の将の事だろう。忠誠心はあるとの事だが、王族の側近である以上は心配し過ぎと言う事は無い。むしろ過ぎるくらいが丁度良いくらいだろう。

「んー、直接会ってみないと分かりませんね。言葉だけでその人を説明するのには限界がありますから。実際に相対しなければ、その人の本質は感じられませんよ」

「そうか。まあ、聡明な蓮華様が傍に置く程だ。孫呉にとっても有益な人物であるには違いないのだろうか……」

「蓮華様の人を見る目は確かですからね。そう言えば、その将が仕官に来たのって、何時頃なんですか？」

「正確には覚えていないらしいが、なんでも半年以上前だそう。全く、その間に何かあったらどうするつもりだったのか……」

冥琳様がこれ見よがしにため息を吐く。確かに、いかに雪蓮様とて半年はやり過ぎだ。もしその間に蓮華様の身に何かあろうものなら、悔やんでも悔やみきれない。とは言え、今の俺たちに出来ることなどたかが知れているのだが。

「文台様が亡くなつてから数年。領土を失い、袁術の客将に甘んじる事になってしまつた今の俺たちでは、例え蓮華様の身に何かあつたとしてもどれだけの事が出来たのかは、些か疑問ですけどね」

「そうだな。それが分かつていたからこそ、雪蓮も黙つていたのかもしれない」

「そう思うのでしたら、少しは手加減を——」

「それとこれとは話が別だ。私に隠し事をする時点で問題なのだよ」

そう言つて冥琳様がふんつと鼻を鳴らす。つまり冥琳様は、他の将はともかく自分まで今回の事を隠していた事が気に入らないんだな。まあ、雪蓮様と冥琳様はかなり長い付き合いと聞くし、その関係はもはや親友以上のものなのだろう。だとしたら、そんな相手が自分に隠し事をするというのは……なるほど、想像してみたら確かに気分が悪い。

今まで一緒に頑張つてきたのに、いきなり仲間外れにされた、そんな感じだろうか……たぶん。

「まあ、冥琳様だからこそ心配を掛けたくなかつたのかも知れませんか？」

「私だから？」

「はい。ほら、冥琳様っていつも忙しい身ですから、それに比例して相当疲れもたまっているのでしょうか？ 俺でも分かるんですから、それを雪蓮様が気づかないはずがないです。蓮華様の事となれば、冥琳様は他事よりも一層気を使うでしょうから、それで雪蓮様は今回の事を話さなかつたんだと思います。……もしくは、本当に忘れていたのかもしれませんけどね」

俺はそう言うのと最後に苦笑を浮かべる。前者も後者もどちらもあり得るだけに、きつとこうだとは断言できないところが、また雪蓮様らしい言えばらしい。まあ、希望で言えば前者であつてほしいと思う。と言うか、後者であつたならばこれはもうひたすら呆れるしかない訳で、出来れば一臣下としてそんな事にはなりたくない。王としての信用問題にも関わる事だけに。

「とにかく、その将に関しては一且横に置いておきましょう。それよりも今は目の前の事に集中するべきです」

「ああ、そうだな。それに、いずれは顔を合わせる事になるのだ。今ここでどうこう言つても、詮無きことか」

「そういうことです」

そう、いずれは顔を合わせる。それはつまり、袁術によつて分断され大陸各地へと飛

ばされた孫家の重臣たちが再集結する時。その時のためにも今はまだ雌伏の時と捉え、
袁術の命に従う忠実な客将を演じ続けなければならぬ。全ては静かに、密かに、牙を
砥ぐ音すらも立てず、親しき者以外には気づかせず。

ただその時を待ち続ける。今はそれで良い。

「さて、まだ日も高いですし、冥琳様も船内で少しお休みください。見張りは引き続き、
俺が務めますので」

「そうか。ならその言葉に甘えさせてもらおうとしよう。しっかりと頼むぞ」

「お任せ下さい」

冥琳様を安心させるよう、俺は笑顔を浮かべて応える。その思いが伝わったのか、冥
琳様はふっと小さく笑みを浮かべると、最後にもう一度だけ俺に向けて頼むと言い、そ
してそのまま船室へと姿を消した。

第二話

夜、光源が月明かりのみと心許ない闇の中で、それは突然に起こった。

俺たちの船団を囲むように、どこからともなく現われた複数の船。そこから煌々と燃え盛る火を灯した火矢が一斉に放たれ俺たちの船を襲う。言うまでもない、今回の討伐目標である江賊たちのお出ましと言う訳だ。

余程上手く奇襲が成功した事を喜び、勝ち気になって血気が逸ったのか、勇ましい声を上げながら江賊達が自ら船を寄せてくる。それがこちらの策であることも気づかずに……。

ゴウンゴウンと鈍い音が響くと共に船が横に激しく揺れる。と同時に江賊達がこちらに乗り込もうとしたその瞬間、船の縁の影に身を隠す様に甲板上でうつ伏せになって待機していた俺たちは、江賊が乗り込むよりも早く、武器を手にした状態で素早くその場に立ち上がった。

「敵が畏に掛かった！ このまま一気に殲滅せよ！」

「「応っ!!」」

勇ましい応答が夜の闇に響き、俺の声を合図に一斉に点火された松明が闇を振り払っ

て辺りを照らす。出鼻をくじかれた江賊たちはすぐさま船を離して離脱を試みるがもう遅い。船が離されるよりも早く、俺たちは江賊の船へと勢いよくなだれ込む。

「はああああー！」

雄叫びをあげながら鉄鎚を振り下ろす。最初に乗り込み、そして最初に振るった俺の一撃が、オロオロと動揺していた賊の頭蓋を鈍い音と共に粉碎した。

「俺に続けっ！」

誰よりも先に敵船に乗り込み、誰よりも先に敵を討つ。そんな俺がこうして叫べば、後に続く兵達の士気は猛烈な勢いで上がる。我をもと思つた兵士達が、俺自身が気圧されるほどの勢いで背後から俺を抜き去り、目に映る賊達を次ぎ次ぎに葬っていく。そしてその中には、見慣れた人物の姿もある。

露出の多い赤の装束を纏い、桃色の髪を風に靡かせながら家に代々伝わる宝剣を躊躇無く振るうその姿。見間違えようもなく、孫呉の王たる孫伯符の姿だ。

「また雪蓮様は……」

戦場のど真ん中だと言うのに、どうしようもなくため息が漏れる。雪蓮様曰く、王たる者は先陣に立ちその勇姿を皆に示す必要があるとの事だが、そんな事をしなくとも雪蓮様が王たる器である事は皆が知っている事なのだし、それに高々賊相手に武を振るつては雪蓮様の名が落ちると言うものだ。

それに今は乱戦に等しい状況。確かに雪蓮様は強いが、それでも戦場に絶対は無い。もしもの可能性だつてあるのだから、こういつた状況下には正直出てきてほしくないんだけど……。

「どうしたもんかね……」

一度戦場に出てしまった雪蓮様を止めるのはかなり難しい。孫家代々の遺伝らしいのだが、雪蓮様は戦場に出て血を見ると興奮が強まって手がつけられなくなる。そんな、返り血の血化粧で全身を赤く染めた雪蓮様を止めに行くのは、これはもう死地に赴くと同じくらい勇氣、と言いか覚悟がいる。

興奮しても流石に同士討ちまではしない雪蓮様だが、纏つてる覇氣やら殺氣やらは尋常じゃない。面と向かつて向き合うなど勘弁してほしい。

「となると、雪蓮様を援護する方向で動くしかないよなあ……つと、おらあー！」

どうしようかと思案中の俺に斬りかかってきた賊を、手加減無く鉄鎚で殴り殺す。まったく、少しくらいは考える時間を与えてほしいもんだよ。主に俺と冥琳様の胃のためにも。と言うのも、戦いの後の雪蓮様の興奮を取り除く役目は一括して冥琳様の役目だからだ。その方法がこれまたとてつもなく難儀な方法で、どう説明すればいいのかわからない。雪蓮様の興奮を、冥琳様が文字通り体全身で受け止めるともい言えればいいのかな？ ともかく、それをやると疲労やら何やらで、その日一日は冥琳様が動けなくなる。

すると冥琳様が手をつけられない分の仕事か、当然俺たち中間管理職の將軍勢に回ってくる訳で、しかし俺の他にもう一人いるあの人は、ぶっちゃけサボリ癖があるために、結果俺の元に仕事か押し寄せてくる。

正直、あの仕事の山はもうごめんだ。かつては俺の父である凌操が手際よく仕事をこなし、かつもう一人の將軍の手綱を握っていたから一日程度は冥琳様が抜けても問題はなかった。おやじが夏口の戦いで戦死した、あれから既に一年以上が経つが、いかにおやじこと凌操が俺たちにとって助けになっていたのかが、今更になって実感できる。

「その息子の俺が、こんなところで手間取る訳にはいかないよな！」

そんなおやじの仇だつてまだ探し出せていないのだ。こんなところで手間取つて限りある時間を無駄にしてたまるか。俺は少しでも多くの時間を、戦から帰つた先に待ち受けているであろう政務地獄に割くため確保せねばならぬのだ！ 仇に関してはまあ……追々捜す事にする。おやじには悪いが、もう政務に明け暮れて徹夜するのは嫌なんだ！

「だからさっさと、降伏しやがれえええーっ！」

袁術の命令だからとか大陸の平和のためとか、そんな事はお構いなしに、今の俺はただ俺の平和のためだけにがむしゃらに戦鎚を振るう。鉄鎚での撲殺ゆえに返り血はそれほど酷くはない。その代わりと言う訳ではないが、俺が鉄鎚を振り回す度に揺れる

凌家の証たる朱の陣羽織が、さながら鮮血を模しているかの様に宙を舞う。

「あの赤い陣羽織……それに二本の鉄鎚。賊殺しだ、鉄鎚の賊殺しだあ！」

「だあああ！ その名前で俺を呼ぶなあああ！」

「ひっ——ごがつ……」

目の前で聞きたくもない俺の二つ名を叫ぶ賊を、轟天爆砕とでも叫び出したくなるほどの勢いでぶつ飛ばす。本当に、本当に遺憾ではあるが、先ほども言ったように今の俺の賊達の間での通り名なのだ。理由は言わずもがな、俺が鉄鎚を操って賊討伐を繰り返しているからだ。

俺は孫策軍の中でも率先して賊討伐に参加しているため、賊と戦闘する頻度が多い。その際は殆どの賊は討伐されるか降伏するかなのだが、まれに追撃を逃れて生き残る奴がいる。恐らくだが、そんな奴らが俺の姿を見て付けた通り名が、先ほどの恥ずかしい名前なんだろう。

自分で言うのもなんだが、朱の陣羽織に鉄鎚と俺は何かと目立つ格好なため、最近は賊と戦う度にあの名前が呼ばれる。その度に俺の羞恥心が大いに刺激され、結果精神的な疲労が激増する。そう思うと、もしかしてこいつらわざとやってのか、などと勘繰りたくなる時もあるほどだ。

……もし本当にわざとなら、生まれてきた事を後悔させてやるのだが。

「どうした鉄鎧の賊殺し。まさかもう限界とは言うまい？」

そしてこれだ。背後から聞こえてきた冥琳様の声に、俺は大きいため息を吐く。こうやって身内の誰かと一緒に戦場にいる場合、あの通り名が叫ばれると必ずと言っていいほどその身内に冷やかされるのだ。まあ、身内と言っても雪蓮様と冥琳様、それともう一人の中間管理職こと呉の宿将の黄蓋——祭さんくらいしかいないのだが。だとしてもあの名前を呼ぶのは勘弁してほしい。割と切実に。

そうして俺は、やり場のない憤りを賊にぶつける羽目になる。すると戦果が上がり、賊は更に俺を恐れ通り名がさらに浸透する。それがまた次の賊討伐で繰り返される……もはや負の循環だ。もしや冥琳様はこれを分かった上で俺を冷やかしているのか……だとしたらあれだね、凄く黒い。どこがとは言わないけど。言った瞬間、色々な意味で俺は死ぬ。

「……うん、死ぬる」

冥琳様を敵に回す、そんな想像をして冷や汗などを流していると、俺の耳にある音が聞こえた。

チリン……

「っ!？」

戦場に響く微かな鈴の音。あの日も確か、風に乗って鈴の音が聞こえた気がした。い

や、もしかしたら空耳かもしれない——

チリン……

いや、聞こえた。今度こそはつきりと聞こえた。間違いない、鈴の音だ。しかも何気に近い。恐らくはこの奥、乱戦状態の甲板の向こう側の縁、つまりは今俺がいるここより真反対の場所だ。確かめなくては、この鈴の音を鳴らす奴が、あの黒布の奴かどうか。そう思い至った瞬間に、俺はその場から放たれた弓矢のごとく駆けだしていた。味方の兵達の間をすり抜け、立ちふさがる敵兵を一撃で押し、邪魔する者は全てなぎ払う勢いで疾駆する。後ろで何やら冥琳様が叫んでいる気がするが、今はそれどころじゃない。命令違反の罰は甘んじて受けるつもりだ、だから今だけは俺の好きにさせてほしい。

心の中で冥琳様に謝りながら、俺は駆ける。横を通り過ぎる奴らには目もとめない。最低限、俺の進路上にいる奴らだけに対応する。そして雪蓮様の横を通り抜けようとした瞬間、剣を振るう雪蓮様と目が合った。

既にかなり気が昂ぶっているんだらう。鋭い目付きのまま、しかし雪蓮様は視線だけで俺に領いた。雪蓮様のお墨付きが貰えた、ならばもう躊躇する必要はない。

俺は同じように雪蓮様に視線で領き返すと、近くで味方の兵士に斬り掛かろうとしていた賊の方へ駆ける。いきなりの俺の出現に怯える賊の顔を、その場で跳躍し右足で正

確に踏みつける。下から聞こえる賊のくぐもった叫び、俺は気にすることなく再び足に力を込め、そのまま勢いで甲板の反対側に向けてさらに跳躍を繰り返す。

人を踏み台にした二段跳躍。人の身長分、高度を稼げたその跳躍は一気に目的地へと俺を近づける。ポカんとする賊たちの頭上を越え、とうとう俺は鈴の音の発信源へと降り立つ。着地した瞬間飛びかかってきた奴らは即ぶつ飛ばした。もし鈴の音を鳴らしているのが奴ならば、この場に邪魔者はいらない。

邪魔者を排除し、そして俺は目を向ける。その先にいたのは、長い黒布を首に巻いて口元を隠し、チリンと鈴を鳴らす者。あの時、夏口の城で見た仇の姿をした者が俺の目の前にいた。

「ようやく見つけた。あれから一年……ずっと捜してた」

「……」

そいつは何も答えない。代わりに腰から蛮刀を引き抜き俺に向かって構えた。

「最初からそれが望みかよ。だったら話は早い、おやじの仇……討たせてもらう」

両手の鉄鎚を強く握りしめる。あれほどの弓の腕前を持つ奴だ、部下の賊はともかくこいつはそれなりに強いはずだ。緊張感を高めつつ相手の出方を伺う。するとそいつは、何の合図も無く突然俺に向かって走り出し、蛮刀を振り上げ猛然と俺に斬りかかってきた。

……あり得ないくらい隙だらけの姿で。

「おらあー！」

「がっ!？」

とっさの事と困惑の所為か、鉄鎚ではなく足が先に動き仇のガラ空きの胴を蹴り抜く。低い男の声で短く悲鳴を挙げると、仇と思わしき男は体をくの字に折りながら情けない姿で吹っ飛び、受け身もとらずに甲板の上を転がると、そのままそこで動かなくなつた。

「……」

目の前の光景に頭の処理が追いつかず、俺はその場に茫然と立ち尽くす。はて、おかしいな。俺の親父を殺した奴がこんなに、こんなに……えつと、なんだっけ。

「弱すぎるだろ……」

そう、それだ。よく言った俺の口。そうだ、俺の親父を殺した奴がこんなに弱いはずがない。頭脳明晰、運動神経抜群とまで要求するつもりはないが、せめてもう少し俺と張り合う位の実力は持つておくべきだろう。そのどれも持たずに変わった趣味なら持つてますとかほざいてみる、十秒でひき肉にしてやれる自信が俺にはあるぞ。

「頭が、頭がやられたあああー!」

なんか後ろで叫んでる奴がいるが気にしない。お命だけはとか、降伏しますだとかも

聞こえるけど、今の俺は気にしない。それよりも大事な事がある。甲板で盛大に気絶している賊の頭の元へと俺は近づくと、白目をむいて呑気に気絶してるその顔面に、必殺の凌統張り手を繰り出す。

バツチーンと快音が響き渡り、頬を赤く腫らした頭が目を覚ます。そして俺の事を視認すると、すぐさまその場で命乞いをし始めた。

「どうか、どうか命だけはお助け下さい！」

「そんな事はどうでもいい」

「ひっ！」

怯える賊の胸倉を掴み、持ち上げて立たせる。とりあえず、こいつはあの時の黒布じゃないと仮定してだ。ならどうしてこいつが同じ格好をしているのか。もしかしたら仇と顔見知りか、何か関係があったのかもしれない。それならば少しくらいは仇に繋がる情報を持っているはずだ。

「おい、お前。その格好、一体何の意味がある」

「か、格好って——」

「首に巻いた黒布と、腰に付けたその鈴だ。一体何の意味がある」

「ひいひい！ 言う、言うから！」

少し殺気を強めた俺の視線に賊は怯えながらそう返すと、早口にその理由を話し始め

た。

「甘寧だ！ 甘寧の格好を真似ただけだ！ このあたりの大抵の賊は、この格好するだけで俺に従ったんだ！」

「誰だ、その甘寧ってのは」

「江賊だ！ それも馬鹿みたいに強い！」

なるほど。その甘寧って名前の強い賊になり済ますことで、こいつは賊の一群を形成したという訳か。しかしこれで分かった。おやじを殺した仇はこいつではない。その甘寧と言う名の賊がかなり怪しいところだろう。夏口の戦いでは敵方に傭兵の姿があつたから、あの時に雇われていたとしてもおかしくはない。

「……そいつは今、どこにいる」

「し、知らねえ！ ……半年近く甘寧たちの姿は見てねえ！ けど風の噂で随分前に足を洗ったって聞いたから——」

「なにっ!？」

「ぐえっ」

賊の言葉に俺は思わず掴み上げる手に力を込める。

俺の親父が死んだのは一年前。腕の立つ元江賊の将が蓮華様の元に仕官したのが半年前。そして今の賊の言葉……偶然か？ いや、それにしても時期が合いすぎだ。しか

しそんな、まさかこんな事、あり得るはずが……。

「……その甘寧の姿、お前は見た事あるのか。男か、それとも女か」

「女だ！ 紫の髪に目つきの鋭い女だ！」

「そうか……分かった」

「じゃ、じゃあ、命だけは助け——ごはっ」

何事かを言おうとした賊の鳩尾を拳で突き気絶させる。蓮華様の元に仕官した元江賊のその将が、もしかすると俺のおやじの仇かもしれない。だが例えそうであろうと、今の俺にそれを確認する手立てはない。しかし冥琳様も言っていたように、いずれは顔を合わせる事になるんだ。その時まで件の将が蓮華様の傍にいるかは分からないが、半年の時間で蓮華様の側近にまでなつたくらいだ。早々に暇を出したりはしないだろう。ならば俺は、その時が来るのをじっと待つだけだ。

掴んでいた賊の胸倉を離し、その辺りに放り捨てる。気が付けば背後の戦闘音は鳴りをひそめ、ほとんどの賊が軒並み捕縛された事で戦いは終わりを告げていた。遠くで聞こえていた剣戟も聞こえないから、恐らく祭さんの方も手際よく鎮圧し終えたんだろう。

兵士達が賊達を縄で縛りあげる、そんな中を冥琳様が俺の方に向かって歩いてくる。そこまで怒っている訳ではないみたいだが、それでも浮かべている表情には厳しいもの

が見て取れた。

「先ほどの命令違反の理由……説明してもらえないか？」

「はい。お話しします」

そして俺は、駆けだしたその時から今に至るまでの事を要点だけを纏めて簡潔に説明する。冥琳様は俺の説明を聞き終えた後、転がっている賊を一瞥し、なるほど小さく呟いてため息を吐いた。

「そう言う理由なら、まあ気持ちはわからんでもない。だが、一軍の将が私情で持ち場を離れるのは、許されることではないぞ」

「分かっています。ですがそのおかげで、おやじの仇に大きく近づく事が出来ました」

「甘寧、だつたな確か。雪蓮が言うには、蓮華様の文には再会した時に紹介したいと書いてあったから、名前までは記されていないなかつたそうだ。件の将が凌操を殺した人物かどうかは、まだ分からんよ」

「ええ。ですから待ちます。俺たち皆が集結する、その時まで」

これが偽りの無い俺の本心だ。おやじの仇は確かに討ちたい。だが、それよりも優先すべき事が有る事くらいは理解しているつもりだ。今回はその優先順位が、おやじの仇についてのほうが上回つたに過ぎない。それも明確な情報を手にいれた今、これからは行動は自重するつもりだし。

「とりあえず、浩牙の処罰に関しては城に戻ってからだ。まあ、お前が頭を討ち取ったおかげで討伐が手早く済んだ事もある。それほど重い処罰は与えないから、安心しろ」

「うへえ……お手柔らかにお願いします」

げんなりする俺の姿に冥琳様は苦笑を浮かべると、踵を返して船室の方へと戻っている。恐らく雪蓮様の相手をするためだろう。流石に船室でアレをする事は無いと思うが、それでも雪蓮様を抑えるのに冥琳様は苦勞することになるはず。まあ、幸いにして祭さんの船団がこっちに合流しようと近づいてきてるし、後の始末は冥琳様抜きでも問題ない。

とりあえず、俺は気絶して転がっている賊の頭に近づくと、その手をしっかりと縄で括って捕縛した。

第三話

袁術によつて江賊討伐を命じられた俺たちは、無事にその任を果たして帰還した。今回の討伐では人的被害は少なく、かつ江賊所有の船舶と江賊達と言う貴重な人材を俺たちは手に入れる事が出来た。一部の野心の見える者は除き、江賊を正規兵として登用したという訳だ。

袁術に戦力を分断されて以来、俺たちの兵力は著しく低下している。だからこうして、袁術の目を盗みながら少しずつでも戦力を確保する必要がある。元江賊とは言え、数百人の水上戦の猛者。この数百人が加わる事は、今の俺たちにとっては喜ばしい事この上ない事だ。

江賊たちも、命を取られないばかりか兵役にある以上は最低限の衣食住を保証されるという事もあって、この提案には納得してくれている。本来ならば罪人として処刑される立場にあるのだから、命が有る分だけ増しと思つたのだろうか。まあ、一応謀反の対策として江賊たちは各部隊に分けて配置される事になつたし、そもそも一部の江賊達は日々の生活に不安を感じる必要が無くなつたためか、喜んでゐる者もいた。

……俺の部隊に配置されることになつた奴らが若干怯えた様子を見せていた事には、

流石の俺も傷ついたが。

まあ、それはともかく。俺たちが予想以上の戦果を挙げたことよつて、雪蓮様の勇名は地元の民達の間広がる事になった。今は小さな波紋に過ぎないが、時間が経つにつれてこの波紋は大きくなつていく事だろう。風評の広がりとはそういうものだ。いや、そうなるように既にこちらからも手を打つてあるからより確実なものとなるだろう。

ちなみにこれについては袁術が不満を露わにしたようなのだが、袁術が何かを言う前に雪蓮様が処刑した江賊達の生首を袁術にまぎまぎと見せつけながら戦果を報告することで即座に黙らせたらしい。まあ、正確には干からびかけの生首に恐怖した袁術が、泣きながら悲鳴を上げて雪蓮様を追い返したらしい。

干からびかけのために目の部分が落ち窪み、表情は死への恐怖一色で歪んだ生首。そんなものを目の前で見せつけられた日には、俺だつて気分が悪くなる。まだ幼さの残る袁術からすれば、それは尚更な訳で。ぶつちやけよく漏らさなかつたなあ、などと不謹慎な事を思つてしまつたりもする。まあ、あの年になつて流石にそれは無い……と、言いきれない自分があるな、うん。

とりあえず、これが戦を終え帰還してから今に至るまでにあつた出来事だ。そして今、俺は何をしているかと言えば――

「やはり、こうなるか……分かつてはいた、分かつてはいたが……」

などとぼやきながら、目の前の書簡を必死に処理している状況である。ちなみに処罰の方は棒給の減額だけで済んだ。それでも結構つらいことには変わりないけど。しばらくは儉約生活に勤しむ事になる。

まあそれはそれとして。今は目の前の仕事をどうするかだ。当初の予想通りに雪蓮様と冥琳様は閨へと消えてしまい、やはりというか政務の効率は大幅に低下。冥琳様の抜けた穴はもう一人の軍師……周喩の弟子である陸遜こと穩が頑張ってくれているが、それでも俺にはこうしてしわ寄せがきている。本来ならもう少し多く来る予定だったんだけど、そこはほら……逃げ出す、もとい仕事をサボろうとしていた祭さんを俺が先回りして確保した。

今頃は穩と一緒に政務に励んでいる事だろう。俺に見つかった時の祭さんの気まずさ大爆発な表情は何気におもしろかった。全く、自分でも悪い事なのが分かつてるなら、わざわざさぼろうしなくても良いだろうに。何かあってもせいぜい翌日の太陽が黄色く見えるくらいだし。ああでも、女性からしてみれば肌が荒れる原因になるのか。

うーん、女性って結構大変なんだなあ。男の俺は精々、次の日起きてるのがしんどいくらいだ。いやまあ、男であろうと女であろうと睡眠は大事だけだね。急な出陣があった時、寝不足で体調不良とかだったら目も当てられないし。

「はあ……さつさと片付けるか」

正直、ここで愚痴ついても何も解決しないのだし、それよりも仕事を終わらせてしまふ事の方がずっと有益でもある。いつもより多い書簡の量には辟易するが、俺は観念して政務の処理に手をつける。筆を動かして早く仕事を片づけながら考えるのは、件の将の事。

蓮華様の所に半年前に仕官した腕の立つ元江賊。そして先の江賊の頭領が言っていた、半年前に姿を消したという仇と同じ姿をした甘寧という名の江賊。どちらも江賊であり腕が立つと言うが、果たしてこれは偶然なのだろうか。それともやはり、その件の将こそが甘寧であり、俺のおやじの仇なのだろうか。

もしそうだとしたら、俺は一体どうするだろうか。今では同じ孫家に仕える将。しかも蓮華様が信頼し、傍に置くほどの人物だ。いずれその者と対面したとき、俺は冷静でいられるだろうか。それとも怒りに身を任せて殺しに掛かってしまうだろうか。

正直、そうなってみなければわからない自分がここにいる。半ばおやじの仇が見つかるのを諦めてた所に、いきなり確信に近い情報が入ってしまった所為もあるのかもしれない。俺はその甘寧に明確な殺意を抱けないでいる。

こんな気持ちになつたのは生まれて初めてかもしれない。誰か特定の人物の事を考え続ける、そして初めての感情を抱く……もしかしてこれが、これこそが……恋？

「……そんな馬鹿な」

ないないない、あり得ない。初めて抱いた感情だから恋かもって、どこぞの乙女じゃあるまいし。しかも相手は親の仇かもしれない奴だぞ。そんな相手に恋をするとか、被虐趣味も良いところだ。不謹慎過ぎるにも程がある。と言うか、もしそんな奴がいるなら、俺が素っ裸にひん剥いて長江に飛びこませて浄化してやる。そうすれば頭も冷えるだろうさ。まあそれ以上に羞恥で顔が熱くなるだろうけどな。

「つて、うわ……しくじった」

少し熱くなりすぎたのか、筆に余計な力が掛かり、竹簡の文字が盛大に潰れる。とりあえず、書簡じゃなくてよかった。竹簡は表面を削れば書き直せる。書簡と違って嵩張るが、そこが竹簡の良いところだ。何より安いし。紙は貴重だからどうしても値が張る。帳簿なんかの重要案件以外は大抵竹簡で済ませるのが普通だ。

にしても今になって気づいたが、随分と仕事が進んでいる。時間もそれなりに経過しているみたいだ、太陽の位置が随分と変わっている。気づかない内に終わらせていただけに、ぶつちやけ内容が記憶にない。たぶん考え事に意識を割きすぎて、半ば無意識な状態で筆を動かしていたんだろう。ふっ、流星は俺。考え事をしながらでも仕事が出るだなんて、恐ろしい子！

……。

……これは、後で全部見直し決定だなあ。不備とかあつたら困るし。うん、憂鬱だ。凌統公積の憂鬱つてやつだ。

「はあく……さて、小刀はどこかなつと」

とりあえず一旦筆を置き、机の引き出しをこそごとと漁る。まあそこまで物が入つてゐる訳でもなく、小刀はすぐに見つかった。修正箇所を刃を当て、余計な所は削らない様に注意を払いながら小刻みに刃を動かす。シヨリシヨリと竹を削る音が部屋の中に響き、多少の削り屑を出して修正箇所がまつさらな状態に戻る。そして今度は間違えないよう、先ほどよりも意識を集中させて仕事に取り組む――。

「うがあああーっ！」

「浩牙さくん！ 助けてくださいー！」

うん、取り組もうとした矢先に、隣りの執務室から我慢が限界を越えたかの様な叫び声と、微妙にのんびりした名指しの救援要請……もとい悲鳴が、壁を通り越して俺の部屋にまで聞こえてきた。まあ、壁があつても所詮は隣りだし、多少の声なんかはさつきから聞こえてきてたけど、流石にこれは非常事態だと分かる。しかもどんがらがっちゃんと何やら騒がしい物音まで聞こえてくる始末……やだなあ、出来れば関わりたくないんだけどなあ。

「ええい、放せ穩！ 儂はお酒ちゃんと共に仕事をするのだつー！」

「そんなこと言つて、いつも仕事を後回しにされるじゃないですか！ 今日ばかりは絶対にさせませんからね！ こんな量を押しつけられたら、穩だつて死んじやいます！」

いや、流石に死にはしないだろう。過労で倒れるくらいだと思ふ。ああでも、過労も立派に死に繋がる要因だし、それはそれでまづいのか。

「ならば儂の幸せの礎となれい！」

「無茶苦茶言わないでください〜！ 浩牙さ〜ん、早く助けに来て〜！」

もう聞いてて悲痛になるくらい切実な穩の叫び。正直、お酒関連で祭さんに絡まれると碌な事がないんだけど。と言ふか果てしなく面倒だ。かといつてこの悲鳴を聞きながら仕事をするのも土台無理な話だし……ここは諦めて助けに行くしかないのか。じゃないと逆に、円滑な政務には戻れそうにない。はあく……仕方がないなあ。

今一度手にしていた筆を置き、軽く体をほぐしながら隣りの部屋へと向かう。最悪実力行使の可能性もあるため、体が固まったままだと怪我の元になる。肩や首を回したり、伸びをして背筋を伸ばしたりする度に体が鳴る。さて、一応は巻き込まれる覚悟を決めてつと。

部屋を出て移動し、すぐ隣りの部屋の扉の前……から少し離れたところに移動する。中から聞こえる阿鼻叫喚。部屋の中は大丈夫だろうか。主に書簡とか仕事関係の物品。墨が飛び散らかつて、はいやり直し、とかになつてるのは絶対に嫌なだけで。まづ

間違ひなく、いくらか押しつけられるだろうし。

「はあ……。祭さん、穩。入るよ——」

しばらく待機していても中の騒ぎが治まる様子は無い。仕方なく、俺はため息を吐きながら扉に近づこうとした、次の瞬間……。その扉が突然開き、と言うか俺に向かつて猛烈な勢いで吹き飛んできた。

「よつと」

まあ、こうなる事も予想はしていた。以前に経験あるし。なので吹き飛んできた扉を正面からがっちり受け止める。あーあ、蝶番が完全に壊れてる。これ、誰が修理するんだろ。扉をひとまず廊下に置き、部屋の方へと目を向ける。そこには、部屋の入り口の所でどうにかして外に出ようともがいている祭さんと、その腰に逃がさないとばかりに抱きついた穩の姿があった。

ちなみに書簡たちを庇ったか何かしたのか、穩は胸から腹にかけて墨で真っ黒になっている。加えて硯が胸の谷間に刺さったままと言う、これまたなんとも言えない状態。しかも若干涙目だ。うむ、なんて混沌とした光景だろう……。

「ぬおつ、浩牙か！ ええい、お主も儂の邪魔をするのか！」

「遅いです浩牙さん！ 早く祭様をお止めするのを手伝ってください！」

祭さんからは恨みのこもった視線を向けられ、穩からは藁にもすがるような視線を向

けられる。残念ながらこの状況にぞくぞくするような趣味趣向は持つていないが、代わりにとつと精神的な疲労を感じた。おやじ、俺は今あなたの生き様を実体験しているぜ。もう何度目にもなるけどな！ 今ならあなたの気持ちの方が分かり過ぎてつらいぜ！

「とりあえず、祭さんも穩も少し落ち着いて。そして穩は服を着替えてくる事。祭さんは俺と一緒に散らかった部屋の掃除。分かった？」

「ならばそれは酒を買ってきからする！ それでもよからう！」

「絶対にだめです。もしお酒を買いに行ったら、今日の出来事と、それから貸しにしてあるその他もろもろを全部、冥琳様にばらします」

俺の言葉に祭さんがうぐつと言葉に詰まる。幸いかどうかはわからないが、祭さんは色々と俺に借りがあるのだ。お金の事とか仕事の事とか、あと冥琳様に内緒の色んな事とか。

「ぬう、最近ますます凌操に似てきおってからに……」

「褒め言葉として受け取っておきます。ほら、手早く片づけて仕事を終わらせましょう。穩も早く着替えてきて」

「むう……分かった」

「分かりましたよう。くれぐれも祭様を逃がさないでくださいね」

俺の言葉にそれぞれ応え、祭さんは逃走を止め穩は真つ黒になった服を自室へと着替

えに部屋を出ていく。穩が部屋から離れた事を確認し、俺は大きいため息を吐いた。

「やめんか、景氣の悪い」

「誰の所為で気苦労が多いのか、一時ほど語り合つても良いですか?」

「嫌に決まつておろう。全く、最近のお主の背には凌操と周喩の二人の影が見えるわい」

「なにそれ怖い……」

もしかしておやじの亡霊とか、冥琳様の生き霊とか憑いてたりしないよね? ほら、

祭さんの行動が気がかりすぎて落ち着いていられなくなつた二人の魂が……うう、寒気が。

「ああ……お酒ちゃんが飲みたいのお」

「はいはい、仕事が終わつたら奢りで飲みに行きま——うお!」

行きましよう、と言いきる前に、祭さんの顔が俺の目の前に現れる。その目には言い知れない光が宿っている。もう完全に獲物を前にした狩人の目だ。と言うか祭さん、顔が近い。

「本当だな? お主の奢りで飲みに連れて行つてくれるのだな?」

「本当ですよ! ですから早く作業してください。今日中に終わらないと飲みにも行けなくなりますよ?」

「うむ、分かつた。そう言う事なら早くしよう」

先ほどまでの気だるさが嘘のようにてきばきと部屋を片付け、未処理の書簡たちを机の上に並べる祭さん。何というか、お酒のためだけにここまで出来る祭さんって、ある意味凄い気がする。この気概をもう何割か、通常運行に割いて欲しいんだけどなあ。

「戻りましたよ〜って、掃除が終わっちゃってる〜!？」

「遅いぞ、穩。待ちくたびれて先に初めてしまったではないか」

「……祭様、掃除中に頭でも打ったんですか？」

「どういう意味だ、それは」

「い〜え〜! 別に!」

額に青筋を浮かべた祭さんの低い声に、穩がごまかす様にしてあははと笑う。まあ、さつきまで駄々をこねてた人がここまで変われば、そりや疑いたくもなるよな。俺だつて変貌ぶりをこの目で見てなかつたら驚いてる。

「じゃ、俺は自分の部屋に戻りますんで。先に終わったらこつちに手伝いにきます」

「うむ、よろしく頼むぞ」

「はいはい。頑張ってくださいね〜」

筆を動かしながら応える二人に安心し、部屋を出た俺は立てかけてあつた扉をがこんつと入り口にはめ込む。相変わらず蝶番は逝ったままだけど、こればかりはどうしようもない。後で誰かに修理を頼んでおくとしよう。そうして自分の執務室に戻った俺

は、乾きかけていた筆に墨を吸わせると途中になつていた竹簡を仕上げるために筆を走らせた。



夕方、無事に冥琳様の不在を乗り切つた俺は、祭さんと共に町の酒屋に飲みに来ていた。勿論、祭さんとの約束を果たすためである。自分から奢ると言つた手前、こうして条件通りに夜までに仕事を終わらせた祭さんを裏切るような事は出来ない。減給食らつてるから、正直懐事情はあまり芳しくないけども。

「ふはあく！ やはり仕事を終えた後の酒は格別じやな。のう、お主もそう思わんか浩牙」

「まあ、達成感！ みたいなものは感じられますね。はい、どうぞ」
「おつ、すまんな」

祭さんの空いた杯にとくとくと酒を注ぎ、同じく空いている自分の杯にも酒を注ぐ。そして祭さんと示し合わせたように杯を傾け、酒を同時に喉に流し込む。うん、上手い。流石それなりの代金を払つただけの事はある。偶に高いだけで味は三流みたいなものもあるけど、どうやら今回ののは当たりの様だ。高かつたけど。

「ふう、やはり酒は人生の伴侶よな」

「それも良いですけど、祭さんには人の伴侶を出来れば見つけて欲しいところですね」

「ふん、せめて儂を屈服させるくらいの腕を持つものでなければ、話にならない」

「なんて高い選考基準……」

祭さんを倒せる男とか、大陸中を捜しても早々見つからんだろうに。祭さん、このまま独身を貫くつもりなのか？ 祭さんの生き方について他人の俺がどうこう言う資格は無いから、なんとも言えないけど。

「そう言うお主はどうなのだ。好いた女子の一人もおらんのか？」

「残念ながら。それに今はまだ、好いた惚れたに気を割けるほどの余裕ありませんし」

「そうかもしれないが……儂はお主のそう言ったところ見た事がないのでな」

「相手がいませんから」

好いた惚れたをしようにも、俺にはその相手がいないのだから仕方がない。このままだと、俺も祭さんみたいに長く独身を貫くことになるかもしれない。健全な一人の男としては、是非ともお相手を見つけたとは思っているのだが。

「ふむ、そうか？ 幼平はどうなのだ？」

「周泰……明命は、どっちかと言うと妹みたいな感じですね」

蓮華様と共に幽閉状態にある、呉の諜報部隊の一切を仕切る将、周泰。小柄に長い黒

髪、俊敏かつ剣の腕も大したものであり、しかし猫が大好きという可愛らしい少女なのだが、偶におつちよこちよいな所があったりして心配をさせる。だからなのか、俺としては明命は妹に近い感覚だ。残念ながら、恋愛対象には見れない。

「お主、もしや枯れておるのではないか？」

「失礼な、これでも立派に一人の男です」

「にしては浮いた話が少なすぎる。今にしても、少しくらいは動揺を見せてもよからうに」

「動揺を見せたら、祭さんに弄られるじゃないですか」

「ふむ……それもそうか」

いやいや、そこで納得されると俺がなんとも言えないに気持ちになるのですが。と言うか弄る気満々で話題を振ってきてたのか。相変わらず油断の出来ない……これが呉の宿将、黄蓋の罠か！

「何やら失礼な事を思われた気がする」

「気のせいでしょう。はい、どうぞ」

「むう……そうか？」

若干首を傾げながらも、祭さんはまあ良いと呟き酒を飲む。俺も今日は飲み明かすつもりで来たので、杯が空いたらすかさず酒を注ぎどんどん腹に流し込む。どうせ明日、

俺は非番だ。酔いが抜けきらなくても問題はないだろうさ。

そうして酒瓶の数が二桁に達しようとしたその時、ぼつりと呟く様にして祭さんが俺に話しかけてきた。

「……凌操の仇を、見つけたそうだな」

「……はい」

それは俺が朝、仕事をしながら考えていた事。祭さんにはまだ話していないはずだが、どうやら冥琳様か雪蓮様辺りに聞いたみたいだ。

「それで、お主はどうする」

「分かりません。朝もその事をずっと考えていましたけど、答えは見つかりませんでした」

そう……結局、俺は仇を前にした時どうするかと言う自問に答えを見つかる事が出来ずにいた。どうしても分からないのだ。その時になって、自分が何を思いどう動くのか。

「憎い、とは思わぬのか？」

「どうなんでしょう。いえ、確かにそう思うところはあります。でも、戦場で殺し殺されるのは当たり前で、自分が相手を殺すからには相手によって自分が殺される覚悟をする必要がある。おやじは多くの敵を殺して、その結果味方を守ろうとした敵によって殺さ

れた。人の生死は戦場の常、そう考えると……なんだかその仇を、憎み切る事が出来ないですよ。甘い考えだつて事は、分かつてるんですけどね」

「……」

俺の言葉に祭さんは沈黙する。それに俺は構わず、言葉を続ける。

「それにもしかしたら、その仇は今や孫呉の一員で、俺の仲間、家族になる者かもしれないです。そんな相手を、例え親の仇とは言え殺すなんて事……俺には出来そうにありません。その人が蓮華様の信頼を受けている者ならば尚更です」

「だからお主は自分の心には蓋をし、孫呉のために己を殺すと言うのか？ それがただの逃げである事は、お主も分かっているはずであろう」

「分かっています、そんなつもりはありませんよ。だからこそ迷つてるんです。どうすればいいのかつて……」

連続で喋り過ぎて渴いた喉を潤そうとして、ふと杯がからである事に気づく。すると祭さんが、図つたかのように俺の杯に酒を注いでくれた。

「ありがとうございます」

「気にするな」

一言お礼を言い、注いでもらった酒を一気に飲み干す。体の底から登ってきた熱が、少し俺を安心させてくれた様な気がした。

「正直、どうするかは今はまだ決められないと思います。何をするにしても、要はその人次第なんです。その人と直接対峙しない限り、この問いの答えは出ないんですよ、きつと」

「そうか。まあ、それでもよからう。ぶつつけ本番と言うのも、なかなかどうして悪くない。今ここで、急いで答えを出す必要などないのだから」

そう言うのと祭さんはもはやこの話は終いだと言わんばかりに、酒を酒瓶から直接喉に流し込む。豪快と言うかなんというか……まあ、祭さんらしいと言えば良いのかな。

「さて、浩牙。今日はここで飲み明かすぞ」

「俺は明日非番なんで構いませんけど、祭さんは明日仕事でしよう？」

「知らん。そんなものは冥琳に任せておけばよい。……付き合ってくれるのだろうか？」

「はあく……ははっ、勿論ですよ」

祭さんの言葉に、俺は苦笑しながら頷く。祭さんの言う付き合ってくれが、一体何に付き合う事なのか……飲み明かす事についてか、それとも冥琳様からの説教についてなのか、俺には分からない。もしかしたらそれ以外の意味なのかもしれない。

けどまあ、ともかく今は飲み明かすという意味で捉えておこう。俺のつまらない相談に乗ってくれたお礼も兼ねて。

その日、俺たちは結局、酒屋の主人に泣いて追い出されるまで二人で飲み続けた。

第四話

俺達が江賊討伐の任より帰還し、数日が経過したとある日。一人の使者が俺達の下へと駆けこんできた。漢王朝からの使者だと告げたその男は、大陸各地で多発する反乱によつて世は阿鼻叫喚の時代になったと仰々しく俺達に告げる。

黄巾党……と、誰が名づけたのかは知らないが、そう呼ばれるようになった賊の一回は、凄まじい勢いでその勢力を伸ばし己が欲望を充たさんと各地で猛威を振るつており、漢王朝はその対処を各地方の有力諸侯たちに命じているとの事。使者が訪れた要件もまさにそれだった。それにしても規模が大きいとはいえ、たかが賊の反乱を抑え切れないとは。どうやら想像以上に、漢王朝の力は衰えが進んでしまっているらしい。もはや王朝とは名ばかりで、その中身は既に形骸化していたようだ。

さて、漢王朝の形骸化はともかく。各地方の有力諸侯となれば、それには当然袁術も含まれる事になる。そして予想通り、使者の訪問から日を置かずして、袁術から雪蓮様に召喚命令が下った。呼び出した理由は十中八九、黄巾党討伐についてだろう。

現在、荊州で暴れている黄巾党は北と南の二部隊が確認されている。その内、規模が大きく本隊と思われる方は北に展開している部隊。そして袁術の性格からして、ほぼ確

実に北の部隊の討伐を、袁術は俺達に押しつけてくるはず。戦力が分散し弱体化しているとは言え、精兵と名高い孫呉の兵。袁術はそんな俺達を思う存分こき使いたいらしい。

本人はその意図を隠しているつもりの様だが、俺達から見れば分かりやす過ぎて逆に癪に障る。雪蓮様も毎回、呼び出される度にそれを見せつけられてよく我慢できるものだ。ぶちぶちと不満を漏らしながら登城していった雪蓮様の気持ちも分かる。

だが文句ばかり口にしていても始まらない。雪蓮様が登城しているその間に、俺達は俺達でやれる事をやらなければならない。先を見越し、袁術の命が下つたら即、動き出せるようにしておく位はしておかなければ。とは言え、軍資金や物資、兵力すらも十分ではないのが俺達の現状な訳で。無い袖は振れぬ、とはよく言ったものだが、冗談抜きで俺達には余裕がない。雪蓮様が袁術からもろもろ引き出してくれる事を期待するしかないが、それを当てにし過ぎるのも良くない。

そんな訳で、目前に迫る難題打破のために駆り出されることになったのが、賊殺しの凌統こと俺だ。いや、別に通り名は駆り出される理由には関係していかないはず……たぶん。

そして今、冥琳様の献策の下、雪蓮様たちより先行して出陣した俺は、先日登用した元江賊たちを率いて黄巾党本隊と共に行動していたりする。身なりはいつもの正規軍

装備ではなく、急所のみを厚い革で覆う貧相な装備。武器も鉄鎚ではなく鈍らの蛮刀と、俺の装備はかなり気合の入った賊仕様である。

無論、部下の兵達も皆同じような装備だ。これならば一見して、俺達が呉の将兵だとは気づかれないだろう。兵達がまだ仕官して間もない元江賊たちである事も大きい。未だに賊特有の雰囲気は抜けきっていないゆえ、周囲から浮いているであろう俺の事を上手く隠してくれている。

まあ、俺もそれなりに賊っぽく振舞ってはいるのだが、やはりどうしても本職の様にはいかない。とは言え、向こうがその辺りを特に意識するという事は無く、むしろ取り入れるための交渉材料として結構な量の糧食を運んできたからか、黄巾党本隊の皆様方は快く俺達を仲間として受け入れてくれた。まさに糧食さまである。

冥琳様の献策した策の内容……それは内と外から同時に攻撃を仕掛ける事で敵部隊を攪乱し、指揮系統を寸断され混乱する黄巾党を火攻めをもって一気に敵部隊を殲滅するという、なんとも危険な策だった。危険というのは、勿論内側から攪乱する部隊が、と言う事だ。

当たり前だが、内側から敵を攻撃するには、当然味方の誰かが敵の懐に飛び込む必要があると言う事だ。そして今回、その任を担当するのが、今こうして黄巾党の部隊に潜入している俺達と言う訳だ。だからこそ賊の姿に変装し、心許ない装備を頼りにこうし

て息をひそめてゐる。

しかし、やはり危険である事に変わりは無い。なにせ周りの一切は全て敵なのだ。もし俺達が呉の部隊だと知られたら、その瞬間に包圍殲滅されて全滅は確定だ。仮に攪乱が成功したとしても、今度は引き際を誤れば黄巾党と共に火計に巻き込まれてしまう。この二つの危険性があるからこそ、冥琳様は連れて行く兵士を仕官して日の浅い元江賊の彼らに限定したのでだろう。無論、先に述べた理由もあるだろうが、俺としては恐らくこつちの理由の方が本命ではないかと思つてゐる。なぜなら、最悪の事態に陥つた場合は、彼らを囷にしてでも俺だけは帰還するよう、冥琳様に命令されてゐるからだ。

命の価値に優劣がある、そんな現実をまざまざと見せつけられた気がした。頭では理解してゐる、しかし心がそれを否定してゐる。部下を見殺しにする……そんな事はどうしても俺には出来そうにない。だからこそ、必ずやこの作戦は成功させなければならぬ。部下達を一人でも多く無事に生還させるために。恐らく今の俺は自分で自覚してゐる以上に集中してゐる事だろう。あるいは、それすらも冥琳様の策の内なのかもしれない。

だとすれば、流石は我らの大都督……腹黒さにかけては天下一だ。

ふふふつと黒い笑みを浮かべてゐる冥琳様を想像し、思わず口からため息が漏れる。それを不安の表れと思つたのか、今回の俺の副官を務める兵士の口から不安を滲ませた

眩きが漏れた。

「凌統將軍、本当に今回の作戦……成功するのでしょうか？」

「成功するのか、じゃない。成功させるんだよ。でなきや、俺達はここであの世行きさ。大丈夫、必ず上手く行くよ。お前の目の前にいる上官の二つ名を忘れたか？」

にやりと、意識した余裕の表情と共に俺は笑みを浮かべる。こんな時、二つ名が部下に知れ渡っていると言うのは便利だ。俺の二つ名は賊殺し……そして相手は黄巾党という名の賊。士気を上げるにはもってこいな二つ名だ。だからと言ってこの二つ名を好きになるようことは、到底無いだろうけども。

「でも、その姿では奴らも凌統將軍だとは気づかないのでは？」

「ふふん、その点に関してはぬかりは無い。ちゃんと鉄鎚と陣羽織は持ってきてる」

そう言ってちらりと俺は背負っている背囊に目配せする。装備に手間の掛かる鉄甲は流石に持つてきていないが、陣羽織と鉄鎚二本はこの背囊の中に入れてある。と言うか、作戦開始の合図は、俺が陣羽織を羽織った時だと部下達には伝えてある。何度も言うが、俺の朱の陣羽織は非常に目立つ。それが味方にしろ敵にしろ、だ。これも冥琳様が俺を潜入部隊に抜擢した理由だろうか……何というか、ここまでくると例え味方であつても軽く戦慄を覚える。絶対に冥琳様だけは敵に回したくない。

「將軍、顔が青くなっていますか……？」

「いや、なんでもない。ちよつと身内に凄い人がいる事を再確認してただけだから。良いか、何があつても絶対に周公瑾様だけは怒らせるなよ。分かつたな、絶対だぞ？」

「わ、分かりました。肝に銘じておきます」

俺が本気の形相であつたためか、副官が首をぶんぶんと縦に振る。無駄に威圧までしてしまい、顔も若干青くなつていた。

「まあ、なんだ。孫策様たちが来るまでにはまだ時間がある。しつかりと体力の温存はしておいてくれ」

「はっ。皆にもそう伝えておきます」

「ああ、頼むよ」

目立たず騒がず、されど何時でも動き出せるように準備だけは整えておく。俺達の務めの事を思えば体力の温存もまた重要だ。何せ確実に乱戦の真つ只中に身を置くことになるのだから。

この戦の後にどれだけの部下が生き残っているのか……正直、俺には予想もつかない。戦死者を出さない、などと言うのは夢物語も良いところだ。戦場に死者の無いことなどありえない。それが味方であれ敵であれ、聖人であれ罪人であれ、戦場では死が訪れる事に優劣は無い。

それでも、出来る事ならば部下達には生き残つて欲しいと……そう思わずにはいられ

なかつた。



荊州北部。黄巾党の脅威の迫るこの地を、孫の旗を掲げる軍勢が行進していた。孫策率いる呉の精兵たちである。孫策が粘り強い交渉の末に袁術からいくらかの装備と兵糧を引き出したこともあつて、戦の準備は今まで以上に整っている。江賊討伐に赴いた時とは雲泥の差と言えるほどだろう。

当初の予定通り、先行し既に黄巾党本隊に潜入しているはずの凌統を追う形で出陣した呉本隊。整然と行軍するその軍勢を、孫策は先頭立つて率いていた。馬の背に跨るその姿は、いつもの赤い衣を身に纏うのみで、鎧らしきものは一切装備していない。しかしその腰には孫家に代々伝わる宝剣がしっかりと提げられている。

変わり映えしない荒野を馬の上から眺めていた孫策は、不意に獰猛な笑みを薄く浮かべた。

「どうした雪蓮。何か面白いものでも見つけたのか？」

そんな孫策を見て隣りにいた周瑜が訝しげな顔をする。孫策は周瑜の方に向き直ると、今度こそその獰猛な笑みをはつきりと浮かべた。

「そうじゃないわよ。でも、ようやく戦乱が幕を開けると思うとね……ふふっ、やつぱりゾクゾクしてきちゃう」

「……浩牙が聞いたなら、ため息の五つは吐きそうな台詞だな、それは」

そう言いながら、早速周諭本人が孫策の台詞にため息を吐く。しかしもとより孫策が好戦的な性格である事を知っている周諭は、孫策に嫌悪感も恐怖心も抱く事は無い。いや、呉に集う全ての将兵は、そんな所も含めて孫策を自らが従うべき王として尊敬し、絶対の信頼を寄せている。非凡な強さと人を魅せる魅力を孫策は持ち合わせている。だからこそ孫策は王たる立場にいられるのだ。

「だがまあ、待ちに待った時である事は確かだ。これを機に、ようやく孫呉独立の一步を踏み出す事が出来る」

「ええ。母様が死んでから数年……本当によやくね」

先代である孫文台は数年前、その胸に秘めた覇道を為し得る事無く世を去った。そして孫文台の死を機に呉を含む旧孫堅領は朝廷の命により袁術の領土として引き継がれることになる。その土地の領主が死んだのだ、代わりの力ある者がその土地を引き継ぐ事は当たり前。それが朝廷からの命となればなおさらである。

孫策にとつては癩ではあるが、故孫堅の代わりとして指名された袁術は十分すぎる程の兵力と財力の二つを共にあわせもっていた。伊達に名門たる袁家に名を連ねている

わけではないと言う事だろう。しかし当の袁術本人は未だ幼さを残す未熟者。袁術を支え、実質袁術領の管理人と言える張勳も、周瑜ほど秀でた人物と言う訳ではない。それでも今日まで袁術を支えてきたその手腕は評価に値するところであり、また城攻めに關しては張勳の手腕に周瑜も一定に評価を下している。つまるところ、張勳は軍師としては非凡な人物であると言う事だ。

しかしその全ての高評価が、張勳が袁術を極度に甘やかす癖が有るといふ点で帳消しにされてしまっている。もう少しでも張勳が袁術に厳しく接していたならば、孫策とてここまでの鬱憤を袁術たちに対して抱く事は無かつただろう。独立を認めてくれていたならば尚更である。しかし逆に袁術を煽るような事をされてしまつては怒り以外に抱く感情が無いというもの。

加えて自分達をこき使いたがために、面倒を引き受ける代わりに独立を認めると言う約定を何度も反故にし、今回の様な面倒事までも押しつける。ここまでされては、孫策としてもただ独立するだけで済ますつもりはない。幸いにして今の漢王朝には地方の諸侯同士のいざこざに割り振るだけの力も無ければ余裕も無い。黄巾党による被害が各地で頻発している今ならば言わずもがなである。

そしてこの戦乱は孫策たちにしてみれば勇名を轟かす絶好の機会。名が上がれば人が来る。物が集まる。金が集まる。そうして少しずつ力を増していくことが、孫呉の独

立に繋がる。名を上げ力を得た、その暁にこそ、積りに積もった借りを袁術に返す。孫呉の独立を飾るための一つの華として。

「孫策様！ 前方に黄巾党本隊の敵陣を発見しました！」

孫策の下へ駆けこんできた兵士がそう告げる。待ち望んでいた時が来た事に、孫策の顔に笑みが浮かんだ。

「ありがと。さて、浩牙もいい加減待ちくたびれてる事だろうし……派手に行きましようか」

「久々の実戦ですからな、儂も腕がなるわい」

「その相手が黄巾党程度の賊と言うのが、物足りないにもほどが有るがな」

孫策に続き、黄蓋と周瑜にも笑みが浮かぶ。それは獲物を目前に捉えた狩人の如き寧猛な笑み。相手を自らの糧とするために、狩人はその力を存分に振るう。圧倒的な勝利、それは天下に名を轟かすために。

孫策が腰の宝剣を音高く抜き放ち天に掲げる。

「勇敢なる孫呉の兵士たちよ！ いよいよ我らの戦いを始める時が来た！ 新しい呉のために、先王孫文台の悲願を叶えるために！」

孫策の口上が兵士達にとつては戦の始まり。王自らによる言葉が兵士達の士気を高めていく。目の前に突如として現われた軍旗に、流石の黄巾党たちも気付き戦列を組み

始める。しかしそれは無駄に終わるだろう。なぜなら、既に彼らの敵はその内に潜んでいるのだから。

抜刀し、孫策の突撃の合図を待つ兵士達と孫策たち將軍の目にその光景は映る。遠くからでも目視できる程に目立つそれは朱に染められた陣羽織。この場で最も、黄巾党を討つに相応しい二つ名を持つ将が纏うそれは、彼自身の動きと荒野を吹き抜ける風によつて翻る。荒野に響き渡る黄巾党たちの悲鳴と断末魔の叫び。それこそが、孫策にとつて突撃の合図であつた。

「全軍、突撃せよ！」

一斉に響いた兵士達の雄叫びが大気を揺るがす。そして戦でありながら戦と呼べない……圧倒的な蹂躪劇の幕が開かれた。



俺達が黄巾党本隊に潜入して早くも数日が経過した。今日まで黄巾党本隊はどこかの村を襲う事も無く、俺達の持つてきた兵糧で飢えをしのいでいる。俺としては賊の片棒を担ぐ事にならなかつた事に内心ほつとしているが、この状態が何時までも続くと言ふ事は無いだろう。俺達の運んできた兵糧も、そこまで多いと言ふ訳ではない。それが

方に届く程の軍勢ならば尚更だ。

もし俺達の運んできた兵糧が尽き、そして本隊の残り少ない分も尽きれば、黄巾党たちはどこかで兵糧を補充をする必要がある。強奪と言う名の補充を……だ。そしてもし黄巾党達が強奪目当てで村に襲いかかったならば、恐らく俺は雪蓮様達の到着を待たずに行動するだろう。潜入している身としては強奪に参加し、引き続き仲間として振舞う事が正解なのだろうが、何の罪もない民草を犠牲にしてまで策などクソくらえだ。例え後の軍議で咎められることになろうとも。

ゆえに、俺としてはそうなる前に雪蓮様達に合流してもらいたいんだが……。

「將軍、南に軍旗を確認しました。到着と同時に本隊が突撃の準備を始めているようです」

何と言うか、相変わらずの間の良さに思わず苦笑が漏れてしまう。流石は戦に関して天性の才能を持つ方と言うべきだろうか。雪蓮様の機の読みの良さには脱帽するしかない。

「よし。んじゃ、俺達も動くとしようか」

背負っていた背囊から陣羽織と鉄鎧を取り出し、邪魔になる背囊を投げ捨てる。そしてより周囲に目立つよう、連れてきた馬の背に飛び乗り、俺は大きく翻す様にして陣羽織を羽織る。それを見た周囲の黄巾党たちに、明らかな動揺が走ったのを見逃さない。

「全員抜刀せよ！ この場に集う無法者たちをなぎ倒せ！」

どよめきが警戒に変わらぬうちに、俺は待機していた兵達に攻撃を命じる。完全に雪蓮様達の本隊の方へ意識を傾けていた黄巾党たちは突然背後からの強襲を受け、瞬く間に混乱状態へと陥った。

「う、裏切りだ！ 裏切りだあ！」

「あの格好……嘘だろ、なんでこんなところに！」

つい先程まで仲間だと思っていた者たちに背後を突かれ、その中には賊のどつての恐怖の代名詞——自分で言うのもアレだが、その俺がいる事による影響は想像以上だった。奇襲による混乱に拍車を掛けるかのように、賊達は俺の姿を見るなり更なる恐慌状態に陥り、こちらが寸断せずとも敵方のお粗末な指揮系統は呆気なく崩壊。逃げ回る者、何とか反撃しようと体勢を立て直そうとするもの、理性をかなぐり捨てて突撃しようとする者が入り混じり、戦場は混沌とした場へとなり果てている。

俺達は方陣を敷き全方位からの攻撃に備える。槍兵を前列、弓兵を後列の配置し、歩兵は特に敵の押し寄せる場所への遊軍として動かす。勿論俺はその遊軍を率いている。迎撃の指揮は副官に任せておけばいい。数百人の部下達に戦いながら指示を出せるほど、俺には余裕も無ければ器用さも無い。大雑把な指示ならば叫ぶだけで済むだろうが、少しでも機を逃せば全滅もあり得るこの状況だ。よりの確な指示が必要とされる

のは言うまでも無い。だからこそ副官の存在がある。

とは言え、元江賊である彼らにとつては陸上での白兵戦はあまり経験のない事だろう。しかし連携に関しては言えば問題は少ない。元々共に戦つてきた仲間達であるのもそうだが、相手が黄巾党達である事も大きい。相手は既に組織だった動きが出来ない状態なため、こちらの連携を崩すほどの余裕がない。ゆえに余程油断し過ぎない限り、俺達までもが混乱に巻き込まれる事は無いだろう。現状に対して冷静に対処しつつ、後は本隊の動きに合わせて離脱を行えばいいだけだ。

部隊に方円陣を維持させつつ、俺も遊軍として動きながら鉄鎚で敵兵を殴り殺してゆく。目の前で頭蓋を砕かれながら死んでいく彼らも、もとはと言えば一農民であつたりしたのである。だが、一度こうして獣の道に堕ちてしまえば、後に残るのは狩るか狩られるかの道だけだ。今日まで彼らは狩る側の立場に立ち、より弱者から欲望のままに搾取を続けてきた。それは命であつたり、食料であつたり、人としての尊厳であつたり。例をあげればきりがない。

そして今日、彼らは狩る立場から狩られる立場へと立ち位置を変えた。自らの意思で選んだ道だ、憐みこそすれそこに同情を覚える事は無い。ゆえに俺は鉄鎚を振り下ろす。その一撃は命の灯を吹き消す一撃であり、そしてそれを振るうのが俺の役目だ。

「くそがつ！ 役人の犬どもが、汚え手を使いやつて！」

「否定はしないさ。そんな事は言われるまでも無く承知済みだからな！」

どれだけ正義を語ろうとも、所詮は俺達も人殺し。同じ汚れものには変わりない。違うのは人を捨てたか、捨てていないかだけだ。罵倒を飛ばしてきた賊の頭を鉄鎚の一撃で砕く。首から上に存在する穴と言う穴から鮮血を噴き散らしながら、賊の体が糸の切れた操り人形のように倒れる。絶命した事だけを一瞥して確認し、次の標的へと鉄鎚を振り下ろす。数千の規模を誇る軍勢と、それに囲まれた数百の軍勢。しかし戦局は誰かから見ても、数百の軍勢である俺達の方が圧倒的優勢を誇っていた。

「將軍！ 孫策様たち本隊が交戦を開始した模様です！」

「潮時だな……全員、魚隣陣を敷け！ 一点突破でこの場から離脱するぞ！ 俺に続け！」

叫びながら、この混乱の渦の壁の一番薄い方向へと俺は駆けだす。道中の敵兵を先頭に立って屠り、後に続く部下達のための突破口を切り開くためだ。幸いにして、俺の姿を見た黄巾党達は一部を除いて自ら道を開けてくれる。混沌とした包囲網を抜けるためにも、これを利用しない手は無い。

「逃がすなあ！ 道を塞げ！」

裏切られた事に対しての憎しみゆえか。その目を復讐の色に染めた一部の黄巾党たちが退路を塞ぐようにして立ちはだかる。しかし所詮は横に並んだだけの百人程度の

人の壁。俺を立ち止まらせるには、些か以上に力不足が過ぎる。

「邪魔だつー！」

突きだされる粗末な竹槍を掻い潜り、敵兵の懐に飛び込むと同時に敵兵の顎に向けて掬いあげるようにして拳を下から突き出す。顎を砕く感触を手に感じながら、握ったままの鉄鎚を左右の賊に目掛けて振り下ろす。人の壁にあつという間に出来た数人分の穴に、少し遅れてやつてきた後続の部下達がその小さな穴を広げるようになった。それが確認し、退路の確保に戻るため先頭を再び走ろうしながら振り返った俺の目に、がむしやらに突き出された黄巾党の竹槍をその身に受け絶命する数人の部下たちの姿が映る。

もとより犠牲無しでは済むとは思っていない。心の中で謝罪を述べ、冥福を祈る。そんなくらいしか俺に出来る事は無い。嘆くのは一瞬だけ。それ以上は部下の新たな死に繋がる。

「総員走れ！ 死にたく無ければ死ぬ気で走れ！」

何とも矛盾した発破の掛け方だが、とにかく今はこの場から離脱することが先決だ。退路を切り開き——いや、殴り開きながら時折本隊の方を確認していたが、今はもう完全に前線を押し切り黄巾党は内も外も纏めて総崩れとなっている。一旦体勢を立て直すつもりなのか本隊と交戦していた外の部隊が陣地の方へと下がってきているが、それ

こそこちらの望むところ。もはや策の発動まで時間は残されていないだろう。それを確認してからは俺は振り返らず、部下達が付いてきてくれていてる事を信じてただひたすらに退路上の敵を屠る。そして俺達はようやく、敵陣から離れた所へと抜けだす事に成功した。

「皆、無事か……」

無事である筈がない。それでも俺は振り返って隊の生存状況の把握に努める。振り返ったその先には、全身に傷を負い、血に塗れながらも大地にしっかりと足を付ける部下たち。その数は確かに減っているが、少なくとも半数以上の兵達が今この場に立っていた。

「凌統隊、これで全員です」

「そうか……よく生き残ってくれた」

紛れもない本心からくる言葉だ。付き合いは短く、ついこの間までは敵であった者達であつても、今はもう俺の部下だ。部下達が生き残ってくれて、嬉しくない隊長がいるはずがない。多くの者たちが生き残ってくれた事を嬉しく思いながら、既に後方となつた敵陣へと目を向ける。幸いにして、俺達を追撃してくる部隊は見えなかった。

「ご苦労だった。皆は休んでくれて構わない。後は……孫策様達が片付けてくれる」

俺がそう言った次の瞬間、煌々と輝く無数の光が黄巾党の陣地に降り注いだ。神秘的

でも無ければ幻想的でも無い。ただただ力強く、その存在を主張するかのように輝くそれは……火だ。穩の部隊が放った無数の火矢が、黄巾党の陣地に降り注いでいる。当初の予定通り、火計による痛快かつ圧倒的な勝利のためだ。しかし痛快さのための演出でありながらその効果は絶大だ。

黄巾党の陣地には、未だ手つかずの兵糧や粗末ながらも天幕などの設備が一応は揃えられていた。そこに火矢が降り注げば、このあたりは水場などあるはずもない一面の荒野だ、消火する手段などあるはずもない。その先にあるのは燃え移った火による大火災だ。何とか消火しようとする者は火の勢いに負けて飲み込まれ、逃げ出した者たちはこちらの追撃部隊に討伐される。よしんば逃れられたとしても、余程運が良くない限りは飢え死にするのがオチだ。

何にせよ、これで黄巾党本隊の壊滅は決定した。後に残るのは灰と焼け焦げた死体のみだろう。あと数刻もすればここら一帯は残酷極まりない光景の広がる戦場跡だ。だがそれを喜びこそすれ、嘆く者は少ないだろう。世の人々にとって、彼らは悪として見られている。その悪を容赦の欠片も無く浄化の炎で焼き払った雪蓮様は、英雄孫策としてその名を大陸中に広く知らしめることだろう。これで孫呉独立に向けて大きな一歩を踏み出したと言う訳だ。

「……また一つ近づいた、か」

「そう、独立に一步近づいた。それは即ち、分散している呉の戦力が再集結する日も近づいたと言う事だ。その先にあるのは、俺が追い続けてきたものの答えかもしれない。勿論違う可能性もある。しかしこうして近づく程に、俺の中の不安は増大していく。祭さんにも言ったように、俺の感情がどう動くのかは、その時になってみれば分からない。しかしそれがこれほどに不安を生み出すことになるとは思わなかった。いや……少ない数の部下が死んで、些か以上に気が落ち込んでいるせいだろうか？」

「將軍……何やら顔色が優れない様ですが」

「ん？ あ、ああ。大丈夫だ」

「そう、ですか。ならば良いのですが」

「心配無い。俺の事はいいから、隊の再編を頼む。負傷兵には体力に余裕のある兵を付けてやってくれ」

「御意」

生き残つてくれていた副官に命じて、俺は火の手の上がった黄巾党の陣地へと目を向ける。そうする事で、俺は己の中の不安から意識をそらしたのだろうか。雪蓮様たちが合流に来るまで、俺は煌々と燃え盛る荒野をじつと眺め続けていた……。

第五話

最近、よく夢を見るようになった。

もう何度目になるか分からない、変わり映えしない同じ夢だ。

夢の中の光景は、自分が良く知る光景だ。もう一年以上も昔の事だが、今でもその出来事はよく覚えている。

甘寧が傭兵として雇われた、夏口の戦い。与えられた数少ない兵と江賊時代からの部下を率いて戦った負け戦だった。そう、最初から勝ち目など無かった。最初から捨て駒として利用するつもりだったのだろう。それが分かったからこそ、甘寧は早々に部下達を引き上げさせ、撤退戦に臨んだ。

しかし相手は名高き呉の精兵。そして彼らを率いる将は、敵ながら見事な指揮を執る名將だった。赤い陣羽織を纏った老いも中年を過ぎた男。凌の旗を背に自らも前線で剣を振るいながら兵を操る姿は、歴戦の将そのものであった。撤退を試みるも見事な采配で兵を動かし、激しい追撃を甘寧達は受けた。

このままでは全滅する。それがはつきりとわかるほどに。だが彼らは、降伏する者の命を奪う事はしなかった。情に厚いと言えば聞こえはいいが、戦場ではそれは死に繋が

る甘さだ。ゆえにかの将は命を落とした。他ならぬ、甘寧の手に討たれて。乱戦の中、前線にその身を晒していた事もそうだが、投降した兵にまで余分に意識を割いていたからこそ出来た隙だった。

注意が分散し、散漫になつていたところに矢を放った。それは寸分違わず男の喉元へと直進し、そして男の喉を貫いた。確かめるまでも無い、即死だ。矢を放った腕に、確実に急所を貫いたという手ごたえがあつた。瞬きをし再度男の方へ目を向ければ、男はその場に倒れ伏していた。戦場に響いていた男の声が途切れたことで、呉の兵士達の間一瞬に動く間に動揺が広がっていくのが甘寧の立つていた高台からよくわかつた。

だがそれも、一時の波紋に過ぎなかつた。

「うろたえるな！ 例えその身は死すとも、我が父凌操の心は我と共にあり！ ゆえに、これより全軍の指揮は俺が執る。全軍追撃を続行！ 降伏する兵士を除き、全ての敵を討てえええ！」

倒れた男の傍へ駆けつけた一人の若い男……呉の将兵の誰よりも先に立ち、こちらの将を刹那の内に討ち取った、その若い呉の将が叫んだ。と同時に、大将の死に揺れていた呉の兵士達は再び勢いを取り戻した。

兵を鼓舞するその姿は、甘寧が討った男に重なつて見えた。恐らくかの男とは親しき仲……家を同じくする者なのだろう。少しでも多くの仲間を逃がしたい、だから甘寧は

もう一度その手に握る弓を引いた。

先ほどよりも気を込めた、命を刈り取るためのただの一撃。弓が軋みをあげるほどに強く引き絞ったその一撃は風を切って、双鎗を操り戦場を蹂躪していく男の下へと一直線に飛んで行った。当たれと、そう念じて放った矢は確かに男に届いた……が、それは空しくも鉄鎗によつて払われ無残に散った。

若い将と自分の目があった。日は既に傾いている、あの距離からでは目を背にした自分の姿をハッキリと捉える事は出来ないだろう。顔などは影になつて見えないはずだ。それでも確かに目はあつていた。周りの雑音が瞬く間に遠退いていったのを甘寧は覚えていゝるし、夢の中でも同じような体験を繰り返していた。気を抜けば飲み込まれてしまいそうな沈黙。正直、耐えきれなかった。何度体験しても、耐えられない甘寧はいつも先に視線を外し、先に退いた部下達と合流するため、その場からすぐさま立ち去る事を繰り返す。

そして決まつて、焦つて高台から飛び降りた際、着地で姿勢を崩した甘寧の腰の鈴がチリンと鳴る。そこで甘寧はいつも夢から目を覚ます。悪夢の類かと問われれば答えるのに困る。別にそのせいで日々の生活に支障が出ているわけでもない。それでも、同じ光景を夢の中とは言え何度も繰り返し見させられ、その都度弱い自分を意識せざるを得ないと言うのは、なかなかどうして気分の良いものではなかった。

そして、その光景があつた日から一年半と幾数日の時が過ぎた。今、甘寧はかつて敵対した呉に仕えている。呉の王族、孫権の傍仕えとして。

江賊でありかつて敵対した者であるにも関わらず、孫権は甘寧を重用していた。普通ならば監視なりを付けるなりして、しばらくは動向を探らせるなどするだろう。しかしそれすらなく、仕官を申し出た甘寧と顔を合わせたその日から、甘寧は孫権に傍仕えを命じられた。確かに仕官に有利に働くよう、実力の片鱗として自身の武を孫権に見せつけはした。しかしそれだけで傍仕えを命じるなど、危機感が薄すぎるにも程が有る。

そう思い、甘寧はその事も踏まえて自分を傍仕えに任命した理由を孫権に尋ねた。すると返ってきたのは苦笑、次いで穏やかな眼差しと信頼のこもった言葉だった。

そんな心配をしてくれるあなたなら、傍に置いて問題無いでしょう？

その瞬間、甘寧は生涯の忠誠を孫権に捧げる事を決めた。今まで不遇な待遇を受ける事こそ多くあれども、このように信頼してもらつた事は甘寧には無かつた。

それからの甘寧の日々は充実した毎日であつた。孫権は事実上の幽閉と言う立場にあるため目立つような行動は制限されていた。ゆえに甘寧に出来たのは常駐する兵士達を何時でも動けるように鍛える事くらいだ。しかしその目に揺るぎない忠誠と確固たる意志を宿す精兵達を自らの手で鍛え上げると言うのは、なかなかどうして気持ち良いものだった。

將として充実した環境に加えて、長きにわたる幽閉生活で話し相手を欠いていたのか、甘寧は孫権の話し相手をよく務めた。その話の中に、あの時の將と思わしき人物の話題もあつた。今も甘寧の夢と意識の一部を独占し続ける、あの若い將の事だ

あの男は……どうしているだろうか。

そんな思いが時折、甘寧の胸の内を過ぎる。親しい人を殺され、復讐の炎に身を焦がしているのだろうか。それとも悲しみに暮れ、戦いの場から身を遠ざけてしまっただろうか。

……いや、きっとどちらもありえない。言葉も交わした事のない、ただ目を合わせた事のあるだけの相手だが、甘寧にはなぜかそんな気がした。

甘寧はあの男の事について孫権に聞く事にした。双鎚を振るう若い將のその人物について。普段聞く方ばかり回っていたためか、久方ぶりの甘寧の質問に孫権は意外そうな顔をして目を見開いた。それが甘寧が將の事を知っていたからなのか、それとももつと他の感情のせいなのかは甘寧には分からない。しかし真面目な表情で質問したおかげか、孫権はどこか懐かしむ様な顔をして甘寧の問いに答えた。

若い將の名は凌統。今は亡き先代の呉の王、孫文台に仕えていた重臣、凌操の息子。そしてその凌操亡き後はその意志と家督を継ぎ、今は呉王孫策の下で孫呉一の勇將として力を振るっているのだと孫権は語る。

そこで甘寧はようやくあの時の光景の答えを見つけた。あの時、甘寧が討った男こそ、かの若い将……凌統の父であったのだと。だとすれば、甘寧は凌統に一種の尊敬の念を抱かざるを得なかつた。父を殺され、怒りに身を任せても何らおかしくないあの状況で、敵を皆殺しにすることなく投降する敵兵を害する事を凌統はしなかつた。

亡き父と同じく前線に立ち、兵の指揮を執り、そして自身も武を振るう。そんな凌統を甘寧は討とうとし、そして失敗した。当時凌操が討たれ、元から警戒はしていたのだろう。それでも暗がりから突然放たれた矢を難なく討ち落とした凌統の手腕には舌を巻く。

孫呉の勇将、凌公積。孫呉独立の兆しが見え始めた今、彼はどんな思いで日々を過ごしているのだろうか。大陸に渦巻く動乱の中で、やはり親の仇を今も捜しているだろうか。だとすれば遠くない未来、自分は凌統を前にしてどう接すればいいのだろうか。

こんな時代ゆえ、今日の敵が明日の友などと言う事はよくある話。だが人の感情と言うものはそんな理屈で抑えられる様なものではないだろう。それでも、甘寧はこの首を安易に差し出す事などできない。他の誰でもない、自分の主たる孫権のためにこそこの命を賭けるとそう誓ったのだから。

「凌統……貴様は、私をどうする？」

長い思案と共に時間は過ぎ、既に高く上った日の光が窓から差し込んでいる甘寧の自

室。その寝台の上で、甘寧は誰に聞かせるでもなくじつと虚空を見つめたまま、そう小さく呟いた……。



「ぶえつくしっ！」

本日は晴天なり。風邪などひきようもない穏やかな、睡魔が喜々としてはしゃぎまくる様なそんな気候……だと言うのに、いつものように積み上げられた書簡を睡魔と格闘しながら処理する中、突如背筋に走った言いようのない寒気に素直に応じた俺の体が、盛大なくしゃみを執務机に向かって発射した。おかげで手元が狂い、竹簡の文字がこれでもかっ！ と自らを強調するかのように太文字になってしまった次第である。

「なんだ、風邪でも引いたのか公積？」

そんな俺を見てか、怪訝な表情を浮かべた我が同僚様が修正のためのノミをこちらに放ってくる。同僚の名前は諸葛瑾。ここ最近にあつた人事異動で俺の隊に新たに配属された、俺とそう年齢差のない軍師見習いの若者だ。なんでも、妹が世のため人のためにと私塾を飛び出したのをきっかけに、ならば自分もと冥琳様に直接仕官を願い出てきたらしい。ウチの隊への配属を希望したのは、戦場に頻繁に駆り出される凌統隊につけ

ばより軍師としての経験を積みやすいからだとか。

「ずずつ……いや、そんな事は無いとも思うんだけどなあ」

「ふむ、それもそうか」

「いや、そこですぐさま納得するのめどうかと……」

「なんだ、手取り足取り介抱してほしいのか？」

「政務を肩代わりして仕事から解放してくれるのなら万々歳だ」

茶化す様な俺の言葉に瑾はまさかと言つて仕事に戻る。隊に配属された当初はいかにも堅物な印象だった瑾だが、言葉を交わしてみれば実に話のわかる奴だった。人は見かけによらないとはこの事だ。そう言う訳で仕事場では凌統隊を率いる隊長とその補佐をする軍師見習いとして、私生活ではお互いに気の置けない友人としての関係を築いている。ちなみに真名は預け合っているのだが、こいつとは何となく今も出会った当初のまままで呼び合っている。特に理由は無いけども。

しかし、流石に軍師を目指しているだけあつて政務に関しては俺よりも数段手際が良い。誠実な人柄で部下達からの評価も良好。おまけに顔形も良いとまさに非の打ちどころのない好青年だ。しかも文官でありながら多少武にも通じていると言う。流石に本職の武官には及ばないらしいが、身を守るだけの実力があるのはいいことだ。あの穏でさえ九節棍を操つて戦う事もあるのだし。だが悲しいかな、そんな瑾には、まさに玉

に瑕だと言わんばかりの欠点……と言うか、多少常人よりも突出した所があると
言うか何と言うか……。

「今度はなんだ。そんな生温かい視線を向けたりして。気色悪いぞ」

「ひでえ。折角心配してやってるのに」

「何を？」

「……瑾の将来？」

「意味が分からん」

大丈夫、大陸は広い。瑾の突出した個性をも受け止めてくれる懐の広い女性だつて、
きつとどこかにはいるはずだ。たぶん、恐らく……どうだろう。

「……ごめん、瑾。俺、自分に自信が持てない」

「はっ？ いや、なにがどうしてそんな卑屈に——」

「くそっ！ 仰々しい二つ名なんか貰ってるくせに、隣りの友すら救えないなんて……
俺は、無力だ！」

筆を置き、作業中の竹簡に被害が出ないように拳を机に叩きつける。ははっ、何が鉄
鎚の賊殺しだ……笑わせる。

「だから、一体何の事——」

「瑾！」

「な、なんだ？」

「お前は、お前は強く生きろよう……例え何があつても、将来嫁さんが見つからなくても、お前は強く生きろよう！」

「余計な御世話だ！」

「んぐつぐ!!？」

瑾の懐から取り出された折り畳み式の扇が俺の脳天を一撃する。ちなみにだが瑾の手に握られているこの折り畳み式の扇、いくつもある骨組み全てが鉄製の所謂鉄扇と呼ばれるもの。つまり何が言いたいのかと言うと……ぶつちやけ今、俺は鈍器に殴られたに等しい状況という訳だ。

「痛い……」

「す、すまん。力加減を誤った……大丈夫か？」

「痛い……」

大事な事だから二度言った。と言っても別に命に関わるとかそんな事は全くない。ただ普通に痛いだけ。頭を触ってみればやはりというかこぶが出来ている。常人なら頭の骨にひび位いつてたかもしれないが、いやはや俺つてば石頭で良かった。

「と言うか、何をどうしてそんな心配に至った。説明を求めろ」

「やめろよ、答えにくい」

「答えにくい事なのか!？」

狼狽する瑾には悪いが答えにくいと俺は思う。その理由を瑾本人が自覚していない分、なおさらだ。

「まあ、それはさておき」

「置いておきな!」

「瑾、落ち着け。それよりも、その鉄扇は瑾の得物なのか?」

「落ち着くも何も……まあいい。それと、これはあくまで護身用だ。流石に執務室にまで得物は持ちこまん」

「なるほど」

確かに見た目は扇にしか見えないから護身用にはもってこいだろう。さっきの一撃から分かったが、見た目に反して重量もそこそこにある。一般男性の腕力と合わせて急に食らえば軽くても昏倒、最悪撲殺できそうな十分な威力を持つ凶器……いや、隠して持ち運べるから暗器と言えるかもしれない。

「ちなみに鈍器兼暑さ対策、書簡の重しにも使えるぞ」

「暗器の用途が比率負けしてる!？」

「いや、そもそも暗器じゃないんだが……」

呆れた顔で瑾がため息を吐く。まあ暗器として使うならもつと効率の良いものは幾

らでもある。それこそ先端に毒を塗った小さな針、所謂毒針とか。針でなくとも小剣だつて十分懐に隠せるし、小剣ならばそれ自体にも十分な殺傷力はある。となると、やはり鉄扇は暗器とするには些か不便と言わざるを得ない。あくまで腕力任せな鈍器な訳だし。

「まあ、暗器と言うより鈍器だよな」

「そうなんだが、なぜか公積の理解の仕方に納得がいかない俺がいる……」

「そうだな……刃でも仕込めば暗器になるか？」

「そつちの意味じゃない！」

「冗談だつて」

流石にこれ以上は可哀想なので、いちいち反応の面白い瑾を弄るのを止めて仕事に戻る。先日の黄巾党討伐以来、雪蓮様の評価は鰻登りに上がっている。そのためか、ぜひとも支援させてほしいと裏を通じて申し出てくる有力者がここ最近増えた。それと共に瑾と同じように仕官を申し出る若者も増え、軍は資金兵力共に日に日に増強されつつある。

もちろんそれは独立を目指す孫呉にとっては大変喜ばしい事なのだが、それに比例して中間管理職である俺達に回ってくる仕事も当然増える訳で、今もこうして新規に配属されることになる新兵たちの編成やら装備の割り振りやらの検討に勤しむ事になって

いる。俺達でこれなのだから軍師である冥琳様や穩の苦勞はいかほどなのかと、正直心配になってくる。袁術に気づかれないように内々に処理する必要もあるわけだし。

とは言え、見習いである瑾の手際の良さを考えれば、俺のは余計な心配なのかもしれないが。

「なあ瑾太郎さんや。軍師つてやつぱり政務の手際の良さは重要なのかね」

「誰が瑾太郎だ。しかし、どうだろうな。俺はこの程度の量ならばさして問題ないが……まあ、戦場であろうと執務室であろうと、結局俺達軍師の仕事は頭脳労働だ。その点でいえば、戦場では主に肉体労働な武官に比べれば、面倒に感じる事は無いだろうな」

「なるほどなあ。つまり軍師の皆さんは常在戦場なわけだ」

「微妙に使い方が違う気がするぞ、それ」

「細かい事は気にするな、俺は気にしない」

半眼を向けてくる瑾を無視して再度仕事に戻る。ともかく、今後の戦での隊の生存に関わる内容だ。手抜きをする事はあり得ないし、するつもりもない。少し癖が強くてもできるだけ優秀な兵を多く配属出来るようにしなければ。隊の生存を第一に考えるのが隊長である俺の務め。優秀な兵は他の部隊との取り合いとなるため、この辺りは些か以上にしっかりとっておきたい。当然ながら自重するべきところは心得ている。何事もやり過ぎはよくない。祭さんとは後で相談をしなければ。

「にしても、こう机に向かつてばかりだと体が鈍りそうで嫌だな」

「大げさな、高々半日程度の事だろう」

「そうだけど、こう……気持ち的な面で」

口では言いながら手は黙々と動かしている辺り、俺の体も大概仕事中毒に陥りかけている気がする。いくら色恋沙汰に向ける意識が無いとはいえ、まだまだ若いはずのこの年で仕事が恋人、などと言う事態だけは勘弁して欲しい。

「そうだな。もういつそのこと、瑾は書簡と結婚するのが良いかもな」

「良くないわ！ 俺の将来を勝手に決めるな！ どうかその話まだ続いたのか!？」

「瑾は弄ると面白いなあ」

「確信犯かつ！ タチが悪すぎるわっ!」

顔を赤くして怒鳴りながらも瑾の筆圧だけは変化する様子は無し。もしかして体が腕が別の生き物なんじゃなからうか。

「まったく……中身を知りあつた今だから言えるが、第一印象とはまるで違うな、公積は」

「へえ、そうなのか。ちなみにその第一印象とやらは?」

「規律を順守し、武に誇りを捧げた堅物。だが正直、俺としては今の公積の方が良い。堅物な武人ほど説き伏せるに苦労する事は無いからな」

「なんだそれ。けど奇遇だな。俺も瑾の第一印象は堅物だったよ。けど実際は話のわかるやつで助かったかな」

「お互い様だな」

「本当に」

そう言つて、俺と瑾は何気のない暴露話に苦笑しあう。大陸を巻き込んだ騒乱が幕を開け、平和の兆しが寸分も見えなくなった明日からの日々。そんな中に、こんな平和な一日があつてもいいかなと、そう思いながら俺は目の前の仕事を隣りの友と共に片付けていった。

第六話

「うーん、まあ初戦じゃあこんな感じですかね」

「うむ、そうじゃな」

昼下がりの鍛錬場。そこに広がる凌統隊の兵たちの死屍累々な光景を前に、俺と祭さんは領き合う。先日新たに各部隊へと振り分けた新兵と、古参の兵たちとの連携具合を確かめる必要があつたため、祭さんに部隊合同の訓練をお願いした次第だ。ちなみに振り分けとしては、筋肉担当をウチの部隊に。手先の器用なのを黄蓋隊にと言つた感じだ。

まあ、結果は見ての通り散々な訳であるが、新旧合わせてどちらの兵たちにも良い経験にはなつただろう。黄蓋隊の無慈悲な矢の一斉射——もちろん矢じりは潰してある——に慌てふためく新兵に巻き込まれる形で死亡判定を食らつた古参組は、少々納得のいかない顔をしていたが……まあ、そこは熟練者の余裕をもつて受け流してほしいところだ。

黄蓋隊にも同じように新兵は含まれていたのだが、黄蓋隊の役目は専ら弓による後方支援なので、今回の訓練では特に目立った粗は見えなかった。強いて言えば一斉射に

少々ばらつきが見られた程度だ。言っちゃなんだが、とりあえず敵部隊の中心に向けて矢を放てば弓は大抵は誰かしらに当たるものなので、新兵であつても後方支援に限ればあまり問題は無い。とは言え、黄蓋隊も前線に出る事は多々あるため、やはり新兵の訓練は必須事項であることに変わりはない。その点で言えば前線での連携さえ確立できれば良い特攻専門のウチの部隊は随分と楽だ。

「とりあえず新兵の育成が急務ですね。連携が取れるようになるまでは予備隊か輜重隊に回しましょう。代わりに今の輜重隊配属の兵を前線に回します」

「ああ、それが良いだろう。特にお主の部隊はつい最近にも再編があつたばかりじゃ。これ以上はお主にも古参達にとつても負担になる」

「あー……確かに。俺はともかく、じいさま達が過労で倒れそうだ」

実のところ、再編で組み込まれたばかりの江賊達が先の黄巾党討伐で上手く動けたのは、おやじの代から孫呉に仕えている最古参組の老教導官たちによる鬼指導によるところが大きかったりする。

元凌操隊であるウチの隊には俺以上に若手の指導に精通する人物が少なからず存在する。古参過ぎるゆえ、皆が戦場に出るには些か年齢が過ぎてはいるが、第一線を退いた今でもウチの隊をはじめとした各隊には教導を司る鬼として、雪蓮様同様恐れられつつも慕われている。本人たち曰く今でも現役との事だが、世話になつた事のある俺として

は自愛して欲しい。歴戦の男たちの死因が過労だなんて笑えない。

「しかし奴らも酔狂なものよ。今日まで挙げてきた功があれば、それなりの地位に就く事もできように」

「じいさま達曰く、興味無い、だそうです。そんな事よりもひよつこを育てる方がずっと面白いんだとか」

「ほっ、あやつららしい。まあ、その最大の成果がお主と言う訳か」

「……幼少の日々は汗と涙に塗れてますね、確かに」

だが、断じて青い春を過ぎた汗と涙ではない。思い出すだけで泣きたくなる、しごきにしごき抜かれた幼き日々ゆえに流したものだ。おやしを筆頭に多くの師匠もとい鬼たちによる、肉体の限界に挑戦するかの如く激しい訓練が続いた日々。成長し、まともな思考できるようになった今に思えば、普通そこまでやるかと叫びたくなる日々だった。

まあ、そのおかげで今の俺が有るわけなんだが、正直素直に喜べないのはここに至るまでの過程のせいだと思う。むしろこれで実力が付かないはずがない。程度に差はあれど、やった分だけ見返りが有るのはやはり当然の事だろう。それに亡くなった文台様や雪蓮様、祭さんが稽古の相手になってくれた事も大きいと思う。

特に雪蓮様は対人戦の訓練相手と言うよりも、むしろ今と変わらないその人柄で訓練

付けだった俺の心を癒してくれた。雪蓮様がいなくなったら、今の俺はもつと荒んだ性格になつていたかもしれない。

「思い返せば、俺は色んな人に助けられてたんですね。特に、今も昔も変わらないあの雪蓮様の無邪気さに、俺は救われっぱなしです」

「最近は何やらが助けに回る事が多いがな」

「恩返しと思えば苦になりませんよ。ただまあ、さぼり癖だけはどうかしてほしいですけど。祭さんも含めて」

「うっ……」

痛いところを突かれたと自覚しているからか、祭さんがぼつの悪そうな顔をする。まあ、手段がどうであれ、俺を守る力をくれたおやじたちに感謝こそすれど恨む事はするまい。確かに厳しい日々だったが、それでも休日はあるし、おやじも忙しい中に時間を作ってくれたりした。厳しくも父親らしくあろうとしてくれた、そんな尊敬できるおやじだった。

おやじと過ごした日々の記憶を思い出す。苦も楽もあつたおやじとの日々の最後の記憶は……目を見開き絶命したおやじの姿だ。それを思い出した瞬間、一つの感情が猛烈な勢いで俺の中に膨れ上がった。

一年半前に封じたはずのそれは……殺意だ。恨み、憎しみ……そんな黒い感情が溢れ

出しそうになるのを、一年半前の時と同じように理性をもつて抑えつける。しかし確信にも近い仇の存在を知ってしまった今、理性の上では平静さを保てはしても、俺の中にある本能の部分が殺意を膨らませ復讐を望む。

戦場の常だなどと理屈を並べ、憎しみに流されていないかの様に当たり障りのない態度を周囲に向けて取ったところで、結局俺は根つこの部分では恨みを捨て切れずにいるようだ。仇を見つける事を半ば諦めていたついこの間までならば、どうせ叶はずがないと、復讐心を心の奥底に封印しておく事が出来た。俺の醜い部分をどうにか隠し通す事が出来た。しかしそれも、先の戦で捕縛した江賊から話を聞く前までの事だ。

だが、俺は知ってしまった。おやじの仇へと通じる有力な情報を。もしかするとそれが、ごく身近な存在の近くへと繋がっている可能性がある事を。蓮華様の傍付きになつたと言う江賊。そう遠くない先にその人物と出会い、そしてそれがおやじの仇である甘寧であつた時、殊更に隠し続けてきたそれが今までと同じように隠し通せるかどうか……正直、俺には自信がない。

もし隠しきれなかったその時は一体どうなるのか。それは俺にも分からないし、予想すら出来そうにない。恐らく先の戦場で感じた不安の正体は十中八九、予想できない未来の俺に対して向けられたものだろう。

「おい、浩牙。……浩牙！」

「ん？ ああ、なんですか祭さん」

「それはこちらの台詞じや。急に黙り込んだと思えばしかめっ面して殺気など滲ませよってからに」

「……俺、そんな風になってました？」

「自覚無しか。まあ、何を思つてそうなつていたのかは大方予想はつくが、これは少々心配になつてきたのう」

そう言つて祭さんは眉を顰めて俺を見つめる。不味い、隠し通せるか不安に思つた矢先にこれとは。最近は少し余裕が出来ると余計な事ばかり考へてしまふ。正直、仕事に掛かりきりの時の方が感情は安定しているかもしれない。とすればあれか、瑾に言つたように俺もとうとう仕事を恋人にする日がきたということなのか。

「あまり気に掛かるようならば、策殿達も交えて儂らが相談にのるが」

「や、大丈夫です。少し余計に考へ過ぎただけですから。さっきの編成案の方、瑾に相談してきます。残りの隊の方はお任せしますね」

「うむ、任せておけ。……浩牙、儂らがいる事、忘れるなよ？」

念を押すように言う祭さんに俺は苦笑で応えると、新兵の編成案を瑾と共に練るために鍛錬場を後にした。



「大丈夫……か。どう見てもそうは思えんと言うに」

凌統が去つた後の鍛錬場で、黄蓋は誰に語るでもなく一人そう呟く。あまり深く言及はしなかつたものの、先程の凌統は明らかに普通では無かつた。長年凌統を見てきた黄蓋ですら見た事のない、方向の収束したあまりにも鋭すぎる殺意を凌統は滲ませていたのだ。原因は恐らく、甘寧の事であろう。黄蓋にはそれ以外に思いつく節が無い。

本人は余計に考え過ぎていたと言つていたが、はたしてその余計がどの程度のものなのか。だが決して小さいものではないだろう。でなければ無意識に殺気を漏らすなど、凌統がする筈がない。どうやら黄蓋が思つていた以上に、凌統の心は不安定になつてゐるらしい。

「まあ、いざという時は儂らがどうにかすればよいか。はてさて、策殿と冥琳にも相談せねばなあ」

独立に向けて着実に進んでいる今この時に、凌統が戦力外になるなど決してあつてはならない。身内同士の争いなどもつてのほかである。しかしそれよりも、黄蓋としては呉の家族の一員である凌統の事が同じ家族の一人として心配なのだ。

「決して潰れさせません。儂の様な老軀よりも、これからの呉にはお主の様な若者の存

在が必要なのだからな」

言い聞かせるような黄蓋のその言葉は、ひと際強く吹いた風に流され虚空へと消えた。

◇ ◇ ◇

相変わらず書簡及び竹簡の絶える事のない我らが執務室。特に最近は忙しさ倍増中なため、見るのも嫌になるくらい仕事の山、山、山である。そんな中でひたすら筆を動かしている瑾に、部隊編成案の見直しと清書などと言う面倒な仕事をさらに持つてきた俺は鬼畜だろうかなどと思ったが、当の本人は仕事の片手間で終わる雑務程度にしか感じなかったようで、内容をさっと一瞥した後、流れるような筆使いで編成案を書き上げてしまった。今更ながらに、瑾と俺の力の差を思い知った次第である。

「公積、とりあえず纏めたぞ」

書き上げ、墨が十分に乾くのを確認した瑾がこちらに編成案を綴った竹簡を丸めて差し出すのをしっかりと受け取る。

「悪い、手間を掛ける」

「気にするな。この程度ならば手間の範疇に入らん」

などと、いつも通りの平静さを保った顔でこの様にのたまうのだから、一応上司の立場にある俺としてはひたすらに脱帽するしかない。文官としての能力は十分なのだから、後は戦場で実戦経験を積みさえすれば、瑾も一人の軍師として認められるだろう。黄巾党の暴動騒ぎのおかげで出陣が多くなっている今、瑾が見習いを卒業するのはそう遠くないかもしれない。

「そっか。ともかく、助かったよ。早速冥琳様に提出してくる」

「それならば、処理済みの案件も一緒に頼む。そこに積んであるのがそうだ」

「はいよ」

他のものに混ざってしまわない様、部隊編成案の清書を懐にしまい、瑾が顎で示した書簡と竹簡を空いた両手に抱える。持って分かるその重さに、瑾が朝から今までの僅かな時間で片付けた仕事の多さを改めて実感する。時間当たりの効率を比べるなら、瑾は俺の三倍程の手際の良さだろう。ちなみに俺の仕事ぶりは武官の中でもごく普通である。祭さんは少々さぼり気味な所があるが、結局は後で冥琳様にどやされるので、結果的には変わりなかつたりする。あくまでも瑾がとりわけ優秀なだけだ。

「よくもまあ飽きない事で。目とか疲れないか？」

「ああ、人並みには疲れる。だがこれが俺の仕事だ。お前が鍛錬場で兵をしごくのと同じ、文官にとってはこれが当たり前の事と言うだけだ」

「おっしやる通りで。御苦労さんです」

「そう思うなら、後で何か奢れ。清書の件はそれで帳消しにしよう」

「手間掛からなかったんじやなかったのか……」

「手間が掛からないのと報酬を貰わないのとは話が別だ」

「どうやら瑾は、楽な仕事でもタダ働きはしないらしい。一瞬、上官命令扱いにでもしようかなどと思ったりもしたが、流石にそれは大人気ないにも程がある……と言うか、一隊長としてどうなのかと思う。と言う事で、瑾には今度の休日に関か飯を奢る約束をして、俺は凌統隊の執務室を後にする。」

部屋の連なる廊下を抜け、中庭を横切る通路を進む。文官達の部屋が集まるその先、廊下の奥にあるひと際立派な扉の前に辿り着く。そして扉の向こうの、部屋の中にいるはずの人に俺は声を掛けた。

「冥琳様、入ります」

脇に抱えている竹筒を落とさない様にしながら、手首だけを器用に動かして扉を開ける。部屋の中に入ると、俺の入室の気付いた冥琳様が仕事の手を止めて顔をあげた。

「浩牙か」

「はい。申し訳ありません、仕事の邪魔をしましてしまって」

「なに、構わないさ。そろそろ休憩を挟もうと思つていたところだ」

そう言つて冥琳様は筆を置く。椅子から立ち上がりながら茶でもどうだと言う冥琳様に、俺はお願いしますとだけ返し、抱えていた竹筒と書筒を執務機の要確認の場所へと置く。新しく仕事が増えた事に苦笑を浮かべた冥琳様から湯気の立つ茶器を受け取ると、冥琳様が先に腰を掛けるのを見届けてから、俺も近くの椅子を引き寄せて同じく腰を掛ける。執務机を挟んで冥琳様と向かい合つた俺は、申し訳なさを誤魔化す様に熱い茶へと口を付けた。

「すみません、仕事を増やしてしまつて」

「これが私の仕事だ。気にするな」

「はは、瑾も同じこと言つてましたよ、それ」

「そうか。まあ、そう言う事だ。それに蒼志の仕事は優秀だからな。私が目を通して手直しするところはほとんど無いのだよ」

「へえ。やつぱり優秀なんですね、瑾は。ウチの部隊の補佐に置いておくにはもつたいないくらいです」

実際、俺もそう思うに値するくらいに瑾は本当に優秀だ。冥琳様が褒めるくらいなのだから、それも尚更だろう。一部隊としては最近とりわけ忙しい凌統隊に瑾が配属されているのは、隊長の俺としては僥倖と言わざるを得ない。

「ふむ……。お前がそう言うのなら、明日からは私の傍に置くでしょう」

「……いえ、出来ればそれはもう少し先にしてください」

中身をこぼさない様に茶器を持ちながら、俺は座ったまま深く頭を下げた。

「なに、ほんの冗談だ。いかに優秀とは言え新参の蒼志を私の傍に置けば、旧臣の文官達に不満を与える事になる。これから先のためにも、蒼志には経験を積むと共に戦功を上げてもらう必要がある。そのために私は蒼志を望み通り凌統隊に配属したのだよ」

そこまで一気に話した冥琳様は、ふうと小さく息を吐いて茶に口を付ける。俺は瑾がウチに配属された重要性を知って、小さくため息を吐く。

「あまり、部下達を危険な目に合わせたくは無いですけどね」

「お前とお前の部下達にしか任せられない事だ」

「分かってます。呉の未来のためならば、俺も部下達も本望ですよ」

「そうか……文台様と雪蓮に聞かせてやりたい言葉だ」

最近は何かにしわを寄せている事の多かった冥琳様が、そう言って微笑んだ。

「そう言えば、雪蓮様で思い出しましたけど……今日、雪蓮様の姿を見かけていない様な気がします。どこかに出かけているんですか?」

冥琳様の隣りの執務机、雪蓮様の机には作業をしていた痕跡は見られない。まだ夕方にも差し掛かっていないこの時間に雪蓮様がいらないと言うのは、考えてみればおかしい事だ。さぼっているのだとしても、何かしらの痕跡は残っているはずだ。

俺の疑問に冥琳様は先程まで微笑みを即座に消すと、代わりにいつもの眉間にしわを寄せた表情を浮かべた。

「皆には後で伝えるつもりだったが……雪蓮は今朝、袁術に召喚されてここを発った」

「袁術に召喚つて……黄巾党討伐からまだそこまで日も経っていないのですか？」

「そうだ。詳しい事は雪蓮の帰還待ちだが、恐らく碌なことではないだろう」

大方面倒を擦り付けられるのがオチだ。そう呟いた冥琳様が心底嫌そうな顔でため息を吐く。一月近く前、袁術から下された黄巾党討伐の命に従い、出陣した事は俺達の記憶にまだ新しい。中でも最も危険な任を負った俺達凌統隊は、多くの仲間を失った時でもある。それを思うと、俺も心穏やかではいられない。

「祭さんと相談して、軍編成を済ませておいて良かったです」

「もう済んでいたのか。早いな」

「新兵が多く入ってきたので手早く済ませる事にしていました。と言つても、殆ど入れ替えに近い形ですけど」

言いながら瑾に清書してもらった編成案を懐から取り出し冥琳様に手渡す。編成案を受け取った冥琳様は内容に素早く目を通すと、一つ頷いて編成案を畳んだ。

「妥当な編成案だ。これなら作戦行動にも支障は出ないだろう。各予備隊は後詰めとして運用するつもりか？」

「はい。経験を積ませて、ある程度育ったら本隊の方に回す予定です」

「なるほどな。祭殿の方は了承済みの様だが、他の部隊はどうなっている？」

「祭さんに任せてきたので大丈夫だと思えます。祭さんは軍事においては手を抜きませんから」

「少して良いからその姿勢を政務の方にも割いて欲しいのだがな」

「まったくですね」

冥琳様の冗談に重くなっていた空気が少し軽くなる。俺は飲み干した茶器を机の上に置くと、立ち上がって椅子を元の位置へと戻す。

「戻るのか？」

「はい。祭さんに任せたままなのも悪いですから」

「分かった。穩の方へは私から後で伝えておく。余裕があれば、穩の部隊の面倒を見ておいてやって欲しい」

「了解です。まあ、祭さんの事ですから、今頃勝手に引っ張り込んでるかもしれませんけどね」

「確かにな」

「はい。冥琳様、お茶御馳走様でした」

「ああ。今度はお前が馳走してくれる事を期待している」

どうやらタダではなかつたらしい。そう言つて冥琳様がニヤリと口元に笑みを浮かべる。またもや瑾と同じような事を言う冥琳様に苦笑しながら、俺は部屋を後にする。一度伸びをし、そうして気分を一新してから、祭さんの待つ死屍累々の鍛錬場へと再び足を向けた。

第七話

その日、俺達將軍勢に冥琳様から緊急招集が掛けられた。

その内容は言わずもがな、雪蓮様が袁術に召喚された件についてだ。集合場所である王座の間には既に俺を含め数人の人物の姿が見える。祭さんに穩、俺の付き添いとして軍師見習いの瑾。

そして――

「ふむ、久しく吾輩まで呼び出すとはな。流石に冥琳の奴も今回ばかりは余裕が無いらしいのう、ほっほっほっ」

決して若くはない、皺の刻まれた顔を愉快そうに笑わせる御年輩が一人。その姿は知らぬ人が傍から見ればただの好々爺にしか見えないだろうが、侮るなかれ。彼は祭さんと同じく孫家の先代、孫文台の頃から呉に仕えている老将の韓当だ。まだ俺が幼かった頃に、おやじこと凌操と共に数々の戦場を駆け抜けた猛将であり、そして俺に地獄に勝るとも劣らない修行をつけたじいさま連の纏め役でもある。ちなみに彼の真名は海苑かいえんという。

老いても未だその實力は健在で、流石にもう負ける事は無いが戦うとなると未だに俺

も苦戦を強いられる。本人曰く、老いているのは顔だけで体の方はまだまだ現役との事だ。実際その体に余分な贅肉は見当たらず、あるのは鍛え抜かれ見事に引き締まった筋肉と韓当が歴戦の戦士である事を物語る数々の傷跡のみ。首から下だけを見比べるならばそこらの若者よりずっと逞しい事だろう。

今はじいさま連を率いて後人の育成に従事しており、前線に出る事は殆ど無いのだが……そんな人物にも召集を掛ける辺り、どうやら今回の袁術の命令は余程の内容らしい。一体どれほどの無理難題を押し付けてきたのかと考えていると、冥琳様が明らかに不機嫌そうな顔をした雪蓮様と共に王座の間へとやってきた。

「待たせた。皆、揃っているな」

王座に仏頂面の雪蓮様が座り、その隣に冥琳様が並ぶ。俺達將軍勢も一同に佇まいを直して軍議に臨む姿勢を取る。それを見渡した冥琳様が静かに口を開いた。

「では、軍議を始める。まず、今回皆に集まって貰った理由だが……」

言つて冥琳様がちらりと雪蓮様に目を向ける。相変わらずずすつとしていた雪蓮様だが、冥琳様の視線に気づくと然も面倒臭そうにため息をつきながら口を開いた。

「黄巾党の本隊を倒せ。ちなみに地方の本隊じゃなくて、真正正銘の大本営。それが袁術からの新しい命令よ」

雪蓮様の言葉に冥琳様以外、その場にいたほぼ全員が絶句した。俺は勿論の事、隣り

にいる瑾も。祭さんですら目を見開いて驚愕を露わにしている。海苑のじいさんは……あー、なんか笑ってるし。とうとうボケたのか？

「別にボケとりやせんよ。冥琳が吾輩の様な古い耄れを駆り出すくらいじゃからな、どれほどの無理難題かと思いきや……ほっほっほ、袁術の小猿もなかなか馬鹿には出来ぬのう」

「さいですか。つていうかじいさん、人の考え読むなよ」

「ほっほっ、まあそう怒るでない浩牙。むしろ師匠が元氣な事を喜ばんか、ん？」

「俺はじいさんが元氣じゃない姿を見た事が無い気がするんだが？」

「そんな事はないぞい。ほれ、最近は腰の調子があいたたた」

じいさんがあからさまな様子で腰をさする。いやいやじいさん、顔が笑いそうになるのを抑え切れて無いぞ。俺は呆れながらどうつつこんでやろうか、とかいうかいつそのこと腰に抜き手を突っ込んでやろうかなどと考えていると、ゴホンとわざとらしい咳を冥琳様が吐いた。

「浩牙、海苑殿。今は軍議の最中なのだが？」

「す、すみません冥琳様」

「うむ、少々おふざけが過ぎたかの。すまなんだな雪蓮ちゃん、続きを頼む」

「えー、私としてはもう少し見ていたかつ——」

「……雪蓮？」

本音が出そうになった雪蓮様を冥琳様が一睨みする。雪蓮様は慌てた様子で取り繕った笑みを浮かべた。

「あ、あはは……じよ、冗談よ冥琳、じよーだん」

「そうか。ならば早く話を進めてくれ。これではいつまで経つても軍議が終わらん」

「りよーかい。それから、ありがとう海苑。おかげで少し気分が晴れたわ」

「うむうむ、雪蓮ちゃんは笑ってる方が似合うでな」

皺の入った顔で海苑じいさんがかつと笑顔を浮かべる。さつきまで不機嫌そうだった雪蓮様も釣られた様に微笑みを浮かべていた。なるほど、さつきのはじいさんなりに雪蓮様を氣遣つての事だったのか。どうやら俺は上手くダシに使われた様だ。流石というか、じいさんには敵わないな。

じいさんの年の功に感心していると、表情を改めた雪蓮様が話の続きを始めた。

「さてと。まあ、話はさつき言った通りなんだけど、今度の作戦は黄巾党本隊の殲滅で、みんなに集まって貰った理由っていうのが、どうやってこの作戦を成功させるか、なんだけど……」

勢いを取り戻して話を続けようとした雪蓮様も、將軍勢の眉間に明らかに皺が寄つたのを確認した所為か見る間に勢いを失い、消沈しながら愚痴をこぼした。

「正直、無謀って言葉も裸足で逃げ出す話よね、これ」

雪蓮様の言葉に祭さんが腕を組みながら厳しい表情で頷く。

「うむ、話にならぬな。大賢良師率いる軍勢は十万以上とも聞く、城中の兵士をかき集めたとしても到底足りぬ」

「ならば袁術に兵を出させると言うのは……いえ、失言でした。お許しを……」

げんなりした表情を浮かべた雪蓮様に瑾が発言半ばで口を噤む。まあ、あの顔から察するに袁家からの支援諸々は期待できない事が確定しているんだろう。それに關しては何時も通りと言えばそれで終いだが、今回ばかりは猿とは言わず猫の手でも借りたい状況か……。

「大体察してるとは思うけど、今回の件で袁術からの援助は無いわ。その代わりに、各地に散ってる旧臣達を呼び戻す許可を取り付けたけどね」

「ほう……」

「なんと……」

海苑じいさんがスツと目を細め、祭さんが驚きと感嘆が入り混じった様な表情を浮かべる。蒼志と穩は何時も通りだが、俺はと言えば些か以上に動揺していた。

旧臣を呼び戻す……雪蓮様のその言葉が俺の中で繰り返し響く。それが意味する事を理解し、俺の中に深く根付くあの黒い感情が燃え盛る様な熱を帯びてゆつくりと這い

出して来る。忘れもしない過去が、あの光景が脳裏に鮮明な絵となって蘇る。喉を穿つ一本の矢、光を失った双眸、そして風が運んだ一つの鈴の音……。

一年半も前も出来事だと言うのに、厭味なくらいに鮮明。忘れてしまえばいいのに、忘れられない。最近は頻繁に夢にさえ出てくるほどだ。日に日に酷くなっていく。俺はこの、収まりのつきそうにないこの黒い感情を、俺は何時まで理性という名の蓋で封じておく事が出来るのだろうか……。

　　またも暴れ出しそうになっていた感情を理性で強引に抑えつける。そして改めてこちらに向けている視線に気付きハッと顔を上げれば、雪蓮様を始めとした全員の目が俺へと一点に集中していた。いつの間にか会話は途切れ、ただ沈黙のみが王座の間を支配している。

　　少し前に祭さんに注意されたばかりなのに、どうやら俺はまたやってしまったらしい。

　　全身からブウワツと汗が噴き出すのを感じながら、俺はどうにかして場を取り繕おうと必死に顔の筋肉を動かし笑みを浮かべた。

「え、えつと……そんなに見つめられちゃうと照れるなあ、なんて……」

　　頭をかきながら茶目っぽくあははと笑ってみる。全員の俺を見る目が更に厳しくなった様な気がした。

「浩牙、あなた大丈夫？」

心配というよりも警戒の色の強い声で雪蓮様が言う。とりあえずその場しのぎになればと俺は何時も通りを意識してその言葉に応える。

「……はい、大丈夫です」

「応えるまで微妙に間がありましたね」

「それに顔の筋肉が強張っているな」

ええい、瑾も穩のそんな分析をするんじゃない！ 余計に心配を掛けてしまうだろうが！ そんな言葉が喉から出かかったが、喰って掛かる訳にもいかずに笑顔を強靱な意志で貫き通す。

ギョッ

……なんか顔から変な音が聞こえた気がするけど、たぶん気のせいだろう。

「浩牙、凄まじく顔が引き攣つとるぞい」

「な、なにいつてるんだいじいさん。俺は何時も通りだぞ？」

「それが何時も通りの顔ならば、私はお前に医者に行く事を勧めるぞ？」

何気に冥琳様が酷い。というか、今の俺は一体どんな顔をしてるんだ。一応、俺としては笑っているつもりなんだが。

「何と言えがいいのか……いや、とりあえず無理をしているのがまる分かりな表情だ」

「そうですか……」

どうやら相当酷い顔をしているらしい。まあ、無理をしてるのは自覚している。それでも素直に出来ないのは一武官としてのちよつとした意地という奴だ。今は孫家にとつて大事な時期だ、俺個人の感情の始末なんて孫家が独立を果たしたその後で構わない。

その事を雪蓮様に伝えようと口を開きかけたその時、
「今回の戦、浩牙は城に残していく方が賢明かしらね」

俺よりも一瞬早く開いた雪蓮様の口から飛び出したその言葉に、俺は思わず耳を疑った。

「それは、どういう——」

雪蓮様の意志を問おうと乾いた口を必死に動かす。しかし俺の言葉は最後まで紡がれる事は無く、冥琳様の冷静な声によって遮られた。

「それは私が却下する。浩牙は我が軍の主戦力だぞ。それとも、浩牙の代わりになる人物がいるとでも？」

「いないわね。でも、今の浩牙は危うい……それは冥琳、あなたも気付いたでしょ」

「ああ、そうだな。だがそうであっても浩牙を戦力から外す事は出来ん。黄巾党の本隊が相手ならば尚更だ」

口論を繰り広げる二人を前にして猛烈な自己嫌悪に駆られる。俺が自分の感情をしつかりと操れていればこんな口論も起こらなかつた。まったくもって自分の不甲斐なさに嫌気がさす。雪蓮様が留守番を命じたくなるのも理解できるといふものだ。

自分の不甲斐なさが招いた結果を目の前で見せつけられたためか、穏やかでなかつた感情の波がスツと引いていく。思考も冷静さを取り戻し改めて自分の失態を自覚した俺は、黙つたまま近くの壁へと近づく。瑾などは訝しげな視線を俺にくれていたが、氣に留めず俺は壁に両手をつき、そして――

「だつらあつ！」

思いつきり自分の額を柱へと打ち付けた。ゴンツと鈍い音が響き打ち付けた反動で一瞬視界が白く染まる。加減無く打ちつけたためか壁にはひびが走り、額はじんじんと痛みを訴え生温かい何かが鼻筋を伝う。恐らく額が切れてしまつたんだろう、唇まで伝つて来たそれを舌で舐めとると案の定鉄臭い血の味がした。

「つしやー！」

気合を入れた掛け声の一つ、それから改めて王座へと向き直る。集まつた面々は先程まで口論していた二人を含め全員が啞然とした表情を浮かべていた。まあ、気持ちい分かる。突然殺気を撒き散らしたかと思えば今度は無言で壁に向かつて全力で頭突き。誰かどう見ても頭がおかしい人にしか見えない。何せやらかした本人がそう思つてゐる

し。

だがおかげで頭の中に渦巻いていた余計な感情その他諸々の一切合財を砕いて散らす事が出来た。おまけで額も砕けかけた気がするが、幸いにして少し深めに切れただけだ。正直、全てを排除しきれたとは言わない。悲しいかな、あの黒い感情は今も俺の中に根付いてる。だが当分の間はそれに思考を揺さぶられる事はないだろう。いや、断じてするまい。この額の痛みと共にそう誓いを胸に刻みこむ。

「こ、浩牙？ あなた本当にだいじよ——「雪蓮様！」な、なに？」

ドクドクと額からあふれる熱い情熱をそのままに雪蓮様の言葉を部屋に響き渡るくらしいの音量で遮る。さつきとは別の意味で大丈夫と問われる事を阻止したかったとか、そんな狙いは断じて無い。俺は王座の前へと無言で向かうとそのまま膝をついて臣下の礼を取る。それだけで何かを察したのか、冥琳様は一步離れた位置へと引き、雪蓮様は王座を背にして俺の前へと立つ。

「言つてみなさい」

先程の動揺など一切消えうせた静かな声。王の威厳に当てられながらも、俺は口を動かし言葉告げる。

「雪蓮様。正直に申しまして、我が身に巣くう憎しみは残念ながら未だ消えませぬ。しかしそれに揺さぶられていた不甲斐なき我が身は、たった今砕け散りました。凌公積の

名にかけて誓います。次の戦、我が鉄鎚の一撃が鈍る事は断じてないでしょう」

胸に刻んだ誓いを今一度、言葉にして雪蓮様の前で誓う。頭を垂れたまましばらく無言でいると、頭上から一つたため息が漏れる音が聞こえてきた。

「何と言うか、浩牙のやる事なす事いきなりすぎて、何を言ったら良いのか分からないわね」

「まったくだ。流石の私も今回ばかりは呆れたぞ。まさかいきなり壁に向かって頭突きとはな」

「ほっほっ、たまに馬鹿をやるくらいが浩牙にはちょうど良いて。かく言う吾輩も若い頃はやんちゃしたものでしょよ」

心底呆れた様子で雪蓮様と冥琳様が眩き、海苑じいさんが愉快そうに笑う。いやまあ、頭突きに関しては正直反省してる。何と言うか、その場の勢いでやってしまった感が半端じゃないし。今思えば色々と思考がぶっ飛んでたのかもしれない。

「まあ、気持ちは分かんなくてもないが、少しは加減というものをせい。洒落になつたらんぞ。ほれ」

「あ、どうも」

祭さんに差し出された手拭いを受け取り血の流れ出る額へと当ててる。後で洗って返さないよ。いや、いつそのこと新しいのを買って渡すかな。血の汚れて染みになりや

すいし。

なんて事を思いながら立ちあがり、額を抑えながら元の位置へと戻る。隣りの瑾がこれ見よがしにため息を吐くの苦笑で応える。いやほんと、やり過ぎたと思つてます、すんません。瑾に加え穩にも視線で謝罪を念を送ると、にっこりとした笑顔で穩は頷いてくれた。

「とりあえず、次の戦は浩牙さんも参戦という事で良いと穩は思いますよ。不安要素も無くなったようですし」

「自分も同じく。公積不在は前衛部隊に大きく響きますので」

「冥琳と穩、それから蒼志は同意見と。海苑と祭は……聞くまでも無いか」

「無論、吾輩も同じ意見じゃよ」

「うむ。相違ない」

軍師三名、将軍二名が俺の参戦に賛成の意を示す。それを確認した雪蓮様はやれやれと言いたげな表情を浮かべて苦笑した。

「分かった。予定通り、浩牙には前線部隊を率いてもらうわ。ただし、不穩な様子を見せたらふん縛つてでも後ろに回すからね？」

「御意」

雪蓮様の言葉にしつかりと頷き返す。そこで俺に関する話し合いは終わり、今回の軍

議の本題である黄巾党本隊討伐の話し合いへと内容は移る。俺の所為で時間が取られたため足早に軍議は進み、懸念事項の話し合いや役割分担などを決めていく。結果、旧臣達の下へ派遣する使者の選定は穩が、兵站の準備は瑾が、軍編成は俺と祭さんと海苑じいさんが、雪蓮様と冥琳様は大まかな軍略の決定を役割分担として受け持つ事となった。討伐行の方針としては話し合いの結果、旧臣勢の部隊とは行軍の途中で合流する事となった。

それぞれの役割が決まり軍議が解散となる。各々自分の持ち場へと向かっていく中、「浩牙」

冥琳様に呼ばれ、傍へと近づく。今回は色々とやらかしてしまっているため冥琳様の視線に少し身構えてしまったが、すぐに冥琳様の視線が優しいものへと変わるのを感じ、俺も体の力を抜いた。

「すいません、軍議をかき回しちゃって」

「まったくだ。何の前触れも無くいきなり殺気を当てられて、焦ったぞ?」

「面目次第も御座いません」

その場で深く頭を下げる。今回俺には非しかないので言い訳も立たない。

「まあ、江賊の時の件もあったからな。焦る気持ちは分かるが、今は孫呉にとつてようやく巡ってきた大事な時期だ。くれぐれも宜しく頼むぞ」

「分かつてます。お任せ下さい」

「ああ。お前の事は信頼している、失望させてくれるなよ」

発破をかけようとしてくれたのか、冥琳様がニヤリと挑発的な笑みを浮かべる。それに応える様に俺も笑みを返すと、満足そうに頷いて冥琳様は踵を返す。そしてそのまま立ち去るのかと思いきや、ふと立ち止まり冥琳様はその場で首だけを俺の方へ振り返ると、先程とは違うとつてもイイ笑みを顔に浮かべて言った。

「ああ、それから。壁の修理代はお前の給金から引いておくからな、その所も宜しく」
それきり冥琳様は振り返る事無く静かに王座の間を去っていく。その場に一人ポツンと残された俺は、今回は本当に色々とやらかしたなあと、改めて実感しながら一つため息を吐いた。

第八話

討伐行の方針が決まり、俺達が戦支度を整えるのには十日程の時間を要した。というのも、今回の戦は呉の現在の戦力の大半を注ぎ込む為、それなりに準備時間が必要だったからだ。だが正直に言わせてもらえれば、これでもかなり無理をした方だ。俺達、関係各所が昼夜を問わずに走り回ってこの時間だ。これ以上の短縮ははつきり言つて望めなかつただろう。

しかし幸いにして袁術の方から俺達をせっついてくるような事は無かつた。どうやら雪蓮様が、呉は万全の準備を整えてから出陣する旨を袁術に約束させていたらしい。それを聞いたのは俺達が既に出陣の準備を済ませた後だったのだが、雪蓮様を除いたその場の全員が皆一斉にため息を吐いたのは仕方がないと思う。俺だつて盛大にため息を吐いた。流石に寝る時間は惜しんだが、それ以外の時間は隊の編成と調練にほぼ費やしたと言つても良い。あの祭さんだつてさぼらずに、加えてお酒を飲む事をすら自重していたくらいだ。

それを、実は時間はたつぷりとありました、などと準備が終わつた後に言われてもただ空しいだけだ。それなら言わずに最後まで胸に秘めていてほしかった。ある意味、袁

術の監視下に置かれていたがために鍛えられた、呉の余裕の無い中での手際の良さが存分に発揮された出来事だったと言える。

とは言え、出陣準備に掛かる時間の大幅な短縮が為された事によって、測らずとも俺達には三日程のゆつくりと過ごす時間が出来た。これについてはむしろ雪蓮様の判断は間違っていないかつたのかもしれないと思える。準備で酷使した体力も三日あれば回復するし、これから戦に臨む兵達にとつては出陣の前に家族や親しい人と過ごす時間が出来た事になる。

決して長い時間とは言えないが、人によつては愛する人と過ごせる最後の時間となるかもしれない。部下達の事を思えば僅かばかりでもそんな時間が出来た事が、俺としては嬉しく思えた。まあ、一度所用で部下の一人の家に尋ねに行った時、中から「この戦いが終わつたら……」に続く、部下とそのお相手との会話が微妙に聞こえてきた時は何とも言えない気分になつたが……別に部下にそう言う相手がいる事を羨ましく思つたとか、そう言う事では断じてない。

とりあえず、後日その部下は後方の輜重隊に回しておいた。俺の私情的にその方が良い気がしたからだ、何となく隊の生存率に関わる様な予感がしたからだ。きつとその日の夢見が悪かつたせいだな。鎌持つた骸骨がケタケタ笑いながら旗振つてる光景とか、戦を目前に控えてる俺にとつては洒落にならなかつた。

ちなみに俺は、戦支度のために後回しにしていた仕事を片づたり、自分の装備の手入れに時間を掛けたりしている内にいつの間にか三日を過ごしていた。華も色も無い、何とも面白みのない事だが、その辺りは中間管理職の責任と忙しさゆえの悲しい定めとも言っておこう。まあ休む所はきっちりと休めたし、少々大げさな言い様かもしれないが。

とにもかくにも、準備を終えて万全の状態で城を発つた俺達は今、黄巾党が保有する出城の一つから少し離れた所へと陣を張っている。ここまでの移動に掛かった時間は七日ほど。討伐命令を下されてから既に半月以上が経過していた。

「まったく、官軍はちゃんと仕事してんのかね。惨敗に加えていくつかの出城まで占拠されるとか……。完全に給料泥棒じゃね？」

「そう言うな公積。官軍とて、大陸全てに手が回る訳ではない。むしろこの場合は、援軍が来るまでこの城を守り切れなかった城主を責めるべきだろう」

黄巾党が占拠する出城を遠目に眺めながらの俺のぼやきに応えたのは、今回の戦で俺の副官を務める諸葛瑾だ。その姿は何時もの文官服姿ではなく、歩兵が纏うような軽鎧を装備したものになっている。最もそれはもしもの時の保険の様なものであり、実際に瑾が剣を持って戦うからではない。瑾が普段纏う文官服は決して動きやすいと言えるものではないため、諸々の意味を兼ねてとりあえず身に纏っているだけだ。

もし流れ矢が襲い掛かって来たとしても当たり所が良ければ防げるし、悪くても鎧の上からならば致命傷にはなりにくい。それだけでも多分に装備するだけの価値がある。瑾本人は少し重いなどと呟いていたが、纏った時の利点を俺が伝えるまでもなく理解していた様で、装備する事に關しては特に渋る様子もなかった。慣れない様子で手こずりながらも軽鎧を身に纏おうとする瑾の姿が何気に隊の女性陣の注目を集めていたのは、四苦八苦する瑾の姿に愛嬌を覚えたからだろうか。

「しかし、捉え様によつては黄巾党が出城を占拠してくれているのはありがたい。これで合法的に補給拠点を手に入れる事が出来る……公積、聞いているか？」

「えっ？ お、おう。ちゃんと聞いてたぞ！」

しまった、考え事に夢中で瑾の話聞いてなかった。ジトつとした視線を向けてくる瑾に何とか応えを返そうするが、こういう時に限つて言葉が出てこない。

「あーつと、あれだろ。うん、そう、あれだ」

「聞いていなかったんだな」

あーうーと唸る俺を見て瑾が呆れながらため息を吐いた。正直弁解のしようがないので、あははと愛想笑いを浮かべて場の空気を誤魔化す。

「……まあいい。とにかく、孫権様達の合流が間に合わない以上、初戦は俺達だけで戦わなければならないからな。あまり気を抜かれるのは困る」

「悪い、ここまでの道中が安全過ぎたもんだからつい、な」

と言いつつも、俺としては別に気を抜いている訳でも油断している訳でもない。ただ指揮官が常時気を張っていては兵達の気が休まる暇がないだろうなと思っておどけた態度を取っているだけだ。行き過ぎると逆効果だが、その歯止め役は瑾が担ってくれている様なので問題ない。

「まあ、しめる所は瑾がしめてくれればいいさ」

「それは隊長の役目だろう」

「そんな決まりはウチには無いよ」

祭さんなんかが良い例だと思う。その歯止め役が冥琳様という所がちよつとどうかと思う所はあるが。

「はあ……お前は城にいる時と何ら変わりが無いな」

「変わる必要があるのか、と言いたいけどな。俺も他の皆も、その場その時の切り替えが得意なだけだよ」

「とてもそうは思えんぞ」

「思わなくても見ていれば分かるさ。幸い、瑾の立つ所は特等席だしな」

にしても初陣で前線指揮を担当するのは如何な瑾でも少々手に余る様な気がしないでもない。実戦じゃ軍略通りに事が運ばない事態も多々ありえる。一応調練では優秀

な指揮官ぶりをを見せてはいたんだが……まあ、もしもの時は俺が補助すればいい。

「そう言えば、俺は孫権様にはお会いした事がない。公積、孫権様はどの様なお人なんだ？」

「そうだなあ……良く言えば公明正大。悪く言えば堅物かな」

「堅物つて、お前な……」

「いやあ、雪蓮様公認だし。けど次代の王として相応しい方だと思うよ。荒事はあんまり得意じゃないけど、内政の手腕は雪蓮様よりもずっと上だからな」

「雪蓮様とは逆のお方という訳か」

「簡単に言えば」

雪蓮様は己の直感で物事を成功に導く天才型だが、蓮華様は王足らんと弛まぬ努力を続け成功を掴みとる努力型だ。といっても、その努力の位が半端じゃないから、言うなれば努力の天才という奴かもしれない。雪蓮様曰く、蓮華様は治世の王との事だ。

「なるほどな……ふむ」

「何気に瑾とは気が合うかもしれないな」

自分の役目に関して生真面目な所とか。

「まあ、すぐに会う事になるんだし、どんなお方なのかは自分の目で確かめるといいさ」
「そうだな、そうさせてもらおう。だがその前に、俺達は一仕事せねばなるまい」

「悪者退治のお仕事か」

「こちらが正義の味方という訳ではないがな」

人を殺す事に正義もなくそも無いだろう。あるのはそこに求める意味の違いだけだ。それでも世の民衆からは悪を滅ぼす正義の味方と見られるのだから皮肉なものだと思ふ。

「これも軍人の務め、とでも言い訳しておくか？」

「いや、言い訳なんぞ男だったらするまいよ。俺の矜持が許さない。それに言い訳述べてる暇があるなら、仇の影でも追ってるさ」

「それはしないとついこの間誓ったばかりだろう」

「つまりはあり得ないと言いたいんだ」

「ややこしい言い方だな」

「素っ気ない会話なんかつまらないだろ」

呆れた顔をしながらも口元には微笑を浮かべる瑾に釣られて俺も笑う。こうも気軽に話せるのは、男同士、加えて相手が気の置けない友人だからこそだろう。最もその話の内容事態は到底気軽と呼べそうにないものだが、逆に言えばそんな内容でも気軽に話せるという事で結果的には良しだ。重い内容の話を重い空気の中で話しても尚更気分が落ち込むだけで、得があるとは思えない。

「何と言うか、しまらないな」

「俺としてはこれくらい緩いのが丁度良い」

「自称切り替えの早いお前はともかく、俺はそこまで器用ではない」

「だったら箸で豆を掴む練習をお勧めする」

「そう言う意味では言っていないんだがな？」

「分かった。分かったから、とりあえずその手の鉄扇を下ろしてくれ」

にこやかな顔でこつちに向けて鉄扇を仰がれても恐怖しか感じない。というか目が笑ってないよ瑾さんや。瑾の趣味なのかどうかは知らないが、黒い鋼鉄製の骨組みには朱で染められた布地が貼ってあるので、威圧感が半端じゃない。

「それ、実は数多の血を浴びた曰くつきの鉄扇でした、とか無いよな？」

「ほう、それは面白そうだ。ならば栄えある歴史の第一歩は公積の血という事でどうだろう」

「断じてやめろ」

頑丈さには自信のある俺でも血が出るくらいに殴打されたら高確率で死ねる。

「安心しろ。前にも言ったがあくまでこいつは護身用だ。そんな曰くはありはしない」

「いや、分かった。それよりも俺としては冗談に真顔で返された事に焦ってた」

「なに、たまには俺がお前を弄りたくなる時もある」

「男に弄られるとか誰得なのかと」

「俺の気持ちを理解して頂けた様で何よりだ」

瑾が勝ち誇った様な表情を浮かべて鉄扇をパンと閉じる。今回の語り合いは最終的に瑾に調子を握られてしまった。俺の負けである。だが敢えて言おう。肉体言語をチラつかせるのは反則であると。ウチに配属になって早くも我が隊の色に染まってしまった瑾に苦笑を浮かべていると、兵が一人駆け足で俺達の下へと近づいてきた。

「凌統様、諸葛瑾様、孫策様がお呼びです」

「だそうだ、瑾」

「いや、お前もだからな」

そんな事をお互いのたまいながら、兵にご苦労と一声掛けて俺達は雪蓮様の下へと向かう。軍議の用にと設置された大型の天幕の入り口をくぐると、半月前の時の様に雪蓮様以下呉の重臣勢が揃っている。これから話し合う事の内容を感じさせるピリピリとした空気を肌で感じながら、顔を見合わせた俺と瑾は無言で揃って席に付いた。



見渡す限りの荒野に肅々と歩を進める一つの軍団の姿がある。規模はそれほど大き

なものではない。兵達各々の装備も特に秀でた所は無いだらう。極めて普通、その一言に尽きる。しかし隊列を乱すことなく整然と行軍するその様相は、彼らが間違ひなく精兵であること暗に示している。彼らは袁術により幽閉生活を余儀なくされていた呉の後継、孫権が率いる一軍。孫の一字を記した牙門旗を高く掲げたその軍団の先頭には、孫策と同じ長い桃色の髪を風になびかせる孫権の姿がある。

勇ましくも若干の緊張を纏う、そんな主君の隣りに、甘寧はただ黙して付き従っている。甘寧はもとから積極的の口を開く性格ではないが、今は初陣で緊張している己の主君を刺激するまいと気を遣っているため尚更無口になっている。加えて孫権を守るために常に眼光鋭く周囲を警戒しているため、傍から見たその姿はおつかない女性の一言に尽きるだらう。もつともそれは本人も自覚していることであり、そして別段気にする事でもない。むしろそれが周囲への威圧の手助けとなつていならば甘寧にとつては僥倖である。

しかしそう思っているのは甘寧のみであり、君主である孫権は甘寧にもつと楽な姿勢でいる事を望む事が多い。現に今も孫権は自分の一步後ろに控える甘寧の方を振り返り、困り顔な笑みを浮かべていた。

「思春、もう少し気を楽にしたらどうかしら。そんなに気を張つていては姉様達と合流する前にあなたが疲れてしまうわ」

「この程度ならば問題はありません。それに私の疲労などよりも、蓮華様の安全が最優先です」

「今はそこまで差し迫った状況じゃないでしょう」

「ですが——」

「思春？」

「……御意」

孫権に強く言われ、甘寧はしぶしぶと警戒のために張っていた気を緩める。普段は甘寧の意思を尊重してくれる事も多い孫権ではあるが、こういう所だけは断固として譲ってはくれない。臣として身体を気遣ってくれる事を甘寧は嬉しく思うが、同時にそんな気を遣わせてしまう事を申し訳なくも思っている。ゆえに孫権には気取られぬよう甘寧も平静を務める努力をしてはいるのだが、どう言う訳かどんなに隠そうとしても孫権には全て見通されてしまうのである。

孫権曰く「見れば分かる」との事だが、甘寧としてはその観察眼の鋭さに全力で敬意を表したい思いであつた。

「蓮華様は私の事など全てお見通しなのですね」

「そんな事は無いわ。ただ、あなたが私の事を思つて行動してくれている時、何となく感じるものがあるだけよ」

穏やかな顔で孫権がそう告げる。どうやら自分は思っている以上に孫権に意識を向け過ぎているらしい。しかしそれは甘寧にとつてはどうしようもない事だ。傍付きである甘寧の役目は主君の身を危難から守り通す事。しかしそれ以上に甘寧自身の感情として、自分の大切な理解者である孫権を守りたいと言う意思が甘寧にはある。それこそ自分の命を賭けるほどに。

孫権はその事にあまり良い顔をしないが、時に孫権が譲らないように甘寧もこの意思だけは誰に何を言われようとも変えるつもりは無い。

「はあ……思春、私がさっき言った言葉をもう忘れたのかしら？」
「えっ？ あ……」

孫権に言われ甘寧は気づく。どうやら孫権の事を考えるあまり、またも無意識に気を張り詰めていたらしい。

「私の事を考えてくれるのは嬉しいけれど、それも行き過ぎなのはどうかと思うわ」
「も、申し訳ありません」

呆れたように言う孫権に甘寧は慌てて頭を下げる。それを見た孫権はふつと小さく笑いを漏らした。

「蓮華様？」

「ふふつ、ごめんなさい。あなたの考え込むと周りが見えなくなる所が彼に似ていたか

ら、つい思い出し笑いをしてしまったわ」

「彼、ですか？」

「ええ。名前は凌統。前に一度、あなたに話した事が有ったでしょう？」

「……」

孫権の口から出たその名前を聞き、甘寧は自分の体がスツと冷え込む様な錯覚を覚える。いや、実際冷え込んだのだろう。体ではなく、心がだ。今も時たま夢に見るあの光景が突如として甘寧の脳裏に蘇る。薄い暗闇の向こうから甘寧を捉える、直視する事の叶わないあの男の瞳が――。

「……思春？」

「っ!？」

孫権に名を呼ばれ甘寧はハツと我に返る。冷や汗が背中を伝い服が背中に貼りついた時特有のじつとりとした嫌な感触を肌を感じる。いつの間にか早くなった鼓動を鎮めようと努めていると、不安そうな表情を浮かべた孫権の姿が甘寧の目に映った。

「大丈夫なの、思春？ 顔色が悪いわよ」

「……どうやら蓮華様の言う通り、少し気を張り過ぎた様です」

「だから言ったでしょう。当然、私は大丈夫だから。あなたは少し休みなさい」

「御意」

心配する孫權に一言そう応え、甘寧は揺れる馬の上で目を閉じる。だが睡魔など到底訪れるはずも無い。このまま闇の中に意識を沈めたならば確実にあの光景を見る事になるだろうことは容易に想像できる。今までならば情けない自分の姿に苛立ちを感じる程度で済んだかもしれない。

しかし今となつてそこに別の感情が加わる。それは……不安だ。何時か、甘寧はもし凌統が自分と再会したら一体どう反応するのかと、一体何を思うのかと考えた事があつた。そしてその再会を目前にした今、それは凌統だけではなく自分にも当てはまる事だと甘寧は気付く。

けれどそれもまた凌統の時と同じだ、自分の事とは言え先の事など甘寧には分からな
い。もしかしたら凌統は既に仇の事など当の昔に忘れてしまつているかもしれない。
ならば今更それを掘り返し許しを請う必要を甘寧は感じない。なぜなら凌統が自分の
事を親の仇だと知れば確実に孫呉の結束にひびが入る。いや、正確に言えば甘寧と凌統
の間にだ。

その程度の事で精強たる孫呉が揺るぐ事などありえないだろうし、又もしもの場合と
して、自分一人が消える事になろうとも今後の戦いにさほど問題は無いだろう。それで
も独立に向けて動き始めたばかりの今、少なからず支障は出るはず。ならば自分が抱え
る罪の意識など、甘寧は容易に捨ててしまえる。孫呉独立の夢に比べればそんなものは

塵芥に等しい。

だがもし、凌統が今も仇を捜し、そして甘寧がそうだと気付いてしまったなら？ その時、自分はどうすればいいのだろうか。せめて孫呉に不利をもたらさない結果に導かなければ……そう考えた所で甘寧にはその方法が思いつかない。そしてその代わりに気づく。

全ては凌統次第であるのだと。この件に関しては何もかも、凌統が無ければ始まらない。甘寧が出来る事は、凌統がどう動くかによつてきまるのだから。ならばその時を待つ事にしよう。今いたずらに気をすり減らすよりも、孫権の言う通り心身を共に十分休ませ、そして万全の状態でその時に望めばいい。

元から甘寧には先を考えて動くこうとするような器用な事など出来ないのだ。でなければ荒くれ者どもを率いて江賊になどなっていない。不器用な自分が器用に立ちまわろうと考える必要などなかった。不器用は不器用なりに何があるかと正面からドンと受けて立つ。ただそれだけで良い。

今までそうして、甘寧は生きてきたのだから。



「だあああ！ 生きてる心地がしないぞこらあ！」

「正直、黄泉路一步手前のこの状況おおお！」

俺と瑾がおかしな調子で叫ぶのと同時に、新たな血飛沫が既に赤く染まっている俺の鉄甲を更に深く染めた。後ろでは瑾が鉄扇で黄巾兵の喉を突き、骨を砕く事で始末している。しかしまだまだ、俺達の目の前には黄巾を身に付けた賊徒が数えるのも嫌になるくらいの数で隊列を展開している。いや、沸いてはただ突撃を繰り返すだけのそれを隊列と呼ぶかは些か疑問が残るが、とりあえずそれは置いておこう。今は目の前の敵を片づけるのが先だ。

さて、さつきまで瑾と楽しく話をしていたと言うのになぜいきなりこんな状況に陥っているのかと問われれば……まあ、答えるのは簡単だ。何時までも出城に籠る黄巾党に對し、俺達が攻城戦を仕掛けたからである。

といつても、今の状況を見るに野戦に限りなく近い攻城戦だと言うべきか。こちらの予想を裏切り終始城に籠って亀に徹すると思われていた黄巾党だが、俺と共に前衛部隊を率いている瑾が出城の城門を前にして思い出すのとはばかられる程の内容で籠城する黄巾党を挑発というか、罵りまくった結果、怒り狂った黄巾兵が続々と城から出陣。時間が掛かると思われていた攻城戦はあつという間に軍団同士が正面からぶつかり合う野戦へと発展し、前衛を率いていた俺と瑾は瞬く間に戦闘へ突入。そして今の状況に

至る訳である。

正直、本来時間の掛かる城攻めが可及的速やかに終了する事になりそうなのは俺達にとつても嬉しい事ではあるのだが……。

「これ絶対城攻め違う！」

「攻城戦と書いてやせんと読む！」

「軍師見習いの言う事じゃねえ！」

とまあ、高揚し過ぎて瑾が若干おかしくなっていることから分かるように、城から続々と湧いて出る黄巾兵をいの一撃に迎え撃たなければならぬ俺達前衛部隊の負担が半端じゃないのである。しかも本来後方から指揮を執るはずだった瑾が向こうの突貫に巻き込まれたせいで俺と肩を並べて最前線で戦う始末。この時点で俺達は柔軟な対応をする事がほぼ不可能となつてしまったため、この場は仕方なく密集隊形をとり、場当たりの戦いを強いられることになつてしまった。

幸いにして、俺達が黄巾党の勢いを殺した所にすぐさま雪蓮様率いる本隊が横撃を加える形で対応に当たつてくれていたので敵軍に囲まれる事は無いし、数の暴力があるとはいえ所詮食い詰め農民でしかない奴らに今の所は俺達が押し切られる心配も無い。ただ、やはりと言うか勢いを殺すための壁となる事は想像以上に心身に負担を強いられる。まあ、そろそろ体がその負担を負担と感じなくなつてきた辺り、俺も大概な状態に

なりつつあるみたいだが。

「とうか、こいつらどれだけ湧いてくるんだよ……。瑾、このままじゃ乱戦になって収拾がつかなくなる。一旦、戦線を下げるぞ」

「了解だ。弓隊、合図と共に敵城門に向けて一齐射！ 狙わなくても良い、矢筒が空になるまで撃ちまくれ！」

瑾の怒声が響くと共に、背後からギリギリと弓が引き絞られる音が鳴り始める。しかしこちらの意図に気付いたのか狂ったように突撃の勢いを強めた黄巾兵を重歩兵隊と共に俺は正面から迎撃。重歩兵の構える鉄槍に体を貫かれ、あるいは俺が振った鉄鎚に骨ごと体を砕かれ、黄巾兵は凌統隊の壁を打ち破る事は叶わない。皆、おやじの代から前線部隊を務めてきた猛者達だ、その練度と度胸を舐めてもらっては困る。

「瑾！」

「よし、放てっ！」

俺の声に応え瑾が鉄扇を振り下ろすのと同時に、放たれた数百の矢が城門に殺到する様にして降り注いだ。祭さん率いる精鋭達程ではないが、それでも正確に放たれた矢の雨が今まさに城門から出てこようとしていた黄巾党の出鼻を見事にくじく。

「今だ、押し返せっ！」

「「「おおおおお！！」」」

後続が怯んだために先程までの勢いを失った黄巾兵を、凌統隊の兵士達がここぞとばかりに押し返す。数と勢いに任せることで優勢を保っていた黄巾党は一瞬とは言えその優位性を失った事に動揺し、勢いによって抑え込んでいただろう恐怖というのの感情が湧出してしまったらしい。先程までの威勢の良さを瞬く間に失っていく。

良く訓練された軍隊ならば指揮官の指示の下、この状況を立て直す事も出来ただろう。だが黄巾党は規模は大きくても所詮は烏合の衆。指示を下せる指揮官がいようと、従う兵達がそれについて行けない。ゆえに一度崩れてしまえばもう立て直しがきかない。二の足を踏む前衛に影響を受けた後続も同じように勢いを失い士気が下がる。

それは負の連鎖となり、やがては軍全体へと影響を及ぼす。その先に待つのは巨大集団の崩壊だ。恐慌し、戦意を失って逃げ惑う者たちを滅ぼす事など新兵であっても容易い。そして今、実際に俺の目の前でその光景が広がりつつある。疲弊し掛けている凌統隊であろうとも、今の黄巾党を蹴散らす事など赤子の手をひねる様なものだろう。

だが、それをするのは俺たちではない。例え今、目の前に武功を挙げる機会が転がっているのだとしても凌統隊は後退する。戦の最後を飾るに相応しいのは断じて凌統隊ではないのだ。

「うしつ、重歩兵隊転身！ 弓隊は後退しながら牽制射撃を続行、横撃に当たる本隊の援護をしろ！ 相手はご丁寧な黄色い目印を付けてくれてるんだ、間違っても味方に当て

るなよ！」

「「応っ！」」

威勢の良い掛け声と共に再び矢の雨が城門目掛けて降り注ぐ。どうにか軍勢を立て直すために一度城内へ引き返そうとしていた黄巾党の前線部隊は、いきなりの転身に対応しきれなかつた後続部隊と衝突しており、指揮系統が完全に崩壊。退却もままならないまま完全に統制を失い動きが鈍り切つたそこに飛来した数百の矢は、容赦の欠片も無く黄巾兵達の体を突き破り地面に縫い付けていく。

次々と倒れていく同胞の亡骸に足を取られて転んだ者は慌てふためく味方の足に踏み殺され、そうでなくても余計に身動きが取れなくなり焦燥に拍車を掛けることの繰り返し。誰が見ても、軍隊としては敗北末期の状態となっている。そんな状況を、我らが主君こと戦の天才、孫伯符が見逃すはずがなかつた。

「全軍猛進せよっ！ 賊に情けは無用だ、全て狩り尽くせっ!!」

転身する凌統隊と入れ替わる様にして、雪蓮様率いる本隊が雄叫びを上げながら凄まじい勢いで弱り切つた黄巾党になだれ込んでいく。その先頭にはやはり雪蓮様の姿があり、既に何人もの敵兵を斬り殺したのか、すれ違いざまに見えたその顔には高揚と血化粧で彩られた実に獍猛な表情が浮かんでいた。

「公積……」

初見の人からすれば、普段は陽気な雪蓮様ゆえに想像できなかったんだろう。戸惑いの表情を浮かべる瑾に俺は苦笑で返す。

「うん、まあ……アレが戦場での雪蓮様だよ」

「アレは……いくらなんでも切り替え過ぎだろう」

「気持ちに分かる。俺も初陣で目にした時は目を疑ったからなあ」

正直に言えば、疑ったと言うよりも恐怖したと言うのが正しい。初陣を迎えた時の俺は今より幼くて心構えもまだまだ未熟だった訳だが、その時に偶然雪蓮様の殺気を間近で感じてしまった事があつた。自分に向けられている訳でもないのに、周囲に漏れだすその余波だけで明確な死を感じたのは今でもよく覚えてる。無論今となつてはそんな事にはならないが、だからと言って好んで感じたいとは思わない。

「もしやと思うが、孫権様もあの様な豹変をなさるのか？」

「あー……どうなんだろ。確か蓮華様も今回の戦が初陣だったはずだし、どうなるかは分からないなあ。でも祭さん曰く、アレは孫家の血らしいから、ひよつとすると……かもなあ」

とは言ってみるものの、孫家が分断されて以降蓮華様とは年単位で会っていない。その間、事実上の幽閉状態だった蓮華様とは手紙を介した連絡手段しかなかったため、そこまで詳しい状況は分からない。一応俺の記憶にある限りでは蓮華様には雪蓮様の様

な癖は無かったと思うが、蓮華様も成長著しい年頃になったわけだし、どうなっている事やら。

「まあ、たぶん大丈夫だろ。少なくとも瑾に被害は及ばないはず」

「そうなのか？」

「もしもの時は明命……周泰を生贄にすれば済む話だ」

「周泰……確か、呉の隠密頭だったか」

「ああ。今は蓮華様の所にいるだけだな。なかなか可愛い子だぞ？」

「いや、なんでいきなりそんな話になった」

さっきまでの戸惑いの表情はどこへいったのやら。いつの間にか平静を取り戻していた瑾が呆れた表情でそう呟く。まあ、特にこれといった意図は無いんだが、とりあえず瑾の気を紛らわせるためとでもしておこう。一応、その通りにはなったわけだし。

「まあ、何となくだよ。それにそろそろ戦も終わるだろうしな」

そう言って既に後退を済ませた凌統隊の中から先程まで命のやり取りをしていた場所へと目を向ける。黄巾党の根城となっていた出城は既に本隊と後詰めとして待機していた予備隊によって完全に包囲され、城門付近は開戦当初とは打って変わって今度はこちらの兵達が城内へと向けてなだれ込んでいる。

こちらからではもう完全に黄巾兵の姿を見る事が出来ない。周囲を囲まれ退路を断

たれてしまったのではそれも当然と言える。恐らく城内で最後の抵抗を試みているのだろうが、それもすぐに制圧されることだろう。あれほど煩かった剣戟の音も最早ほとんど聞こえない。聞こえるのは呉の兵士達の雄叫びと、そしてその中に混じる微かな断末魔の悲鳴くらいだ。

それもだんだんと聞こえなくなり、程なくして日が西に傾きかけた頃合い。輜重隊と共に城外で待機する俺達の耳に轟く様な勝ち鬨の音が聞こえてきたのと同時に、黄巾党本営征伐の初戦は呉の圧勝という形で終わりを告げた。

第九話

「失礼します。凌統將軍、陣の設営完了しました」

城内の一室に設けられた仮設の執務室。絶賛木簡と睨めっこを継続していた俺は、控え目な声と共に部屋に入ってきた兵へと顔を向けた。続けて窓の外を見てみれば日は既に没しており、見えるのは警戒のために配置されたいくつかの松明の灯がちらほらと。草木も眠るとまではいかないが、十分晚いと言える時間帯となっている。しかし状況を考えればそれも致し方無しだろう。俺は報告に来てくれた兵に笑って労いの言葉を掛ける。

「そうか。疲れている所を、ご苦労だった。今日はゆっくり休むようにと皆に伝えてやってくれ。ついでに少量なら酒も許可する。周瑜様達には内緒だぞ？」

「御意！」

嬉しそうな表情を浮かべて一礼し、兵が足早に執務室を出ていく。まあ、今回は最前線であれだけの猛攻を食い止めてくれた部下達だ。加えて報告にあった陣の設営の件もある。だから隊長から頑張った部下達へちよつとしたご褒美を送っても問題はありまい。幸い物資の数を纏めた木簡は現在俺の手元にある訳だし。

と言うのも、実は黄巾党の殲滅後、出城を制圧した俺達とはある役割を分担するために部隊を二つに分けた。一つはこっちに向かつて来ているはずの蓮華様と予定通り合流を図る部隊。そしてもう一つは占拠した出城の物資を確保し、出城を補給拠点として活用できるように陣を設営する部隊だ。

合流の方には当然ながら雪蓮様をはじめとする呉の首脳陣が向かっている。久しぶりの再会なのだから、呼び集めた当人である雪蓮様が行かないというのは嘘だろう。雪蓮様の傍を冥琳様が離れるのはありえないし、祭さんと海苑じいさんは……まあ、年功序列？ いや、大分違う気がするが、細かい事は気にしない。

さて、ここまで言えばもう分かるだろうが……というか第一、俺が出城にいる事が答えと言ってもいいな。とまあ、そう言う訳でだ。凌統隊は輜重隊以下いくつかの小隊と共にめでたく設営部隊へと回される事になった。ちなみに設営監督兼、瑾の補助として穩がこちらの担当へと回されている。人手は十分に足りているが、恐らくは見習いである瑾の模範になるようにと冥琳様が気を回してくれたのだろう。ありがたい事だ。

とは言え、それでも陣の設営にはかなりの時間が掛かってしまった。黄巾党が溜めこんでいた物資の整理もその理由の一つだが、一番の問題だったのは黄巾兵の死体の処理だった。死体を放置すればいずれ腐り、そして疫病の原因となる。閉鎖空間ならば尚更だ。それを防ぐために、城内制圧の際に出た大量の死体を城の外に運び出すのにかなり

の労働力が必要となり、そちらに人手を取られた結果、陣の設営が遅れに遅れてしまった。正直な話、夜まで掛かったとは言えよく今日中に設営が完了したものだ。

きつい戦を終えたばかりの部下達に、陣の設営のためにとすぐさま死体処理を命じた俺は酷い上司だろう。しかし雪蓮様が蓮華様と合流してこつちに戻ってくるまでは、この出城での最高責任者は俺になる。陣の設営が間に合わなければ当然俺の責任問題となるので、部下達には悪いが少々無理をしてもらった。

ゆえにさつきは飲酒を許可する、などと偉そうにのたまったが、本音を言えば今回のこれは無理を通してくれた部下達へのお詫びみたいなものだ。ぶっちゃけ、物資の私的流用も立派に問題行動なのだが、こちらはさつきも言った通り管理する本人が俺なので簡単にもみ消しが叶う。

「ま、所詮一時的な物だけだし。やっぱ権力は有効活用しないと」

「でも、それが他人にバレちゃったら……意味無いですよえ」

「そりゃあそうだ。けど、今回は俺一人でやってるんだから、俺が誰にも話さなければ……つて、うおわあああ!？」

不意打ちで聞こえてきた声に驚愕した俺は、のけぞった拍子に盛大に音を立てながら椅子から転げ落ちる。転んだ拍子にゴツツと鈍い衝撃が後頭部に走り、視界に一瞬星が散った。

「あらら、大丈夫ですか浩牙さん」

ぐおおおと呻きながら床の上でのた打ち回っている俺の上からおつとりとした声
が降ってくる。床に強かに打ち付けた後頭部の痛みに顔をしかめながら反転した視界
を見上げてみれば、にこにここと笑顔を浮かべた穩が上から俺を見下ろしていた。

「穩、何時の間に……」

「さて、何時からでしょう?」

内心を伺わせない笑みのまま、穩が楽しそうに答えをはぐらかす。もはや完全に遊ば
れている。話の方向によっては更にどつぽにはまるかもしれない。というか、完全に酒
の件がばれている。だってさつきそう言っていたのだし。

「あはは……。出来れば、見逃して欲しいかなあなんて」

「見逃すですかあ……。何をです?」

分かってて首を傾げる穩に、多少イラツときた俺は悪くないと思う。なのでここで少
しやり返すのも、仕方がないと思うんだ、うん。

「……この絶景を楽しんでる事とかかな!」

「絶景……はっ!」

キリツとした真顔で言い放った俺の言葉に、穩が慌てて服の裾を抑える。いやまあ、
穩が上から俺を見下ろしていて、そして俺が仰向けで倒れているのだから仕方がないと

言えばそうなんだが……つまるところ、今の俺の視界には裾から覗く穩の下着がバツチリと見えているのである。うむ、まさしく大人な漆黒の絶景。ただ、穩にしては少々狙い過ぎな気がしないでもないが。

「やだあ、もう。浩牙さんつたら!」

「いや、ちよ、穩! さすがにそれはああだだだだだつ!」

頬を羞恥で若干赤く染めた穩が服の裾を手で押さえながら足を上げ、それが下ろされた次の瞬間、さつきとは別の意味で俺の視界が漆黒となる。頭のとっぺんから足のつま先まで頑丈さには定評のある俺だが、流石に顔面を靴裏でぐりぐりされてはたまらない。というか理屈抜きにして当たり前に痛い!

「やめつ! 悪かった! 俺が悪かったから! 冗談抜きにぐりぐりは止めて!」

「そうですよ。最初から全部、浩牙さんが悪いんですからね。反省してますか?」

穩が顔を踏みつけていた右足を上げ、覗き込む様にして聞いてくる。痛みからと共に解放された俺の視界に入ってきたのは、言葉にするならぷりぷり辺りが妥当そうな怒った顔の穩。そんな穩に向けて、俺は心からの気持ちを込めた言葉を言い放った。

「ふつ、反省はしてるが後悔はしてなああああ。あああああ〜!!」

再び視界が暗転し、城内に俺の悲鳴が木霊した。



「そうか、それは災難だったな」

「杯片手にほろ酔いで言われても慰めにならないっす」

顔を若干赤らめ棒読みでそう返してくれる親友を前に、俺は杯の中で揺らめいている酒をぐいっと一気に飲み干した。そしてすぐさま、少ない酒を一気飲みしてしまった事に気付いて顔をしかめる。

時刻は深夜、見張り番以外の兵達は皆既に寝静まった頃合い。穩のお仕置きを気合で耐え抜き、その後陣の設営を終えて暇をしていた瑾を捕獲……もとい誘ってからになるから、この酒盛りを始めてもうそれなりの時間になるだろうか。酒盛りとは言っても小さめの酒瓶一本を瑾と二人でちよこちよこ飲みながら語らい合っているだけ。まあ、ちよつとした気分転換とほんの少し口を軽くする程度には十分だから問題は無い。

「それで、穩様には何か言われたのか？」

「いや、酒の件については特に何も。まあ穩も部下の子たちと飲むらしいし」

というのは半分嘘で、実際は穩が飲み過ぎないように見張ってくれと俺が陸孫隊の女子達に頼みこんだというのが本当。ああ見えて穩は酔うと些か暴走するので、誰かしらが歯止め役をしないと不味いのだ。ちなみに歯止め役を女子に頼んだのは、酔った時の

穩は男共には少々刺激が強いからだ。何がどうなつて刺激が強いのかは想像にお任せしたい。

「ふむ、穩様も酒は嗜まれるのか」

「もちろん。ただ、穩は酔うと暴走する時があるから、あまり飲ませるなつて暗黙の了解が俺達の間にあつたりする」

以前宴会の席で酒に酔つた穩が暴走した時の事を思い出し俺が困つた顔を見ると、瑾が杯を口に運ぼうとしていた手を止めて眉をひそめた。

「それは大丈夫なのか。まさか明日に響いたりはいしないだろうな？」

「そこは心配無い。穩は酔つて暴走はあるが、どれだけ飲んでも二日酔いだけは絶対にならないから」

「そ、そうか。それはそれで……また面妖だな」

「あの祭さんでさえ、飲み過ぎたら二日酔いにはなるからなあ」

宴会の次の日、雪蓮様と祭さんが気だるそうに頭痛を訴える中、同じように酒を暴飲していたにも関わらず、穩だけは何時も通りニコニコとして軍議の場に現れた時は思わず顔が引きつったのを覚えている。ちなみに俺と冥琳様はしっかりと節度を持って飲んでいたので二日酔いにはならなかった。

「とまあそう言う訳で、穩の心配は全く必要ない。むしろ俺としては瑾の方が心配だよ。

今回の戦は初陣にしちやかなり厳しい戦だったからな」

俺の言葉に、瑾が酒を注ぎたしたばかりの盃を見つめて沈黙する。本来後方で指揮を執る役目の軍師が、初陣にしていきなり最前線で敵軍の勢いを削ぐ壁役だ。しかも俺の隣りで矢面に立ってである。精神的な面でかなりの負担を強いられただろう事は容易く想像できる。しかしそれをおくびにも出さないのは、瑾の男の意地なんだろうか。

俺としては是非にも尊重してやりたいところだが、生憎と部下の調子に気を配るのも隊長に務めだ。瑾のことは冥琳様に頼まれているのもある。とうかこの酒盛りも、実は瑾の調子を聞きだすために設けたのだ。俺は嘘は許さないという意志を視線に込め、黙り込んだ瑾をじつと見つめる。しばらくして、俺の視線に観念したのか瑾が大げさにため息をついて口を開いた。

「そうだな。正直、かなり疲労していると自分でも認識している。あの時は感情が昂ぶっていた所為か平気だったが、戦が終わってから、間近に迫った死の恐怖を思い出して手が震えた。本心を言ってしまうえば、二度とあんな事は御免だ」

影の差したその表情で、覇気の欠片も感じられない声で呟く瑾の姿は先程までとは打って変わってとても弱々しい。恐らく今夜はうなされる事だろう。だがそれでいいと、俺は心の底からそう思う。

「いいんじゃないか、それで。むしろ当たり前の感情だろうさ。死を目の当たりにして

平静でいられるようなら、そいつはきつと人じゃない。もし当たり前の恐怖を忘れたなら、そいつはケダモノ以下の存在だよ」

「なんだ、慰めてくれていいのか？」

「俺の考えを述べただけだ」

おどけた様に答える俺に、瑾は自嘲の笑みを浮かべた。

「そう言う事にしておこう。まったく、我が妹はとつくの昔に覚悟を決めて戦場へと身を投じていると言うのにな……この上、同僚に心配まで掛けるとは。情けない」

「人間、情けない部分の一つや二つあったほうが面白みもあるってもんだろ？」

問いかける様な俺の言葉に、瑾は一瞬ポカンとした表情浮かべた後、先程とは違う愉快な笑みをフツと口元に浮かべた。

「公積が言うと言説力があり過ぎて困るな、その言葉は」

今の瑾の精一杯の強がりなんだろう。だがその憎まれ口は、己の情けない部分に関して心当たりの多過ぎる俺には皮肉にもならない。むしろデスヨネーと開き直れる自信がある。

「けど、おかげでしつかりと耳の奥にまで届くだろ？」

「悔しいくらいにな。やれやれ、公積と俺は歳もそう違わないはずなんだが……」

「悪いけど、同僚である以前にこちとら瑾の上司様なんでね。傲慢じゃないが、場数もそ

れなりに踏んでるんだ。経験の差って奴だよ」

「なるほどな。なら俺は、年の近い気心の知れた上司兼同僚を持てた事を天に感謝をするとしよう」

「そこは嘘でも俺に感謝して欲しかった」

「俺は嘘で感謝はしたくないのでな」

澄まし顔で言う瑾の顔には、もうさつきまでの影は見られない。それでも顔を上げないでいるのは、きつと瑾なりの照れ隠しなのだろう。そしてそれを誤魔化すかのように少ない酒をちびちび黙々と喉に流し込む瑾の姿に、俺は隠すことなく苦笑を浮かべる。

「まあ、若い時の苦労は買ってでもしろってね」

「隊長のお心遣いに感謝感激、恐悦至極だ。なに、明日の合流までには覚悟も整理も終わらせておく。だからこの話題はもう終いだ。それとも公積は、俺の心中から思考の一片まで理解しなければ落ち着かないのか？ 残念だが、俺にはそっちの気はないのだがな」

「それだけの憎まれ口を叩かれれば、心配する気も失せるってね。可愛げのない部下を持つて、隊長さんは涙目ですよ。是非に部下様ご自慢の妹様と交換願いたいところだ」

「貴様、妹はやらんぞ！」

「何時も通りの瑾に戻った様で何よりだ」

酔いもそこそこに叫ぶ瑾を軽くいなし、俺は残り少なかった酒を最後の一滴まで杯に注ぐ。瑾があつと小さく叫び抗議の視線を向けてきたが俺は肩をすくめただけで、悠々として杯を傾ける。

「うむ、勝利の美酒の味はまた格別だな」

「ふん、一体何と戦っていたのやら」

「……聞きたいかね？」

「いや、よそう。これ以上酒の肴を提供してやるのも癪だ」

挑発的な笑みを浮かべてみたが、残念ながらすげなく振られてしまった。ちよつと残念だ。

「さて、俺の話はもういいだろう。次は公積、お前の話を聞こうではないか」

「俺は大した肴は持ってないぞ？」

「そうでもない」

いつもの余裕さを取り戻し静かな口調で言う瑾に、俺は背筋にスツと冷たいものを感じて身を固くする。警戒を強めた俺を見て瑾が軽く苦笑する。

「ふつ、そう身構えるな。公積は俺の悩みを聞いてくれたのでな。恩返しと言つては何だが、俺も公積の悩みを聞いてやろうと思っただけだ」

「瑾さんや、俺のどこを見たら悩みがある様に見え——」

「親の仇」

瑾が口にしたその言葉に、話題をはぐらかそうと言葉を続けようとしていた俺の口がぐつと詰まった。

「凶星の様だな」

「……どこで、いや誰からその話を聞いた」

抑えようも無く殺気の滲んだ俺の問いかけに、瑾は眉を八の字にして困った様な表情を浮かべる。

「誰からと言われてもな。設営指揮をしていた俺の耳に、たまたま勝手に独り言が聞こえてきた。つまりはそう言う事だ」

隠す気などさらさらないのだろう。明言するのを避けながらも、暗に一人の人物を指し示すその答えに、俺は大きくため息を吐いた。

「独り言、ね。という事は……なるほど。冥琳様はこのために穩を瑾の補佐に付けたのか。まったく余計な事を」

「俺は余計な事だとは思わん。出陣前の軍議でも言ったが、公積の存在が前線部隊の要である事くらい、仕官して日の浅い俺でも分かる。そんな公積が孫呉にとつて大切なこの時期に揺らいでいるとなれば、冥琳様も気にしない訳にはいかなだろう」

「それに関しては問題無いって、あの時に体張って主張したのになあ」

だがまあ、そこまでしないと問題無いと主張出来ないほどののかと、冥琳様には取られてしまったのかもしれない。今更だが、本当に馬鹿な事をしたものだと思う。

「……それで、穩からはどこまで?」

「公積が悩みを抱えている事、そしてその中心にいるのが公積の親の仇ということだけ聞いている」

「なるほど、詳しくは俺から聞けつてか」

「ああ」

話の踏み込んだ部分は当人から直接聞くべきだと、穩のほんのささやかな氣遣いだろ
うか。とは言え、いくらなんでも与える情報が少な過ぎるんじゃないやなからうか。

「その心配は必要無い。この二つだけで話の概要くらいは十分に予想できる」

「……じいさんもそうだが、なんでこうウチの面子は俺の考えを読むのかね。俺、そんなに分かりやすいか?」

「顔に出やすいのは確かだな。考え事をしている時など特にそうだ」

即答かつ断言。しかもまだ付き合いの短い瑾に言われるとは。つまり他の皆はずつと前から知っていて指摘しなかつたという事なのか。軽く恨むぞ、まったく。

「まあ、今日は酒も入っている。俺もお前も少々口が軽くなってしまうのは仕方がない。そうだろう?」

不敵に笑い、瑾がどこからともなく新しい酒瓶を取りだす。俺が用意したのは目の前にある一本のみなので、恐らく瑾があらかじめ用意していたものだろう。俺が誘わなくても瑾から誘うつもりだったのか……。

「俺、瑾の事を誤解してたわ。瑾の心配なんて必要なかった」

「それ、本人を前にして言うか？」

「今から着にされるんだ。負け惜しみくらい言わせてくれ」

言つて一つ大きなため息を吐き、そして大きく深呼吸をする。瑾はそれを黙したまま静かに見つめてきて、俺が気持ちを落ち着けるの待っている。決して話を促そうとはしないが、聞かずに終わらせる心算もまた無いのだろう。目が完全に据わっている。

「長い話になるぞ？」

「愚問だな」

「つまらない話だ」

「問題無い」

然もありません。分かつてはいたが、やはり逃げる事は出来ない様だ。

「さて、どこから話したものかな」

俺は覚悟を決めて、ゆっくりと口を開く。そして目の前の親友に語る。今も忘れられない、あの夏口の戦での出来事を。そこで見た光景の全てを。そして溢れ出しそうにな

るのを必死に抑えつける事しかできない、俺の内に巢食うあの感情の事を。

結局その日、地平線からお天道様が出すまで、終ぞ執務室の明かりが消える事は無かった。

第十話

陣の設営を無事に終え、迎えた翌日。

朝食を済ませ、城壁で寝ずの番をしていた兵達に下がって休むようにと伝えに来た俺は、交代の兵士達に混ざりながらそのまま城壁の上で地平線をじつと見つめていた。

視線の先には、砂塵を巻き上げながらこちらへと近づいてきている孫の牙門旗を掲げた軍隊の姿がある。別れる前よりも規模が大きくなっている事から、雪蓮様達は無事に蓮華様達と合流する事が出来たのだろう。それを嬉しく思うのと同時に、ついにこの時がやってきたかと内心では身構えてしまう。

元江賊だという、蓮華様のお傍付の人物。その正体がおやじの仇であるか否か、それがついに明らかになる。雪蓮様に誓った手前、どんな結果であっても冷静さを保ちたいとは思ふ。だが昨晚に瑾と話し合っただけだからか、俺の心はざわついていた。

もつとも、周りの兵達が普段通りにしていることから、少なくとも以前祭さんから指摘された時のように、辺り構わず殺気を撒き散らす様な状態にはなっていない。

雪蓮様達との合流を間近に控えた今、出城の受け入れ準備は万全。瑾も無事に気持ちの整理を終え、穏と一緒に下で最終確認をしている。問題は何一つ無いはずだ。

強いて言うなら、俺と瑾が若干寝不足であることぐらいだろう。だが取り上げるほど大した問題でもない。瑾はどうか知らないが、俺の方は少し体の感覚が鈍い程度だ。恐らく昨日の疲労が抜け切らなかつたからだろうが……正直、将として不覚としか言いようがない。体調管理は何にも勝る基本。それを怠るとは、情けないにも程がある。

「それに——」

——それにこれでは、もしもの時に——

——咄嗟に得物仇を振り下ろ殺せない——。

「つて、何を物騒な事を考えているんだ俺は……」

バシバシと己の頬を叩き、今さつき脳裏によぎった考えを振り払う。ここ最近は自分でもはつきりと自覚できる程に情緒が不安定だ。事あるごとに感情が乱れる。もつと冷静になろう。さもなければ、近いうちに何か取り返しのない事をしてしまいいそうな予感がする……。

「しっかりしろ、俺」

言いながらも一度だけ頬を張り、昂ぶりそうになる感情をどうにか制御する。思い

のほか力を入れ過ぎたせいで頬がひりひりするし、それを見ていた周りの兵達の訝しげな視線が刺さるが、今ならそれも気を紛らわせるための材料にはなる。

「大丈夫だ、問題無い」

「何が問題無いんだ？」

「わふっ!?!」

不意に真後ろで発生した俺の独り言に対する返答に、俺は思わず声を上げて驚いた。バツと振り向いた先に立っていたのは、俺に向けて何とも微妙そうな表情を浮かべる、下で穏と確認作業をしているはずの瑾だった。何と返答していいのか咄嗟に浮かばず口をばくばくとさせる俺に、瑾からさらなる追い打ちが掛かる。

「公積よ。客観的な立場から見ても、その驚き方はお前には似合わない」と俺から進言させてもらうが……：どうだろうか」

正直余計な御世話である。というかそもそもその原因が瑾が声を掛けてきたせいだと言うのに——などなど、ようやく浮かんできた言葉は内心で呟くにとどめ、俺は少々どもりながらも瑾に言葉を返した。

「べ、別に狙ってたんじゃないぞ」

「だろうな。完全に的が迷子だ」

バツサリと、一瞬の思考すらも挟んでいないと思われる程の見事な切り返し。並大抵

の人なら（会話的な意味で）止めの一撃になるのだろうか……甘い。瑾には悪いが、この手の一撃は俺にとって反撃の好機である。

「ふむ……だったら迷子にもあたる様にもっと乱射するしか手が無いな。そうだ、瑾に對してだけ使う設定も盛り込めばさらに良い。よし、そうしよう」

「やめろ、公積はともかく俺の部隊内での人物像が崩壊する」

それはそれで隊員達からどんな反応が返ってくるのか大いに気になる所ではあるが、まず間違いなく俺と瑾の部隊内での立場がお亡くなりになること確定なので断念するしかあるまい。なのでここは瑾の渋顔を見ただけで満足しておくことにして、苦い表情を浮かべていた瑾に冗談だと一声掛ける。

瑾から視線を含めた無言の圧力が飛んでくるが、いかんせん最初に仕掛けてきたのは瑾の方からなので、俺は気付かないふりをして誤魔化す事にする。しばらくして根負けしたのか、瑾が降参のため息を吐くのを見計らってから、俺はようやく真面目な話を切り出した。

「それじゃ報告を聞くとしようか」

「はあ……ああ、そうだったな。とりあえず凌統隊の準備は完了。城に残す部隊の方は、俺と穩様の裁量で先の戦での負傷兵とそれに予備隊の半数を加えた数を置いていく事にした」

「予備隊の半数か……まあ、妥当な線か」

昨今の新兵の加入で再編したばかりの予備隊は当然ながら練度の低い兵達がほとんどだが、出城のお守り役くらいならば能力的にも経験を積む場としても丁度良いところだろう。

「残るは輜重隊の編成だが、これは本隊と合流した後に冥琳様のご指示を仰ごうと思う」
「糧食の量も合流した蓮華様の部隊の規模次第か」

俺が先程城壁から見渡した限りでは、俺達の部隊と合わせても呉の軍勢の規模は一万に届くかといったところだろう。少なくとも無いが、決して多いと言える数でもない。集結しつつあると言う諸侯の中では少ない方に入るだろう。

「さて、どう動いたものか……」

「諸侯の軍勢もあるのだ。万に一つも負ける可能性はないだろうか？」

「ただ勝つだけじゃ駄目なんだぞ？」

「分かっている。だが冥琳様ならば美味しい所を横から華麗にかつさらう策を立てる事くらい造作もあるまい」

「かつさらうのに華麗も何も無い気がする」

「後腐れないように他者を出し抜き戦功を一人占めする事は、一つの策として華麗とは言えないか？」

「あー、はいはい。そう言う腹黒ーいのは軍師の方々だけでやっちゃってくださいな。俺は筋肉担当なんでね」

俺はあくまで冥琳様達の指示に従い行動するだけだ。だが別に思考を放棄したわけじゃない。思考した結果、その方がより効率的な結果がある事が出来ると結論付けただけだ。とは言え、余りにも俺の矜持に反する命を下されたならば流石に反抗の意志を見せるだろうが。

「公積の場合、そのまま脳筋で無いところが厄介なのだな」

「あくまで賛成した指示に従うっただけで、命令通りの操り人形になるつもりはないぞ」
「そうは言っていないが、やはり俺としては上司は扱いやすい人間の方が……」

「こらそこ、さらりと危ない発言するんじゃない」

まったく、なんでこうウチの軍師達は揃いも揃って腹黒揃いなのか。もっとうこう、純粹無垢な可愛らしい軍師がいてもいいんじゃないだろうかと思う。

「軍師なぞ、皆そんなものだ。叶わぬ望みは捨てたほうが良い」

「ふっ、もはや語るまい。悟られは気にしない方向で突き進む覚悟を決めたからな！」

「潔いな。弄る種が減るのは残念なのだが」

「言ってる。それにだ、今の瑾の発言には矛盾がある」

「矛盾だと？」

俺の発言が癪に障ったのか瑾が不機嫌そうに眉をひそめる。そんな瑾に俺は勝ち誇った笑みを浮かべて言い放った。

「軍師は皆腹黒だという瑾の発言……ならば、瑾がいつつもいつつもいいいいいつつも、事あるごとに俺に誇らしげに自慢する可愛らしい妹とやらも、例にもれず腹黒だと瑾は言うのだな！」

「?!?!」

「ずぎゅーん！ そんな脳内音声が響き渡ると同時に、瑾ががっくりと両手両膝をついた。心なしか肩もぶるぶると震えている気がする。だが顔だけはしつかりと上げて俺と目を合わせたままだ。瑾の目はまだ死んでいない。ならばと俺は更なる追い打ちを掛ける。

「私塾に通っていた事と、そして瑾が自分の能力と比較して優秀と称する辺り、瑾の妹も軍師かそれに関する知識を私塾で学んでいただろう事は想像に難くない。加えて瑾は入隊した頃に教えてくれたな。妹が頑張るならばと自分も奮起したのだと。これらを纏めてみれば必然的に、瑾の妹もどこかの勢力で軍師またはそれに準ずるものとして活躍している、という結果に行きつく。そして瑾は今、軍師になるものは皆腹黒だと言った。しかし瑾は日頃から妹は可愛いと公言してはばからない、つまりは矛盾した発言をしたという訳だ！」

ビシツと指さして放った俺の発言に、ついに瑾が項垂れた。日も高いはずなのに影が落ちていくように見えるその背中からは、加えて猛烈な自己嫌悪の空気が迸っている。

「お、俺は、なんという、ことを……」

絞り出す様にして途切れ途切れに呟く瑾。あ、これは不味い。ちよつとした意趣返しのもつもりだったのだが今回は少々言い過ぎたかもしれない。見るからに瑾の心がぼつきりと逝っている。

「あ、あのー、瑾さん？」

「ふ、ふふつ。冥琳様や穩様ならばともかく、公積に矛盾を指摘される日が来るとは。俺もそろそろ潮時か……」

「なにもそこまで思いつめなくても。て言うか、潮時どころか軍師としてはまだ見習いだろうに」

「ああ、そう言えばそうだったな。潮が満ちるまでもなく干上がったという事か」

「勝手に干上がられても困るつての。それに人なら誰しも一度や二度の間違いくらいあるつて。ちなみにその妹さんつて今どこで頑張ってるんだ？」

話題を変えようと投げかけた問いに、瑾はピクツと肩を震わせて顔を上げた、のは良いが完全に目が死んでいる。うーむ、これは一体どうすればいい。こんな姿、間違つても蓮華様には見せられないぞ。

「……最後に文を貰った時は確か、義勇軍の劉備なる人物の下にいと書いてあったか」
「劉備……か。聞かない名前だな」

「……義勇軍だからな、知名度はそう高くないはずだ」

「そこまで言つて、再びがっくりと瑾が項垂れる。しかし義勇軍の大將、劉備か。どんな人物か気になるが、今回の黄巾征伐にも参加しているのだろうか。いや、瑾の妹が軍師としてついているならば、武功を挙げるのに絶好の機会であるこの戦をわざわざ見過ごすとは思えない。恐らくは俺達と同じく機を見計らつて参戦してくるはずだ。義勇軍ながらどの程度の実力を持つているのかは、その時に拝見させてもらおうとしよう。」

だがその前に、未だに俺の横で落ち込みまくつてる瑾をどうにかせねば。

「はあ……朱里、兄は駄目な兄だったようだ。自身の発言で己が妹を貶してしまふなど、愚兄極まる行いをしてしまった、ううっ……」

「あー、いい加減立ち直つてくれないか？ ほら、あれだ。きつと腹黒い軍師達の中にも例外は存在するつて」

「……例外？」

「そう、例外だ。例外、例の外、他とは違う稀有なる存在。ほら、こうやって言いかえるとなんだが凄いいがししないか？」

「た、確かに……」

かなり無茶な変換だとは思いますが、どうやら効果ありの様だ。絶望の淵にでもいたか様な瑾の表情が俄かに明るくなる。

「例外、他とは違う。そうか、そういうことだったのか」

にしても、さつきから何か呟いているようだが一体どうしたと言うのだろうか。訝しく思い、ぶつぶつ呟く瑾の顔を覗き込もうとすると、それより一瞬早く立ち上がった瑾が、立ち上がるのと同時にガシツと俺の手を掴み、目をきらきらと光らせながら迫って来た。

「朱里は例外中の例外。つまりはそう、並ぶ者の存在しない唯一無二の正義！ そう俺に言いたいのだな、公積！」

「お、おおう」

天啓を授かったとばかりに急速に立ち直った瑾の気迫に押され、俺は曖昧な返事をしながら思わず一步引いてしまう。とういかなんだ、瑾の妹好きーがとんでもなく加速してしまった様な気がしてならない。まあ、誰に被害をもたらすわけでもないのだろうし、別段気にする事でもないんだらうけど。強いて言うなら、瑾の親友として瑾の将来が心配だ。

「ああ、何て晴れやかな気分なのだろうか。今なら絶対絶命の状況をも引つ繰り返せる策を献策できそうだ」

「そ、そうか。それは良かった。ならその調子が変わらないうちに穩の所へ行くか」
「ああ、そうしよう」

復活した瑾を連れ、俺は城外で既に待機しているだろう穩の下へと向かう。城門を出た所で部下と話し込んでいた穩がこちらに気づき、さも怒っていますと言わんばかりに頬をぷくつと膨らませた。

「お疲れさん。無事に準備が整ったようでありにより」

「あのですねえ、浩牙さん。いくら私の方が適任だからといっても、陣の構築を丸投げするのはいかがと思います」

「いやいや、穩だけじゃなく瑾にも同じように頼んだぞ？」

「そうだとしても、結局他人に任せっぱなしじゃないですかあ」

「そこは適材適所だろうに。実際、物資の管理調査は殆ど俺一人で纏めたし」

「といっても、城内に保存されていた物資の調査そのものは部下達に任せただけ、実質的な作業量で言えば半分以下になる。だがそれを言えば穩も設営指示だけで作業自体は兵達に任せていたのだから、結局はどっちもどっちという訳だ。

「うー、最近の浩牙さんは冥琳様にも劣らないくらい人使いが荒いです」

「それは断固として否定するぞ。むしろ俺は優しい方だ」

「秘密でお酒を振舞ったり？」

「うっ、それを出してくるか……」

「うふふっ、冗談ですよ」

まったくもって冗談には聞こえないからたちが悪い。こと内心を悟られない事に関しては穩は冥琳様よりも上な気がする。穩の笑顔に騙されてはいけない。

「そんなに警戒しなくても良いじゃないですかあ。ほら、私も何だかんだでお相伴にあずかったわけですし」

「ああ、そう言えばそうだった。なら、何も心配は無いな。いざとなったら瑾も含めて道連れにすればいいだけか」

「待て、俺も含まれるのか？」

「当然。二本目を持ちだしたのは瑾だという事を忘れたとは言わないぞ」

「う、むう……」

事実、一本しか用意して無かった俺に代わり、二本目を用意していたのは瑾なのだから反論はできないのだろう。瑾がこれ見よがしに口をへの字に曲げている。

「とまあ、不毛なお話はさておきですね」

「不毛って……」

言いだしつぺは穩だろうに、という文句を飲み込んで、俺は穩の方へと顔を向ける。すると以外にも真剣な光を湛えた穩の目に、俺は呆れを浮かべていた顔を引き締める。

「昨夜、蒼志さんとはお話し合つたと思ひますけど」

「ああ、その事か」

心配と危惧の入り混じつた表情の穩の言葉に、かぶせるように俺はそう答える。最後まで聞かなくても分かるさ、甘寧の事だろう。もとより瑾と話し合うきつかけを作つたのも穩なのだし、気にしていない方がおかしい。

「それで、どうなんですか？」

「正直に言うのだな。分からない、だ」

「分からない、ですかあ」

「そう、分からない。ぶつちやけてしまえば、その時その場にいる俺次第という事になる。という事で、何かあつたら対応頼むわ」

「随分と無理難題な事を言つてくれちゃいますねえ。いかに軍師と言えど人の心の機微にまで策は立てられませんってばあ」

当たり前だ。それが出来るのは仙人とか導師とか呼ばれる存在くらいのものである。

「手っ取り早い方法を言えば、何かしでかしそうになつたら公積を力づくで抑え込む事だろうか……」

「そうですねえ……それをやるなら、祭様と海苑様にもお話を通さないといけなくなり
ますよねえ」

「それでいいんじゃないか？ 祭さんも海苑のじいさんも俺がちよつと危ない状態なのは知ってるんだし」

そもそも王座の間で殺気を撒き散らすなどという事をやらかしてしまっているのだ。今更隠す必要も無い。

「自覚しているのならばどうにかならないのか」

「瑾なら分かるだろ。感情つてものは厄介なものだつて」

「そうだな……確かに俺も朱里を思う度に——」

長くなりそうな瑾の話はさておき、現状どうなるかは俺にも本当に分からない。できれば俺の壮大な取り越し苦労だったと言う事で笑い話の一つにでもなる事を望んでいるが、やはり仇を見つけ出したいというのもまた本心だ。しかしこの二つは相反するゆえに、俺としては非常にもどかしい。

「我ながら困ってるよ、本当に」

「もう、困ってるのは浩牙さんだけじゃないんですからね」

さつきの瑾ではないが、返す言葉もないとはこの事だ。代わりに苦笑を一つ穩に向けて浮かべると、穩は仕方がないなあと言いたげな表情でため息を吐く。

「ふう……手加減とか、きつとできませんからね」

「もしもの時はそれで構わないさ。それじゃ、我らが主君を迎えに行きますか」

既に目前まで迫った本隊の殆どは進軍を停止している。今こちらに向かっているのは、一足先に入城する各部隊の精鋭たちのみだ。雪蓮様達や合流した蓮華様一行もあの中にいる事だろう。

揺れる感情をどうにか抑え込み、俺は瑾と穩を引きつれて雪蓮様の下へと向かった。



「ふう……」

これでもう何度目になるだろうか。ため息を吐きながら、甘寧は心の中でそう独り言ちた。目前には合流前に孫策が奪取した出城が迫っている。そしてその事が甘寧の緊張に一層の拍車を掛けていたりする。

先日、主君である孫権は当初の予定通り無事に呉本隊を合流を果たした。合流するなり、姉であり孫家の当主でもある孫策に、先の戦で先陣切って戦場に出陣した事に関して食って掛かった時には流石の甘寧も内心肝を冷やしたが、周りの反応が何時もの事だと雄弁に語っていたため、すぐさま冷静さを取り戻す事が出来たので問題は無かった。

ただ、己の主君孫権とは正反対の性格をしていた当主孫策の存在に大いに動揺させられ、またそれを微笑を浮かべられながら見抜かれた時には、顔から火を噴きそうになった事がく

らい唯一の不覚であろう。

宿将である黄蓋や、同じく長年呉に仕えている韓当に関しては、十分に上に尊敬に値する人物だと甘寧は思った。冷静を極めたかのような視線で自分を観察していた軍師の周喩には、若干の警戒心を覚えたが。

そんな事もありながら自己紹介を済ませた折、孫策を含めた数人の顔に一瞬だが厳しい表情が浮かんだのを甘寧は見逃さなかった。それはつまり、自分の存在が何か懸念を孕んでいると言う事に他ならない。そして甘寧はそれに確実と言える心当たりがあるのだから。

とうとう向かい合う時が来たか。覚悟を決め、その時が来るのを今か今かと待ち構えた甘寧であつたが、その直後に盛大な空振りをする事となつた。

いなかつたのだ、その場に。心当たりが……いや、凌統が。

それを聞かされた時、一瞬言葉を失つた自分を誰が責められるだろう。聞けば凌統は本隊と別行動を取り、今日の前に見えている出城に拠点を設定する任を先日から負つていたのだという。ゆえに自己紹介の場にはいなかった。何も難しくは無い簡単な話だが、機を外され盛大に空回りした所為か甘寧は余計に悶々とした時間を過ごす事となつた。甘寧は理不尽だと分かりつつもこの時ばかりは凌統を少しばかり恨んだ。

そうして一夜が明け、事ここに至つた次第である。今度こそ凌統と顔を合わせる事に

なる事は必至、ゆえに今一度覚悟を固めようとしてはいるのだが……いかんせん先日の空振りの反動が大きすぎた。拭い去ったはずの不安が湧き出し、それを自覚する度にかんいかんと自分に言い聞かせる始末。情けなくてため息が出る、その繰り返しが何度目にもなるため息の正体であった。

「ふう……」

またもや漏れるため息。それにいらつき、いつそのことそんな自分を殴つてやろうかと考えた矢先、甘寧の肩に背後から手が置かれた。咄嗟に振り返つた先には、少し驚いた様な表情を浮かべた黄蓋の姿があつた。

「……祭殿でしたか」

「うむ、そうじゃ」

「何か御用でも？」

思い当たる節は無いがとりあえずそう尋ねた甘寧に、黄蓋はうむと真面目な表情を浮かべる。それに気を引き締める甘寧だったが、

「うむ。とりあえずお主、その辛気臭いため息をどうにか出来ぬか」

次の瞬間には大きく脱力していた。

「はあ、申し訳ありません」

「かーっ！ その顔からして既に辛気臭いわ！ もつとこう、生氣溢れる若人らしい顔

は出来んのか？」

「おっしゃっている意味が分かりませんが」

実際は分かっているが、甘寧の性格では孫策の様に振舞う事など出来る筈もない。当たり前だが、甘寧の答えに納得の言っていない様子の黄蓋がふんつと一つ鼻を鳴らす

「思春よ、そんな澄まし顔では男も寄り付かんぞ？」

「必要ありません。私の使命は男を誘う事ではなく、蓮華様の身をお守りする事です」

「真面目なやつめ。そんなでは肩が凝るじやろうに」

「体調管理には常に気をつけていますので」

「う、ううむ。目眩がしそうなほどに真面目じやな」

言つて黄蓋がしかめ面をしながら腕を組む。なぜそこまで自分にこだわるのか。気に掛けてくれるのは嬉しい事だが、その方向性が合わないなど甘寧は内心で思った。

「まあよい。儂らと共に過ごしておれば、いずれ角も取れるじやろうて」

「では、これからは一層気を引き締めて蓮華様の身をお守りいたします」

「はあ……重症じやなこれは。仕方がない、海苑と穩を招集して策を練るとしよう。ついでに策殿にも声を掛けて……」

ぶつぶつと何やら呟きながら黄蓋が立ち去るのを甘寧は見送る。結局何がしたかったのか甘寧にはよく分からなかったが、おかげで気を紛らわす事が出来たので構わない

だろう。

幾分か落ち着きを取り戻し顔を上げてみれば、出城はすぐ目前にまで迫っている。そして出城の正門へと視線を向けてみれば、こちらに向かつて歩いてくる人影が三つ。その中央に位置する人物へと目を向けた時、甘寧の心臓がドクンと跳ねた。

遠目からでも分かる、朱染の陣羽織。あの日あの時、甘寧が討ち取り、そして受け継がれているはずのそれを纏うのは、間違いなく――

「……凌統」

己の口から小さく漏れたその名前は、行軍の足音にかき消される事もなく、甘寧の耳にはやけに大きく聞こえた。

——夏口の戦いより一年と約半年。凌統と甘寧……因縁の二人が出会う時が、ついにやって来たのだった。

第十一話

「浩牙さーん！」

雪蓮様達と合流するために出向いた先で、嬉しさを滲ませたそんな第一声と共に俺を出迎えてくれたのは、長い黒髪を風になびかせた小柄な少女だった。笑みを浮かべ、小走りにしては早い速度で近づいてきたその少女——周泰こと明命を、俺も満面の笑みを浮かべて迎える。寝不足の所為か、こちらから駆けよる際に少しつまづきそうになったのは、明命には気付かれないうように全力で立て直した。

「久しぶりだな明命。元氣そうで何よりだよ」

「はい！ 浩牙さんもお変わりなく」

「ま、変わる様な事もなかったからなあ」

というのは少し嘘になるだろうなと思いつつも、俺はそれを表に出さないように努める。瑾ではないが、妹分には弱い部分を見せたくないという兄貴分としてのちよつとした意地だ。

「そうなんですか？」

「そうなんです。でも明命はちよつと変わったみたいだな。背、少し伸びたんじゃな

か?」

「ほ、本当ですか!」

明命が先程よりも更に嬉しそうな表情でばあつと笑みを咲かせる。仲間との再会より身長が伸びた事の方が喜びの優先度が高いというのも何だか複雑な気分だが、小柄な事を気にしている明命にとつてはそれだけ重要なだろう。笑みの中に若干ながら不安を見せている明命の頭に、俺は苦笑を浮かべながらポンと手を置いた。

「本当だよ。以前はもう少し目線の高さが下だった。それでも、まだ下なのは変わらな
いけど」

「それは浩牙さんの背が高いからです! うう、チビで悪かったです」

「はは、拗ねない拗ねない。まだまだ、明命の成長はこれからだつて」

「……それはどこを見て言ってるんですか」

「全体的な面を見て」

そう言つて俺はジトツとした目を向けてくる明命の頭を優しく撫でる。少しくすぐつたそうにしながらも気持ち良さそうな表情を浮かべた明命だったが、すぐさまハツと我に返ると顔を赤らめ、隠密らしい機敏な動作でシュバツと俺から離れた。

「あ、危ないところだったです。もう少しで浩牙さんに懐柔されてしまうところでした」

「うむ、もう少しで懐柔できそうだった」

「否定しないんですか!？」

「するつもりすらない!」

「しかも言い切られました!？」

久方ぶりの再会に俺がつい調子に乗って明命を弄る、もとい明命と漫才を繰り広げていると、恐らくはこれを見たかったがために明命を先に行かせたであろう張本人が満足げな、かつ生温かい目をしてこちらへと近づいてきた。

言わずもがな、雪蓮様である。

「はいはい二人とも。嬉しいのは分かったから、漫才はそれくらいにね」

「あつ、も、申し訳ありません雪蓮様!」

「いいのよ別に。気持ちは凄く分かるしね」

「そうだぞ明命。黒幕さんなんだから謝る必要は無い」

「えっ!？」

「だあれが黒幕ですって?」

雪蓮様がわざとらしく片眉を上げて言う。しかし直後、その肩にポンと置かれた手に、傍から見ている見事だと思ふほどに雪蓮様がビクッと震える。

「その言葉に反応している時点で、自分が黒幕だと言っている様なものだと思うがな」

「うっ……冥琳」

見え見えなしらを切ろうとした雪蓮様に冥琳様の鋭い指摘が突き刺さった。雪蓮様がぼつの悪そうな表情を浮かべ、明命があわあわと顔を真っ赤にしながらうろたえる姿に、遅ればせながら雪蓮様の横に並んだ冥琳様が珍しく声を上げて笑った。

「はははっ。まあ、確かに雪蓮の気持ちも分らない。随分とご機嫌の様だな明命」

「め、冥琳様まで」

真っ赤で泣きそうな表情をする明命を微笑ましい気持ちで眺めていると、俺の一步後ろで事の成り行きを見守っていた瑾がぼそつと一言呟いた。

「あの冥琳様が声を上げてお笑いに……明日は槍でも降るのだろうか」

「聞こえているぞ蒼志。何なら、今からお前の上にだけ実際に槍の雨を降らせても良いのだが？」

「っ、謹んでお断りさせていただきますましゅ！」

眼鏡を光らせてニヤリと薄い笑みを浮かべた冥琳様に、瑾が最後に嘯みながらも全身全霊で辞退の言葉を告げる。流石は冥琳様、あの瑾にカミカミ口調を発言させるとは……しかも地獄耳まで完備して、まさに最強である。

「お、なんじやなんじや。面白そうな事をしておるからに。儂も交ぜんか」

「止めぬか祭よ。こういう時、吾輩等の様な老いばれは隅で茶をすすりながら見守るの

が定石というものであろうて」

「誰が老いぼれじゃ！ 儂はまだお主程には歳を食つておらぬわ！」

祭さんに海苑じいさんも揃い、俄かに呉の主要な面子が揃い始める。だが最もこの場にいるべき人物の姿がまだ現われていない事に、俺は疑問と共に一抹を不安を感じながらも、極めて気楽に雪蓮様へと口を開いた。

「あの雪蓮様。蓮華様の姿が見えないんですが。明命がいるという事は、無事合流を果たしているんでしょう？」

「あー、うん、そうなんだけど……」

俺の問いかけに、雪蓮様が言いにくそうに言葉を濁す。どうしたのかと思ひ他の面子にも目を向けてみれば、俺たち三人と明命以外の全員が厳しい表情をして俺に何か推し量る様な視線を向けていた。

先程まで朗らかな雰囲気か漂っていた場には一瞬にして重い空気が立ち込める。たつたそれだけで。それだけで、俺の中にあつた一抹の不安が最悪の確信に足り得るには十分だった……。

「これが天の采配とかつてやつなら、天とやらは随分と腹立たしい性格なんだろうな。上げて落とすとか、相当ひねくれた奴に違いない。くそが、最悪の予想が的中か」

「浩牙……」

俺の声が信じられないくら冷たい事に驚くのと同時、雪蓮様達の危惧は一層強まったようだった。後ろの二人も気付いたようで、何時でも動けるように瑾が身構えたのが心配で感じ取れる。事情を察していないらしい明命の不安そうな表情が、この場では場違いに浮いていた。

「蓮華様は……いえ、蓮華様とそのお傍付はどこですか？」

「それを聞いて、どうするの？」

「久方ぶりの再会ですよ？ 挨拶くらいは交わしたい……というのもありますけど」

「再会の挨拶するのにそんな殺気は必要無いでしょう？」

まあ、そうだろうなと自分でも思う。だが、もう何度目にもなるがこれでも抑えてい
る方だ。枷を外せば、今すぐ俺は一目散に蓮華様の気配目掛けて直行してしまうに違
ない。

「そうですね。だからそれ以外の目的もあると素直に言わせてもらいます」

「隠すつもりは無しの様ね。それで、その目的って？」

「試させて下さい」

「試す？」

怪訝な顔をした雪蓮様の目を見て俺は小さく頷く。

「そのお傍付が蓮華様を守るに相応しい者なのかどうか。俺に試させて下さい」

「一応言っておくけど、既に私が認めた人物よ？ それじゃ不満？」

「なら言い方を変えます。俺が認められる人物であるかどうかです」

「なるほどね。確かにそれは、浩牙にしか確認できないことだね」

納得した表情で言う雪蓮様の顔は依然厳しいままだ。そのまま無言で何かを考えている様子だったが、しばらくして周りを見回してた雪蓮様に口を閉じて事を見守っていた冥琳様達が目で領きを返したのを機に、雪蓮様は俺の方へと向き直った。

「分かった。まあ、先延ばしにしてもいつかはケリをつけなきゃいけない事だし、だったら今この場でっていうのもアリか」

「いいのだな、それで」

「ええ。幸いこの場には浩牙を止められるだけの面子も揃ってるしね」

それが最後の確認だったのか、雪蓮様の答えに領いた冥琳様が輪から外れてどこかへと向かう。こうなる事を見越して、恐らく蓮華様には奥で待機しているように言うか何かしていたのだろう。戻ってくるまでにそう時間は掛からないはずだ。

「言っておくけど、あくまで試すだけよ。絶対に血は流させないから」

「大丈夫ですよ。俺の得物は、上手くやったら血は出ません」

「……蒼志、浩牙の鉄鎧を取り上げて」

「はっ」

「え、あつ、おい！」

反論する間もなく後ろから伸びてきた瑾の手によって、瞬く間に腰に提げていた二本の鉄鎚が奪われる。流石に瑾から強引奪い返すわけにもいかず雪蓮様に非難の目を向ければ、雪蓮様は何か問題でもと言いたげな表情を浮かべた。

「試すだけなんだし、何も得物を持つて戦う必要は無いと思うのよね。正直、素手でも十分に武力は推し量れるし」

「素手であつてもやりようはありますよ？」

「あんまり油断していると、浩牙の方が痛い目に合うかもしれないわよ？　なんとつて私が認めた子だもの」

挑発に聞こえるかもしれないが、恐らくは本当の事なんだろう。少なくとも蓮華様の傍付を任せるくらいには腕がたち、そして人柄に關しても蓮華様が認める人物。客観的に見ればそんな人物に喧嘩を売る俺の方が呉にとつては逆賊なのだろう。だがそうだとしても、俺が内に抱えるこの感情は理屈ではどうにもできない。治める唯一の手段は、俺自身が納得の出来る方法でケリをつける以外に他は無い。

「連れて来たわよ」

一言、その言葉と共に戻つてきた冥琳様の後ろには、二人の人物が確認できた。一人は雪蓮様によく似た姿の、雪蓮様と同じ王者の風格を纏う女性。見間違いようもない、

孫家の次女孫権こと蓮華様だ。そして、呼ばれたは良いがこの場に漂う剣呑な空気に目を白黒させる蓮華様の背後にもう一人女性が佇むようにして立っている。

その女性が立ち位置をずらして姿を見せたその瞬間、俺は束の間息をすることを忘れた。停止した様に見える光景の中で、女性がゆつくりと一挙一動することに心臓が跳ねる。防具らしい防具を纏わず、ただ身軽さを追求したらしき軽装に映える、漆黒の黒布と紫の髪が否応なしに俺の目を引く。

それは、以前江賊征伐の折に俺が賊から手に入れた甘寧の外見情報と違わずに一致していた。しかしそれだけでは決め手にはならない。この広い大陸だ、同じような姿をした人物など何人もいることだろう。

だが俺は確信していた。服装など関係なく、鋭い眼光の宿るその目を見た時から。今ここにいる、蓮華様の傍に控えるこの女性こそが、父である凌操を討った我が仇敵……甘寧であると。

「……」

視線に気づいたのか俺と傍付の目が合った。いや違う、最初からずっと合っていた。向こうも俺の事をこの場に来た瞬間から見つめていたのだ。あの時の様に黒布で顔は隠されておらず、曇りの無いその瞳はただ一心にこちらを見つめ、感情の揺らぎを見て取ることはできない。

「思春と共に待機していろと言われたと思えば、次は一緒に来てくれだなんて。冥琳、一体どうしたというの?」

すぐ目の前にいるはずなのに、蓮華様の声が遠くから聞こえる。何やら待たされた事に文句を言っているらしいが——ああ、そんな事はどうでもいいか。

「少し込み入った事情がありました」

「込み入った事情?」

込み入った事情? とんでもない、何も難しい話じゃない。俺の目の前におやじの仇がいる。ただそれだけの事じゃないか。

「それが私に待機を命じた理由?」

「蓮華様というより興覇に。と、ここは言うべきでしょうか」

ああ、そうだろうとも。何せここ最近俺の情緒が不安定な一番の原因なのだから。

「思春に……どうということ?」

「それは、俺から説明しますよ」

「えっ?」

そうだ、これは俺の問題だ。いや、俺と甘寧の問題か。ならば冥琳様の口から説明というのも野暮な話だ。だって折角、事の本人がこの場に揃っているのだから。

「浩牙ではないか! 久しぶりだな、会うのは何年ぶりになる……浩牙?」

今の俺が普通ではないと感じ取ったのだろうか。驚きと喜びの色が即座に失せ、不安そうな表情を蓮華様が浮かべる。まったく、主君の妹君にそんな顔をさせてしまうなんて、これはとうとう逆賊決定かもしれないなあ。

「どうしたというの浩牙。様子が変よ？ 何だか怖いわ」

「それで正しいですよ蓮華様」

そう言つて俺は蓮華様の方へと一歩足を踏み出す。するとどうだろう、案の定傍付が俺と蓮華様の間に立ち塞がる。俺と傍付との距離が急速に縮み、傍付の顔がよりはつきりに見えるようになる。それでも傍付の表情は微動だにしない。大したものだ、これだけ殺気をぶつけているというのに。

「蓮華様を巻き込むのは止めてもらおう」

「……そうだな、あんたの言う通りだお傍付の方。なら、とりあえず自己紹介から始めるでしょう。最も、そんなもの既に必要だとは思えないけどな」

「……」

無言のままこちらをじつと見つめる傍付に向け、俺は朱染の陣羽織を強調するようにしながら声高々に名乗る。

「我が名は凌統。字は公積。呉の猛将、凌操の息子。そしてこの陣羽織は、我が父凌操が夏口の戦にて敵に討たれた折に父より受け継いだものだ」

事細かく、聞かれてもいない事まで含めた俺の名乗りにも、傍付の表情がピクリと動いた。どう対応するから考えているのだろうか。しらを切る？ それとも謝り通して関係の改善を図る？ それも良いだろう、それならば俺もそれに応じた考えがある。だが、この女がそんな事をするとは思えない。こいつはそんな弱い人間の目をしていない。

その程度の人物なら雪蓮様が認める訳がない。

「我が名は甘寧——」

きつとも、そして恐らくも無い。これは確信だ。この真つ直ぐな、どこまでも自分の意志を貫き通そうとする強い瞳を持つ、この女は——

「かつては江賊の長として、そして今は蓮華様の矛であり盾として、孫呉に忠誠を誓う者。そして——」

逃げる事は無く、折れる事も無く、例え恐れや不安を抱えていようとも——

「夏口の戦で、孫呉の猛将……いや——」

怯えを見せず、背を見せず、むしろ獐猛な歯牙をむき出しにして——

「貴殿の父君、凌操を討ち取った者だ」

真正面から正々堂々、俺にぶつかってくる事だろう。

「そうか……ああ、そうか」

やはり間違いじゃなかった。目の前の傍付こそが、おやじの仇である甘寧であつた。ずっと捜し続け、そして一時はもう諦めようかと思う事もあつた、我が仇敵たる甘寧だ。その甘寧がようやく見つかった。これから孫家を支えて行く仲間の一人として。いや、いや、これ以上の皮肉があるだろうか。しかもその人物が、誰よりも蓮華様の身を案じ、例え孫呉の臣である俺であろうとも、危機を感じたのならば前に出て立ちはだかるといふ行動に移るほどの忠臣とは……。

「く、くくっ」

「何がおかしい」

「さて、何がだろう？　仇敵が道を共に歩むべき仲間として見つかった事かもしれないし、そんな仇敵が……憎むべき存在が、悔しい事に既に孫家の一員たる人物だと認めている自分がある事がかもしれない」

「なんだと……？」

くつくつと笑いながら言った俺の言葉に甘寧が怪訝な表情を浮かべる。だつて仕方がないだろう。今の俺は酷く感情的だ。ならば、誰からをも蓮華様を守り通すという甘寧の意志に、ひいては孫家の忠誠へと続くそのあり方に、同じ孫家に仕える者として敬意を覚えずにはいられようか。まったくもって、完全に頭が冷えてしまった。

「やれやれ。蓮華様が傍に置き、雪蓮様が認めた時点で、まあ俺も認めざるを得ないだろ

うなどは思っていたけど……ははっ、これじゃ俺一人だけが悪者みたいだ」

「……」

自嘲とも呼べる俺の独白を、甘寧は一言一句逃さないとばかりに俺の顔をじつと見つめて聞いている。だが恥ずかしいとは思わない。むしろ聞いてくれていている事に感謝したい。

「悔しいけど完敗だよ。あんたみたいな人に討たれたのなら、おやじも喜んで成仏するだろうさ。もしかしたら、俺が縁を結んでやったんだ、なんて言つて今頃空の向こうで自慢しているかもな」

「貴殿は……それでいいのか？」

それは、きっと俺の心中を察しての言葉だったんだろう。なぜなら今、俺は孫呉の臣下という立場の上で言葉を紡いでいる。ならば俺個人、立場にも何にも縛られずに考えたのならばどうなのかと。それならば、勿論答えは――

「ああ、構わないさ」

「……私が憎くはないのか」

「いや、勿論憎いさ。だが今はもう、それを理由にあんたを殺すつもりはない。孫呉の臣下として、あんたを殺す事は呉の不利益になるからとか、そんな理由じゃないぞ？　これは歴とした俺個人の意志だ」

正確に言うならば、そこには少なからず孫呉の臣としての俺の考えも反映されてはいるだろう。だが、孫呉の臣下である事も俺という人物を形作る中で欠かす事の出来ない重要な要素だ。だからいくらその他の事を横に置いた上での個人の意志と言えども、それらの影響を完全に切り離して物事を考えるのというのは土台無理な話だと俺は思う。

「なら、その理由とやらを聞かせてもらいたい」

「いいだろうとも。確かに、今ここであんたを殺せば、確かに仇打ちちは果たせるだろう。でもその後はどうする？ 仲間殺しの咎を背負い、そして今いる居場所を失い、求めている夢すらも奪われる」

「夢……」

「そう、夢だ。我が主君の悲願を阻む全ての障害を打ち砕き、そして達成までの道を作る事。それが、俺がこの鉄鎚に掛けて——」

そこまで言いかけて鉄鎚を手にしようと腰に回した手は悲しいかな、空しくひよいと空を切った。そう言えばさつき、鉄鎚は取られたんだっけか。くそう、なんとも間の悪い。

「どうした？」

「いや、まあともかくだ！ こういった事を損得勘定で語るのもなんだと思うけど、俺があんたを殺した時に得られる利益は達成感という名の形の無いものだけで、失うものは

その他のもの全てだ。どう考えたって割に合わない」

「理屈だな。それで納得をつけられるなら、この世から復讐などというものは無くなるだろう」

「それこそ余計なお世話だ。といつても、少し前までの俺はその最たる状態だったわけだが……まあ、あなたのおかげで頭が冷えたよ。今の俺は、そんな理屈で納得がいく物分かりのいい人間になったらいい。ただそれだけのことさ」

「……そうか」

そう呟き、俺を見つめていた甘寧の瞳にふつと瞼が下ろされた。恐らくこれで話は終わったと思つたのだろう。だが、ところがどっこい。まだ俺の話は終わってない、といつても殆ど蛇足な気がするが、俺にとっては大事なことだ。

「だけど最後に、これだけは言っておく」

「聞こう」

「俺はあなたを許さない。おやじの仇であることも、それに伴う憎しみも、忘れるつもりは毛頭ない。だが、共に孫呉に忠誠を誓う者としてはあなたの事を認める。これが、俺とあなたとを隔てる距離だ」

「ああ、覚えておこう」

今度こそ話は終わりだとばかりに俺から顔を逸らそうとした甘寧に、俺はもう少しだ

け言葉を掛ける。

「ああ。そう言えば、もう一つだけ確認したい事があつたんだつた」

「まだ何かあるのか」

事態は一瞬。しっかりと拳を握り、腰を軽く落として足の踏みこみを確認する。そして先の俺の問いに答えようと、甘寧が踵を返しかけていた体を再度俺の方へと向かわせようとしたその瞬間――

「シッ！」

「なっ——!?!」

俺は全力を込めた足で大地を蹴り、驚愕の表情を浮かべる甘寧へと飛びかかった。

第十二話

前傾姿勢で飛び出した俺の目の前に驚愕を浮かべた甘寧の顔が迫る。細い瞳が大きく見開かれ、その中に映っているのは腕を振りかぶった姿の俺だ。たった数歩分の間合いを詰めるのに必要な時間は一瞬。まばたきをする事すら許す心算のない時の中で、しかし今度は俺が驚愕を顔に浮かべる事となる。

咄嗟の事態に驚き、若干後ろに仰け反っていた姿勢を甘寧は自ら後ろへと倒したのだ。顔を狙う心算でいた俺の拳が空しく宙を過ぎる。しかし俺は伸びたその腕をそのまま手刀の形で下へと振り下ろし無防備な腹に一撃を打ち込む。だがそれも下から振り上げられた何かによつて打ち据えられ弾かれる。

「おっと」

間を置かずして更にもう一撃、今度は俺の顎を狙ったらしい一撃が眼前を通り過ぎる。それは後ろに体を倒すと見せかけた甘寧が体を弓の様に反らせて地面に手を付き、後転を繰り出しつつその勢いに乗せて放った二段構えの蹴り上げ。一撃目は手刀の迎撃に、二撃目は俺への追撃に。特に二撃目は顔を後ろに引いて避けなければ確実に意識を奪われたに違いない。

「ちっ」

後転をしつつ距離を取った甘寧が悔しそうに舌打ちをする。俺から一撃を入れるつもりで、逆に甘寧から一撃もらう羽目になってしまったが、どうやら甘寧は腕に一撃を入れただけではご不満らしい。

「流石に江賊の頭をやっていたのは伊達じゃないか。随分と身軽なことだ」

「貴様こそ不意打ちとはな。どういうつもりだ」

いつでも抜刀できるような腰の得物に手を添えた甘寧が険しい表情を浮かべる。然も
ありなん、俺はそうされるだけの事をやったのだ。しかし俺は敢えて悪びれもせず
に答える。

「共に戦う仲間になるんだ、その実力を確かめたくなるのは当然だろ？ 生憎と前線を率いる将に足手纏いは必要ないんでね」

白々しいが、これが最もそれらしい理由だろう。実際嘘ではない。だがこれはあくまで建前だ。本当の理由は至極私的な理由に過ぎない。

俺が俺自身を納得させたいがための私闘。おやじの仇の実力を、この身で確かめ見極めたい。甘寧が呉の将として誇りを纏うに相応しい、その心は既に知った。なら残るはその力。誇りを掲げ、そして守り抜く力があるかどうかだ。

そうでなければ俺は自分を納得させられない。おやじを殺された事にも、甘寧が志を

同じくする仲間になる事にも。

「浩牙！ お前、一体何をして——」

「蓮華様、ご無礼を承知で申し上げますが、今この時だけは口出し無用願います」

俺がいきなり仕掛けた事に、一瞬遅れて蓮華様が驚愕と追及の声をあげる。だがそれに対する俺の応答は平静な拒絶。俺に向く蓮華様の声に怒りが生じる。

「なつ、馬鹿を言うな！ 浩牙、お前はさつき、思春を認めたのだろう。ならば何故、二人が争う必要がある！」

「理由は先程申し上げた通り、甘寧の実力を確かめるためです。これに関しては雪蓮様も了承してくれています」

「姉様っ！」

蓮華様の怒りの矛先が今度は俺から雪蓮様の方へと向きを変える。しかし雪蓮様はどこ吹く風と言った様子で、無言のまま一つ頷くだけ。祭さんや海苑じいさんも同じように我関せずで務めている様子に、悔しそうな表情を浮かべて蓮華様が唇を噛み締めながら俯く。そんな姿に申し訳なさを感じながら、俺は俯く蓮華様を一瞥し、そして再び視線を目の前の甘寧に戻す。

「とまあ、そう言う訳だ。悪いがあんたの実力、試させてもらおうぞ」

「なるほど……それが貴様の建前か」

「否定はしない」

察しの良い奴だ。どうやら俺の心内など既に見透かしているらしい。それでいてなお、この俺の自己満足のための茶番劇に付き合ってくれと言うのなら、俺はそれに存分に甘えさせてもらおうしよう。

「全力で来てくれ。無手だからといって遠慮はいらない」

目を細め、殺気を込め睨みつけるようにして俺は言う。無手と言えども、俺の手には鉄鎧を扱うために拵えた重厚な手甲が装備されている。俺の腕力で急所を殴打すれば人を殴殺するくらい容易い。それが甘寧の様な細身の人間なら尚更だ。

「いいだろう。私も貴様とは一度、刃を交えてみたかった。蓮華様の口から幾度も英傑と聞かされた貴様とはな」

「それは光栄だ」

甘寧が柄に手を添えていただけの剣を鞘から逆手に抜き出し構えを取り、俺もまた腰を軽く落として拳を構える。誰かとして正面から一騎打ちをするのは、黄巾党が暴れ出してからずいぶん久しい。昔は祭さんや海苑じいさんに相手をしてもらっていたものだが、個人の武よりも軍全体の練度が必要な今、俺も含めて将達は皆兵達の訓練に掛かり切りだった。

だからこうして実力者と武を交える機会が与えられた事に、一人の武人としてどうし

ようもなく気持ちちが昂ぶる。そんな血の滾りと共に、長年胸に抱き続けてきた感情は闘争心となつて、そしてついに俺の中で爆発した。

「凌公積、推して参る！」

名乗りと共に、己の足が力強く踏み込み大地を蹴る。脚甲の蝶番が軋みをあげ、乾いた固い大地が削れて窪む。

「おおおおおおお!!」

彼我の距離を詰めるは最速の一步。

咆哮の轟きと共に放つのは敵を屠る一撃。

ただ真つ直ぐに突き出した俺の拳が確実に甘寧を捉える。避けられないと咄嗟の内判断したか、甘寧が剣を構えつつ自ら後ろに飛び退く。しかし俺の踏み込みの方が断然早い。振り抜いた俺の拳は甘寧の剣を殴りつけ、盛大に火花を散らしながら甘寧を大きく後退させる。それでも衝撃は上手く受け流された様で、甘寧の剣を破壊するまでには至らない。

「ぐっ……出鱈目な踏み込みの速さに、その馬鹿力か。厄介な」

「得物持ちだと流星にここまで速くは動けないけどな。一撃が軽くなつた分を速さで補つてるだけさ」

普段片手で悠々と振り回しているあの鉄鎚も、鉄の塊である以上は相応に重い。勿論

それで明確に動きが鈍くなるほど軟弱な鍛え方はしていないが、それでも鉄鎧を持って
いるのといえないのでは身軽さが段違いになる。流石に明命ほど俊敏には動けないが、
今の俺なら並の隠密達にも負けない自信はある。そんな速さに乗せた普段は鉄鎧を操
る手から繰り出される拳は、速さと重さを兼ね備えた一撃であると自負している。

だというのに、目の前の人物は困難を感じさせながらも受け切った。しかもそれを初
見で行ったという事に、俺は内心驚きを隠せないでいた。

「そら、どんどん行くぞー」

そんな動揺を表に現さないように、俺は再び空いた甘寧との距離を先程と変わらぬ勢
いで詰め、今度は無手ゆえの手数の多さで甘寧を猛烈に攻め立てる。剣と拳の応酬の中
で俺の拳を見切ろうと甘寧の瞳が目まぐるしく動く。だが見切った所で体が追いつか
なければ意味は無い。加えて自分で言うのも何だが、俺は甘寧の言うところの馬鹿力。
拳を剣で受け流そうにも細身の甘寧にはかなりの負担になるはずだ。そして予想通り、
防戦一方の甘寧の表情には一片の余裕も見られない。対して俺は、こうして思考するだ
けの余裕がまだある。

傍から見れば完全に俺の優勢だ。しかしだからと言って決して甘寧が弱い訳ではな
い。むしろ強いと言える。今の状況こそ防戦一方だが、俺としては正規の訓練を受けて
日の浅い甘寧がここまで食らい付いてきている事に正直驚いているほどだ。随分と戦

い慣れしている。どうやら伊達に江賊を率いて戦場を戦い抜いてきた訳ではないらしい。

個人の武は高く、頭領をしていただけに将として指揮を執るにも不足は無し。蓮華様が傍に置くだけあって人としての内面も悪くは無いのだろう。

まさに非の打ちどころの無し。ああ、認めよう。甘寧、あんたは確かに呉の将たるに相応しい武人だ。だからこそ、今この場で俺はあんたを本気で叩きのめす。確かにあんたは強いが、この程度の強さで満足などさせてなるものか。仮にも蓮華様の傍付なんだ。あんたにはもつと上を目指してもらおう。

「どうした、江賊を率いる頭領だったんだらう！ 攻められっぱなしで終わるつもりか！」

攻める手を休めないまま、俺より背の低い甘寧を見下ろす形で俺は甘寧を挑発する。我ながら随分と安っぽい挑発だ。しかし苦戦を強いられ余裕の無い状態にある甘寧の奮起を促すには十分だったらしい。苦しげに細められていた甘寧の瞳に強い光が灯る。思わず背筋をゾクリと震わせられるほどのそれに、俺は反射的に手加減抜き、体重を乗せた重い一撃を甘寧を叩き潰す様にして放つ。避けるには両者の距離は近過ぎるし、受け切るにも甘寧の剣では脆すぎる。

一体どの様にして切り抜けてくるのか。そんな俺の勝手な期待に答えるかの様に、甘

寧は鬼氣迫る表情を浮かべながらその動きを見せた。

「舐め、るなああ！」

常に平静さを取り繕っていた甘寧が、感情むき出しの叫びを上げて強引に俺の右拳を討ち払った。無理を行使した反動か、顔に険しい表情を浮かべて甘寧が姿勢を崩す。そこに続く俺の左拳の追撃。だが意表を突かれたせいで俺も少し目測が狂った。それでも普通なら拳が迫る恐怖で甘寧も反射的に回避行動を取るだろうと思っていた。

しかし甘寧は俺の拳が右頬を掠めるのも気に留めず、半ば体ごと突っ込むようにして俺の懐に潜り込んできた。虚を突かれ大きく隙を晒した俺に、甘寧がここぞとばかり横一閃に剣を振り抜く。早く、そして的確。どうやっても両手での防御が間に合わない。直感した俺は即座に左足を畳んで掲げた。

「なっ!?!」

次の瞬間、甘寧の驚愕と共に硬質な音が辺りに響き渡った。拳の雨を掻い潜つての甘寧の渾身の一閃は、この身と迫る刃との間に掲げて挟まれた足が纏う脚甲によつて空しく弾かれる。欠けた刃の破片が飛び散り、それは偶然にも俺の拳が掠った甘寧と同じ、俺の右頬を浅く切り裂く。

「惜しかったな。俺じゃなければ今ので終わってた」

「しまっ——!?!」

言いながら俺は、咄嗟に飛び退こうとする甘寧より早く、弾かれた反動で身を固くしている甘寧の剣を持つ右腕を素早く掴む。俺の一撃を無理やり受け流し、その上で強引に剣を振り抜いたその腕には、やはりと言うべきか抵抗をするだけの大した力が入っていない。恐らくしびれてしまっているのだろう。何とか脱出を図ろうと甘寧が残る左腕と足で殴打を仕掛けてくるが、俺はそれを難なく受け流す。そして止めの一撃を放とうと右腕を引き絞り、

「終わりだ」

一言そう告げ、俺は甘寧の鳩尾目掛けて拳を放った。



「そこまで……」

迫る凌統の止めの一撃に不覚にも目を瞑っていた甘寧は、主君である孫策の声にゆっくりと目を開けた。そして目に入って来た目前の光景にゴクリと喉を鳴らす。目を瞑る直前に放たれた凌統の拳が己の鳩尾の寸前で止まっていたのだ。加えてその手には九つの節のある棍が見事に絡み付いている。恐らくこれが凌統の拳を止めたのだろう。

もし入っていたなら悶絶程度では済まなかつた事が容易に想像できるだけに、内心で

ホツとする。と同時に、一体誰が止めてくれたのだろうかとうと疑問に思い、九節棍を辿って持ち主に目をやれば、そこには少し困った様にして笑みを浮かべる陸遜の姿があった。

「まあ、ここらが潮時か」

思わぬ人物に甘寧が言葉を失っていると、凌統が一言呟いて甘寧の右腕を解放する。同時に九節棍から解放された右手を痛そうに摩る凌統を見て、痛みはないが甘寧も無意識に凌統に掴まれていた箇所を摩る。するとそれを見た凌統が申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「加減はしたつもりだったんだけどな。どこか痛めたか」

「別に……問題は無い」

心配する凌統に甘寧はぶっきらぼうな態度で返す。実際、甘寧としてはそんなことどうでもよかった。腕は多少赤くなっているだけで痣などは出来ていなかったし、そんな事よりも遥かに大きな問題が発覚したからだ。

無手の上でなお凌統に手加減されていた、その事実である。

無論、英傑と称される凌統を相手に勝利出来ると考えるほど、甘寧は自分の實力に自惚れてはいない。それでも凌統の不意の一撃を見切り、終始押され気味ではあったが、この手にある剣一本で応酬を繰り返り広げられるほどには善戦出来たと自負していた。

だが、そんな自負心は呆気無く砕かれた。彼我の實力差をまざまざと見せつけられた

気分だった。なんて無様なことだろうか。遙かな高みにいる相手を前に己の無力を感じながら、悔しさに甘寧は強く唇を噛み締める。そんな甘寧の前に凌統が平然と歩み寄ってくる。

酷評でも下しに来たのか。暗い考えが脳裏をよぎり、無意識に身が固くなる。しかし凌統の口から出た言葉は、そんな甘寧の予想を大きく裏切るものだった。

「あんた、随分と目が良いみたいだな。流石、あの距離からおやじを射抜いただけはあ。久しぶりの強敵だった」

それは称賛だった。からかいでも、ましてや皮肉でも無い。真つ直ぐ甘寧を射抜くその視線に嘘偽りは感じられない。

ただ純粹に称賛を受けた。

普段動揺する事の少ない甘寧だが、敗北によつて些か気落ちしていた事と己の予想の逆を行く展開に、甘寧は何故か自分の顔がポツと熱くなるのを感じた。

「き、貴様に褒められても皮肉にしか聞こえん」

「そうか。ならそれで構わない。だが俺はあんたの反撃を避けられずにもらった。それは事実だ」

甘寧が咄嗟に口にしてしまった心にもない言葉をさらつと流し、蹴り上げられたところを指さしながら凌統は淡々と述べる。

「やはり油断は大敵だな」と、付け足す様にして言ったその言葉は自身の失敗への言い訳なのだろう。そんな所は例え英傑と称えられる人物であっても、さほど常人と変わりないらしい。甘寧が凌統に意外な身近さを感じていると、スツと甘寧から視線を外した凌統は、場の行く末の静かに見守っていた孫策の下へと歩み寄り、預けていたらしい二本の鉄鎚を孫策から返却してもらっていた。

あれが、凌統の本来の得物なのか――。

鉄鎚を手にした凌統の姿を見て、甘寧は改めて自分が手心を加えられていた事を認める。小振りとは言えあんな鉄の塊を凌統の力で振り下ろされては、とても甘寧の力では受け切れない。仮に受けたとしても、並の得物ではその手にある得物ごと打ち砕かれてしまふだろう。凌統が孫呉の鉄鎚と呼ばれるのも納得である。

あの様な男が己を仇と見て追っていたのだと思うと、甘寧は今更ながらに背筋がゾツと寒くなる。何となしに甘寧は孫策と言葉を交わす凌統へ視線を向ける。と同時に、耳に届いた思い掛けない言葉に甘寧は内心で驚愕した。

「それで、思春と手合わせしてどうだった？ 何気に手こずってたみたいだけどね」
「気付かれましたか。上手く隠したつもりだったんですけどね」

孫策の問い掛けに凌統は頬を掻きながらそう答えた。

凌統が私を相手に手こずっていた？

孫策の言葉に甘寧は疑問を浮かべる。どう考えても終始、凌統の表情には余裕があった。しかし主君である孫策はそんな凌統が苦戦していたという。一体どういう事なのか。一番理由を説明してくれそうな人物である黄蓋に視線を送れば、甘寧の疑問を察したのか視線を受けた黄蓋がくつくつと笑い声を上げた。

「まあ、思春からしてみれば手加減された上に手こずっていたというのは可笑しい事じゃろうな」

「はい。私の目から見た凌統は終始余裕を保っている様に見えましたが、祭殿は違おうと？」

「おう。浩牙の奴、最初の一撃で勝負を決めるつもりだったみたいじゃが、お主に上手く受け流されて驚いておったぞ。気取られぬよう、必死に隠しておったがな」

黄蓋は言つて愉快そうに口元に笑みを浮かべる。最初の一撃、それは凌統が雄叫びと共に凄まじい勢いで踏み込み放ってきた拳の一撃の事だろう。あの時、甘寧は咄嗟の判断で後ろに下がったが、打ち合った今だからこそ分かる。もし反撃を狙つて剣で受け切ろうとしていたなら豪撃の前に剣を叩き折られ、甘寧は為す術も無く吹き飛ばされていたに違いない。

「しかし、たかが初撃を避けられただけで手こずると評するのは……」

「何を言つとる。その後、何合も打ち合つたじゃろう」

「それこそ、凌統が手加減をしていたからで——」

「確かにそれもある。だが良いか、思春よ。浩牙はな、英傑なのじやよ。己の得物を取り上げられ、策殿から釘を刺されていようとも、その強さは策殿に勝るとも劣らぬ孫呉の英傑。その浩牙を相手に、例え手心を加えられようともあれだけ食い下がれる者はそうはおらぬ。手心を加えてなお、並の相手では手こずりもしない。それが凌公積という男じゃ。だから思春よ、今回の敗北で己を卑下する必要はない。むしろ苦戦しながらも食らいつけたことに自信を持って」

真剣な眼差しを伴った黄蓋の強い言葉には慰めや同情と言った感情は一切含まれていなかった。ただ事実を述べただけなのだと、そんな響きであった。

「……祭殿」

「なんじゃ?」

甘寧は問いかける様に黄蓋の名を呼ぶ。そして次の瞬間、無意識に口をついて出た言葉に、甘寧自身が一番驚いた。

「もし私が、凌統を越えたいと言ったなら……祭殿はどう思われますか」

「ほう」

甘寧の言葉を聞いた黄蓋が口元に笑みを浮かべて目を細くする。内まで見透かす様なその視線に、甘寧の額をツツと一筋の汗が伝う。

「なかなか言うではないか。なるほど、浩牙を越えたいか。なぜじゃ？」
「それは……」

黄蓋の問いに甘寧は言い淀む。凌統を越える事は即ち、ここにいる將の誰よりも強くなるという事。そうなれば主である孫権を守るといふ己が使命にとつて大きな力となるのは間違いない。何よりも確実な甘寧が強くなりたいと願う理由の一つだ。

しかしここに来てもう一つ、甘寧が強くなりたい理由が増えた。それは何よりも単純なもの。一人の武人であるがゆえに、そして敗北を喫したがゆえに芽生えた、至極簡単な理由であった。

「私が奴を、叩きのめしたいからです」

奇しくもそれは、凌統が甘寧に抱いたと感情と同じものであったのを甘寧は知る由も無い。凌統から受けた敗北の味は凌統の目論み通り、見事甘寧の胸に熱い何かを灯したのである。それは不甲斐ない自分に対する悔しさか、高みを垣間見たがゆえの向上心か。もしくは自分を負かした男に対する敵愾心かもしれない。

そんな感情によつて生まれた本音を露骨に叩きつける甘寧の言葉に、黄蓋は一瞬言葉を失つた。耳に飛び込んできた甘寧の言葉がじわじわと黄蓋の頭にしみ込んでいき、そしてようやくその意味を完全に理解したところで、黄蓋は堪え切れずに腹を抱えて笑いだした。

「な、何を笑われますか」

「いやはや、余りに正直な理由だったのでな。そうか、あ奴を叩きのめしたいからか、くつくつく」

「……………」

からかうような黄蓋の言葉に甘寧が無言で不機嫌そうな表情を浮かべると、黄蓋は悪かったとばかりに苦笑を浮かべる。

「すまんすまん。なあに、そう怒った顔をするでない。良いではないか、つらつらと七面倒な理由を連ねるよりかはよっぽど潔い。そうじゃな、もしお主が本当に浩牙へ迫りたいと思うのなら、差し当っては海苑に手解きを受けると良いかもしれぬな」

「海苑殿にですか？」

「うむ。別に儂が鍛えてやってもよいのだが、見ての通り儂の本分は弓。同じ剣を習うのならば儂よりも韓当の方が適任じゃ。まあ海苑は浩牙の師匠でもあるが、今の理由でお主が教えを請えば喜んで手解きしてくれるじやろう。あ奴も愛弟子があまりに無事に巣立って、少々寂しげじゃったからな」

韓当にちらりと目を向けながら言う黄蓋を見て、甘寧は何となく韓当の気持ちがかかる気がした。よく手の掛かる弟子ほど可愛いと言うが、たった一度相對しただけでも分かる程に凌統は武人として完成されていた。恐らく今となっては、かつての師匠である

韓当であつても凌統には勝てないのだから。

そんな事を思いながら凌統に目を向ければ、当の本人は何事か陸孫に叱責を受け、地面に正座をさせられ小さくなっている。剣を交えた時とは凄まじい食い違いっぷりに、本当に視線の先にいる男に自分は負けたのだからかと、甘寧は小さくため息を吐いた。「やれやれ、何時まで経つても騒がしいのう。どれ、少しばかり火に油を注ぎに行くか」「えつ……？」

この時、不覚にも間抜けな声を出してしまった甘寧を誰が責める事が出来るだろうか。呆然と立ち尽くす甘寧を置いて、黄蓋までもが凌統を弄る輪に加わりとうと鼻歌交じりに歩きだす。しかしその途中、黄蓋は一度立ち止まると甘寧の方へと振り返ると、その場で固まっていた甘寧に向けて優しい笑みを浮かべた。

「思春よ。高みを目指す精神も確かに大事じゃが、常に心の余裕だけは失うでないぞ。策殿や権殿がお主を見出したように、儂もお主には期待しておる。決して折れてくれるなよ」

それだけ告げ、今度こそ黄蓋は凌統達の下へと向かう。立場も何も関係なく、まるで家族の様に和気あいあいとした光景がそこにはあつた。

呉の将兵は皆が家族である。

ああ、なるほど。家族の輪に囲まれながら強くなつた果てにならば、凌統の様な人物

がいても不思議では無いのかもしれない。そして自分も今はその輪の内の一人ではある。しかし幾度も冷遇を受けた事のある甘寧には些か以上にその場所は温かく、そして眩し過ぎた。

「思春ー！ あなたもこっちに来て手伝って頂戴ー！」

「……」

こんな時でも、あなたは私に手を差し伸べて下さるのか。自分を呼ぶ孫権の声に我知らず甘寧の口元に小さく笑みが浮かぶ。ああ、そこに行けというのが主の命ならば、例え眩しくても目を見開いて自分はそこに進まなければなるまい。

遙かな高みへ続く一步を甘寧は踏み出す。

強くあろう。自分を掬いあげてくれた我が主のために。

強くなろう。孫呉の英傑をも超えて、自分こそが主を守る最強の矛となるために。

変わらぬ決意と新たな決意を胸に秘め、甘寧は孫権達の下へと歩きだした。

因縁を胸に抱きながら夢を追い求める青年と、

現実を知り遙かな高みを目指し始めた忠義の少女。

二人の若き将達の道が交わり、物語は動き出す――。

第十三話

俺が抱き続けてきた甘寧との因縁は、互いの武のぶつけ合いを経て一応の決着がついた。と言つても完全にはなく、とりあえずお互いが接する距離の線引きが済んだに過ぎない。完全な和解とは程遠い結果だが、もとより完全な和解など望んでもいなかったのでこれで良しとしよう。要は将としての仕事に影響がなければ良いのだから。

ちなみにだが、甘寧と一戦交えたその後、俺は止めの一撃を九節棍で止めようとして手を痛めた穩からねちねちとお説教を食らう羽目になった。正直、寸止めするつもりだったので実は止めてくれなくてもよかったのだが、傍から見ただけにはかなり本氣の一撃に見えたらしい。

まあ確かに、寸止め前提とは言え本氣で当てに行くつもりで放ったからなあ。穩には前日、もしもの時はと頼んでいた分、咄嗟に反応してしまったのだろう。ぶんぶんと可愛らしく怒る穩の前で、脚甲を纏ったままの正座はなかなか辛いものがあつた。無論、辛い部分の九割を足に食い込んでいた脚甲が占める。

その後も雪蓮様や祭さんが面白がつて弄り倒してきたので、ぶっちゃけ戦いの疲労よりも精神的な疲労の方が大きかつた。しかも後から来た甘寧に小さく笑われるおまけ

付き。まったく、蓮華様が止めに入ってくれなかった一体どうなっていた事やら。

そんなこんなで騒がしい内に合流を終え、その日は兵達の体力を考慮して小休止を取ることが決定した。そして一日の休息を経た翌日の早朝に、俺達は黄巾党本隊が本拠とされている出城へ向け行軍を再開する。

蓮華様たちが率いてきた戦力を合わせ、増強された今の兵数はおおよそ八千。本城と各地の拠点に最低限残してきた戦力を除き、今この場には呉の全戦力が集結している。しかしそれでも万足り得ないのが今の呉の現状だ。

兵の質は高いが、それでも戦いの基本は数。相手を上回る戦力で相対することこそ兵法の基本だ。その点で言えば風の噂に十万の規模を誇るといふ黄巾党と事を構えるなど無謀の一言に尽きるだろう。

もつともそれは、俺達のみで戦を仕掛けた場合だ。大陸に名を馳せる千載一遇のこの機会を、大なり小なり野心ある者ならば見逃すはずがない。俺ですら簡単に考え付く位だ。確実に俺達以外の利に目敏い諸侯が兵を向かわせているはず。

瑾の妹が従軍しているらしい劉備という人物の軍勢も、きつとこの戦に参戦している事だろう。朝廷の命という建前の下、それらの諸侯が一堂に会せばどれだけの規模の軍勢となるのか俺には想像もできない。黄巾党を遥かに超えるか、それとも予想以上に少ないか。

だが例えどうであつたとしても、今この時に黄巾党の命脈が尽きようとしている事だけは確かだと、戦人としての勘が俺にそう告げている。

そしてそれは、黄巾党の本拠が間近に迫つたのと同時に確信へと変わる。

城を発つてから三日。目的地に到着した俺達の目に映るのは、黄巾党の本拠たる城の前に無数の牙門旗が存在を示さんと風に揺れ、その旗の下に集つた猛者達が既に各々陣を張り果敢に城を攻め落とさんと攻撃を仕掛けている光景。

集つた諸侯が我先にと功名を求め知略と武を尽くし、そしてそれを堅城を盾に黄巾党が迎え撃つ。

戦人達の雄叫びを歌い、肉と鉄のぶつかり合う音が旋律を添える。

さながら死と野心が渦巻く戦場がそこにはあつた……。



「曹、公孫、袁ときて最後に劉。よくもまあ、これだけの数が集まつたもんだ」

凄まじい数の兵が居並ぶ壮大な光景を前に、陣の端に立っていた俺はそう独り言ちた。

諸侯の陣の場所を考慮した結果、孫策軍は城より南側の位置へと布陣する事となつ

た。というよりも北に曹操、西に袁紹、東に劉備と公孫賛が既に布陣していたため、他軍との衝突を割けるために離れて布陣できる場所が南しか残っていなかった。

到着して既に半日が過ぎてているが、規模の小さい孫策軍の布陣はそう時間の掛かるものでもなく、おおよそ八割が陣の設営を終えている。その中でもとより数の少ない凌統隊は遠征経験も多く陣の設営に手慣れた者が多いため、早々に布陣を終えて現在は兵達に武装をさせたまま待機をしている。

ゆえに俺自身暇という訳ではないが、本陣の設置が終わるまでは時間が空いたため、いづれ矛を交える事になるかもしれない相手の分析に務めている次第である。

「被害をおして兵を城に寄せてるのが袁紹軍。曹操軍はその挺入れ程度。劉備軍と公孫賛軍は現在様子見か」

目を向けた先、城門の前では金で裝飾された鎧を纏う一団が破城槌を携え果敢に城門へと取りついている。その背後からこちらは一転華美な裝飾など欠片もない、漆黒の鎧を纏う一団が弓で城壁上の黄巾党達に牽制射撃を仕掛けている。

しかしかなり頑丈に作られているのか一向に城門は破れる気配を見せず、袁紹軍の被害が一方的に増している様子だ。曹操軍の牽制射撃も数だけは無駄に多い黄巾党に対してはあまり効果も上がらないらしい。

残る劉備軍と公孫賛軍は、そんな袁紹軍を盾にして隙を窺っているといたるところだ

ろうか。それとただ袁紹軍が邪魔で攻勢に参加できないだけなのか。まあ、素人目で見ると限りではどちらも当てはまりそうだ。

「袁紹が軍を引き揚げない限り、正面に部隊を展開させるのは無理そうだ」

戦う前から苦戦を強いられそうな予感に自然とため息が漏れる。すると俺の独り言に続ける様にして、背後から呆れを滲ませた声が聞こえてきた。

「おまけに左右は狭く、しかして城門は正面の一つのみ。攻め難く守り易し……こここの前任者は何をどうすれば城を奪われることになったのか。そうは思わないか公積」

ここにはいない誰かに向けただろう嫌味をたつぷりと含ませた言葉に苦笑しながら、俺は声の主たる我が親友の方へと顔を向けた。

「いつにも増して機嫌が悪そうだな瑾」

「当然だ。目と鼻の先に我が最愛の妹がいるというのに顔すら合わせられないこのもどかしさ……ああ、我が愛しの妹よおおお!!」

「瑾のためにとりあえず言っておく。陣の中で大声で叫ぶのは如何なものかと……」

「ハッ?! 確かに……」

言われて気付いた様に慌てて口を抑え、カッと目を見開いた瑾が猛然と周囲を見回す。しかし端とは言え、生憎とここは兵達が待機する陣の中。当然周囲にはたくさん兵達が存在しており、声を潜めでもしなければ周囲に聞かれずにいる事は難しい。

ましてや、アレだけ大声で叫ぼうものなら結果は言わずもがなである。

俺の左隣りに並び、いつの間にか懐から取り出した鉄扇を広げパタパタと顔を仰ぎながら俺と同じように未だ攻防続く戦場へと顔を向ける瑾の姿は、傍から見れば悠々とした態度で戦場を見つめる美男軍師に見える事だろう。しかし悲しいかな、俺を含め周囲の兵達が瑾に向ける視線は物凄く生温かいものだった。

「妹萌えだど?」

「諸葛瑾様は妹萌え」

「あの冷静沈着、眉目秀麗の諸葛瑾様が妹萌え!」

「ありだな」

無言で立ち尽くす俺達の背後からそんな囁き声が聞こえてくる。どうやら瑾の部隊内での立場を心配するは必要はないらしい。というかむしろこの部隊の行く末の方が遥かに心配な気がする。野郎共の荒い鼻息と女性兵達の黄色い声を背中越しに聞きながら、俺と瑾は揃って深いため息を吐いた。

まあ、誰でもない俺の部隊なんですけどね。



太陽が暮れに差し掛かった頃に孫策軍の布陣は完了した。荒野一面だったこの場所には本陣の大天幕を始めとする多くの天幕が並び立ち、兵糧で腹を満たした兵達が出陣の時を今か今かと待ち構えている。

そんな中、冥琳様によって呼び出された俺達将一同はこれからの戦の方針について軍議するために大天幕に集まっていた。雪蓮様を上座に軍師と武官が左右に分かれ、大きな卓を挟んで向かい合う光景は、場馴れしていない者にとってはかなり威圧感を感じるに違いない。

「では軍議を始める。まずはじめに、皆に見てもらいたいものがある。穩、あれを」
「はあい、冥琳様」

冥琳様に指示された穩がいそいそと何かを取りだす。手に持ったそれは丸められた一枚の布だ。かなり大きなそれを冥琳様は卓の端に位置していた明命と瑾、そして向かいの海苑じいさんに手伝ってもらい卓上に広げる。そこには炭で描かれた一つの図面が記されていた。

「これは、黄巾党の籠るあの城の見取り図だ」

冥琳様の言葉にその場にいた全員が広げられた図面へと視線を向ける。どうやらこの図面は今回の攻略対象であるあの堅城の見取り図らしい。城内奥の本陣や大型の兵舎、兵糧備蓄用の蔵なども完備されているあたり、図面で見ると限りではかなり本格的に

籠城が出来るだけの設備が揃っている。所々に小さく補足が書き込まれており、城門付近には一言で簡単に「破壊は困難」と書き込まれている。

これから攻城戦を仕掛ける俺達にとつては、まさにうつつつけの情報と言えるだろう。しかし城内の見取り図など極秘とも言える重要な情報だ。それを手に入れるなど普通は困難極まるはずなのだが……いや、それを口にするのは野暮と言うものだろう。俺は一瞬ちらと明命に視線を向け、そしてすぐにまた視線を元に戻す。

「さて、見て分かるとは思いますが随分と厄介な城だ。諸侯の軍を相手に今日まで黄巾党が抵抗できたのは、この城があつたからこそと言つても過言ではないだろう」

「その点で言えば、奴らにもそれなりに天運があつたんでしようね」

雪蓮様が茶化す様に皮肉を言う。それに苦笑を浮かべた冥琳様はそうだなと一言呟くと、改めて視線を見取り図に戻して話を続ける。

「だがそれも直に尽きるだろう。城自体は強固でも、その中に籠るのはあくまで人だ。そして人は霞を食んで生きられるものではない。この戦、勝つだけならばこのまま包囲網を敷くだけで痛手を受ける事もなく終える事が出来るだろう」

「被害を出すことなく、籠城する相手にとつて最も有効な手段……糧食攻めですか」

顎に手を当てぼそりと呟いた瑾の言葉に冥琳様はそうだと頷く。それに雪蓮様が分かりやすく不満の表情を露わにするが、雪蓮様が何か言葉を発する前に冥琳様が「だが

……」と呟き話を続ける。

「それでは功にうま味が無くなる。我らが欲しいのは名声と言う名の利だ。しかし飢えをもつて討伐したなどと喧伝した所で、世の民草から好感など得られはしないだろう」「あくまで実力を行使した上で黄巾党を討ち果たす必要があるということですか。しかしそれを困難にしているのがあの城の存在……」

「被害は出したくない、でもだからと言って他軍と連携を取つてしまえば名声の利が薄くなる。けれど相手が籠っているのは難攻の城。うくん、どうしたものでしょう」

「もうめんどくさいからいつその事、正面から突撃しちやおうよ」

「うむ、儂も策殿に賛成だ」

「何を馬鹿な事を言っているのです、二人とも」

頭を悩ませる軍師三人を他所に、あまりにも無謀な発言をする雪蓮様と祭さんに蓮華様がため息を吐く。俺はと言えば横に並ぶ海苑じいさんと共に、城の見取り図と未だに睨めつこを続けている。手持無沙汰にしていた明命も、釣られるようにして俺の横からひよいと顔を覗かせた。

「浩牙さん、何か気になる事があるんですか？」

「いや、その気になる所を捜してる最中だ。どうだ明命、お前はどこか気になる所はあるか？」

「えっ、私ですか?! えっと、うーん……」

慌てた様子で、明命がむむむと額にシワを寄せて図面を睨みつける。俺としては軽く聞いただけで別にそこまで悩まなくても良かったんだが、何か彼女を駆り立てるものでもあるのだろうか。

「どうだ?」

「むむむ……あつ」

「何か見つかったのかの?」

同じように図面を見ていたじいさんが、声を上げた明命の視線を追う。俺も目を向けたそこは丁度蔵が記されている場所だった。

「蔵がどうかしたのか」

「えっと、たぶんここが本丸から見て死角になってると思います。横に兵舎が並んでますから」

「なに?」

思案中だった冥琳様が明命の言葉を鋭く聞きつけ視線を図面に落とす。残る全員もそれに続き、この場の全員の視線が図面の一点に集中する。そこは本丸から見て南の位置。兵舎、蔵と建物が続いているせいで、南の城壁の一部が本丸からは完全に死角となっていた。

「ここからなら、夜陰に紛れて城内に侵入する事は可能だと思います。そこで火を放てば最低でも兵糧を焼き払えますし、良くて城内を混乱に陥れられると思います」

「なるほど、確かに死角になっているな。だがその分、警備も集中しているとみるべきか」

「食料は重要な生命線ですからねえ。ここの警備を怠るとはまず思えませんね」

「あつ……やつぱり無理、でしょうか」

冥琳様達の言葉に自分が失敗を犯したと思ったのか、申し訳なさそうな顔をしてしゅんと明命が小さくなる。そんな明命の頭をじいさんが豪快に笑いながらわしゃわしゃと乱暴に撫でた。

「わわっ！ か、海苑様!？」

「かっかっかっ、でかしたぞい明命！ ほれ冥琳、あまり明命を不安にさせるでないわ。勿体ぶるのはお前さんの悪い癖じゃぞ」

溢れる笑みを抑えられないとばかりにニヤリと笑みを浮かべたじいさんに、冥琳様が苦笑を浮かべてやれやれと首を横に振った。

「分かりました。済まなかつたな明命。よくぞ気付いてくれた」

「え、あつ、はい！」

褒められた事に一瞬遅れて気付いき明命が元気よく答える。そしてそこから軍議は先

程までの滞りが嘘のように進んでいく。どうやら明命のひらめきが呼び水になったらしい。

「祭殿、海苑殿。夜になって諸侯の軍が引き揚げた後、部隊を城門前に集結させてください。それも黄巾党の奴らに気付かれる様出来るだけ派手に」

「それは良いが……派手に夜襲を掛けるのか？」

「いいえ祭殿、掛ける振りで結構。敵の目を城門に引き付けるのが目的です」

「なるほど、囷になる訳か」

言つて祭さんが頷き、もとより気付いていたじいさんは任せておけと目が語っている。

「敵に陽動を掛けた後、明命は先に言つた死角から城内に侵入。それと同時に興覇、お前にも別の場所から城内に侵入してもらう」

そう言つて冥琳様が示した場所は明命の進入路から幾分離れた城壁の一箇所。しかしそこは若干建物の影に隠れてはいるが死角と言える場所ではない、言わば死角よりも遥かに発見されやすい場所だった。

「恐らく正面への陽動だけで事足りると思うが、備えは多いに越したことは無い。興覇には明命がより動きやすいよう、城内での陽動を担つてもらおう」

確かに策をより万全に動かすためには有効な手段と言える。しかしそれはあまりに

も危険な役目だ。そんな冥琳様の指示に、当然蓮華様が黙っているはずがなかった。

「冥琳！ あなたは思春に死んでこいとも言う心算なの!?」

「蓮華様、この戦は我ら孫呉の復興に欠かせぬ一戦。であれば、多少の危険があろうともやっつて貰わねばなりません」

「それは、しかし！」

「それに興覇は孫呉に加わって日が浅い。顔を合わせたのもつい先日。なればこそ大事なこの一戦で、この先も我らが信頼するに足る実力と、そして確実に使命を果たすその姿勢を証明してもらわなければならないのです」

「……」

正論を述べる冥琳様に蓮華様が返す言葉を失う。そんな蓮華様に代わり冥琳様に言葉を返したのは、やはりと言うか話の本題となっていた甘寧本人だった。

「なるほど。公瑾殿の言いたい事は理解しました。しかし私が情報を流し、裏切るとは考えないのですか？」

「ふっ、心にもない事を言うものではないぞ興覇」

煽りを入れたつもりがそれを冥琳様に余裕の表情で受け流され、逆に甘寧がぐつと口をつぐむ。

「だがそうだな、そうならないためにもお前には一人監視を付けるとしよう」

ニヤリと笑みを浮かべた冥琳様の視線がとある人物へゆつくと向けられる。それが誰かは考えるまでもない、というか今この場で役割の余っている人物は一人しかいない。

はい、どう考えても俺です。本当にありがとうございます。

「浩牙、お前に任せる」

「まあ、そんな気はしていました。冥琳様、一応聞いておきます。本当に俺で良いんですね?」

「ああ。むしろお前以外に適任はいないだろう」

迷いなく冥琳様がきつぱりと言い切る。確かに色々な意味でこの役目は俺が適任と言えるだろう。今回の監視役に必要なものは監視対象を上回る実力と、もしもの時に情に流されず判断できる決断力だ。

実力に関しては先の手合わせで俺が甘寧よりも上手である事が証明されているし、最悪の決断……すなわち甘寧が本当に裏切った時に、殺すか否かを迫られた時も、自分で言うのも何だが即決断、即実行に移せるだろう。俺は蓮華様みたいに甘寧に情を移していかないからだ。そしてこれからも移す心算は無い。

ゆえに俺は監視役を引き受ける事自体は構わない。例え監視対象が親の仇だとしても、戦に私情を持ちこむほど愚かではないつもりだ。その点で言えば甘寧も俺と同じだ

ろう。当然ながら危ぶまれるだろう連携についても、今回は俺が甘寧に合わせれば済む。もつとも甘寧の実力を考慮すれば、俺が助太刀する必要のある場面など早々訪れはしないだろう。

「そう言う訳で、興覇の補助として浩牙を一緒に行かせます。手練の隠密も数人付けましょう。蓮華様にはどうかこれで納得して頂きたい」

「……」

冥琳様の言葉を聞き終えた蓮華様は俯き、しばらく無言になった。長い髪に隠れて表情は見えない。きつと胸の中では様々な感情が渦巻いているのだろう。しかしそれを言葉に出すのは憚られるのかもしれない。俺は何か助け船をと思い周りを見渡すも、雪蓮様を筆頭に他の皆は終始見守る姿勢を崩さない様子だ。

唯一、明命だけが多少不安そうな表情を浮かべていたが、やはり口を挟む心算は無いらしい。そうして俺が思案に暮れている内に、気を持ちなおしたのか蓮華様が俯いていた顔を上げる。そして溜めこんでいたものを吐き出す様にゆつくりと大きく息を吐き、その視線を冥琳様へと向けた。

「分かった。確かに冥琳の言う通りだ。それにこれは、捉え様によつては思春の実力を姉様に証明する絶好の機会なのだな」

「はい。誰よりも危険な役目だからこそ、成し遂げたならば兵達は忠誠を誓い、また民草

の人氣も上がりましょう」

「思春ならば必ずやり遂げる。私は思春の力を信じているからな」

そう言つて、ふつと小さく笑みを浮かべた蓮華様が穏やかな視線を甘寧へと向ける。笑みを向けられた甘寧は相変わらず無表情を貫こうとしているが、頬には微かに朱が差していた。意外だな、もしかして照れているのだろうか。

「それに浩牙も一緒に行くのなら百人力だ。何せ孫呉一の英傑なのだからな」

「だそうだと、浩牙。蓮華様と私の期待を裏切つてくれるなよ」

ああ、なるほど。甘寧の気持ちが良い分かつた。確かにこれはこそばゆい、というか照れる。甘寧に続いていきなり頂いた過大な評価に咄嗟に礼する事も出来ず、俺はおもむろに視線を外しながらポリポリと頭を搔く。すると向いた先で瑾の半眼と視線がかけ合った。

「あー……瑾さん？」

「ふむ、浩牙がデレたか」

「ちよつと待て。何か発音おかしかつたぞ」

「すまん、噛んだ」

「違う、態とだ」

「しゅまん」

「態とじゃない!？」

「……やっぱり、多少不安に思う所もあると訂正しておくわ」

瑾との漫才染みた会話に、一転して素の口調に戻った蓮華様がやや呆れた表情を浮かべる。俺には似合わない贅辞を受けた所為で、思わず照れ隠しに瑾の天然を利用しておふざけを繰り広げてしまったが、こと重要な軍議の場では流石に不謹慎過ぎたかもしれない。

ああ、俺はまたやらかしてしまったのか。気まずさを感じると共に嫌な汗が全身から噴き出そうになる。しかしそれは、次に放たれた雪蓮様の何とも楽しそうな台詞によって跡形も無く吹き飛んだ。

「ほんと、浩牙と蒼志がいると堅っ苦しい軍議でも何だか楽しくなちやうわね。今回はどんなふうにも空気を壊してくれるのになって。いいぞ、もつとやれー!」

噴き出そうだった汗が、気付く暇も無くすつ込んだ。というか、それで良いのか雪蓮様と、つい心の中で思ってしまったのは俺だけではないと信じてる。とりあえずは、そこで口をポカンと開けて呆けてる瑾よ。お前が俺の同志である事は分かったから、まずは半開きになってるその口を閉じてはどうだろうか。

「雪蓮の影響を受け過ぎたらしい浩牙はともかく、どうして日の浅い蒼志までこうなったのか……」

「それは簡単じゃよ冥琳。浩牙を通して雪蓮ちゃんのが移ったんじやろうて」

「ちよつと海苑、それ酷くない？ 何とか言つてやつてよ冥琳！」

「まあ、雪蓮の影響力云々に関してはこの際どうでも良い。とにかく、これで作戦の大まかな方向は決まった。あとは——」

「ぶう、冥琳まで酷い」

ぶーたれる雪蓮様の抗議をばつさりと斬り捨て、冥琳様が主導する軍議は進んでゆく。何か見落としがないか細部を徹底的に見直し、何度も議論を重ねた結果、ようやく最終的な指揮系統が構築された。

結果、囚役である先行部隊は祭さんと海苑じいさん。本体指揮を雪蓮様が執り、その補佐に冥琳様と穩。蓮華様は輜重隊護衛のため後方部隊に位置する事となり、瑾がいるとは言え一時的に指揮官不在となる凌統隊もそこに加わる事となった。

そうして案を煮詰めながら、俺達は夜が訪れるのを待つのだった。

第十四話

草木も眠るなんとやらとは、こんな時間を示すのだろう。辺りはとつぷりと夜の闇につきり、虫の音すら少なくなつた頃合い。俺は四人の隠密と、そして今回の監視対象である甘寧と共に敵城の城壁前へと足を運んでいた。

理由は勿論、陽動作戦を行うために今から城内へと侵入するからである。

「……行くぞ」

短く一言そう告げた甘寧が端に鉤爪のついた縄を城壁の上へと放り投げ、俺と隠密達も順次それに続く。ガギツと鉄の爪が石造りの城壁に食い込む音が思いのほか大きく響くも見つかった様子は見受けられない。二度三度力を込めて外れないかを確認した後、俺達は縄伝いに城壁を登って無事城内へ侵入を果たす。

城壁上の黄巾達は殆どが城門での戦闘に気を取られているのか、見回した限り人影は見当たらない。周囲を警戒をしながら鉤爪を回収していると、こちらをじつと見つめる甘寧の視線に気がつく。

「どうした？」

「……」

一案の定、甘寧からの返答は無い。だが甘寧は未だにこちらを見つめている。もしかして今の俺の服装が気になるのだろうか。

いつもの軽鎧に陣羽織ではなく、今の俺は闇夜に紛れやすいよう全身黒装束の装いをしている。顔も目もと以外は覆面と額当てに隠れて殆ど見えていない。夜ならともかく日中でこの姿を晒せば即座に通報されること間違いなしの服装だ。

とは言え、これはウチの隠密隊の正装だ。むしろ今この時、何時も通りの格好をしている甘寧の方がこの中では逆に浮いている。どうやら元々動きやすい格好ゆえに着替える必要が無かつたらしい。実際、城壁を登る際も軽い身のこなしで難なく登り切っていた。

まあ察するに『派手な陣羽織を羽織つて戦鎚を振り回してるはずの男が、よもやこんな地味な姿で同伴する事になるとは——』などとも思っているんだろう。それとも単に似合わないとも思われているのか……どちらにしる余計なお世話だと言いたい。

「行くぞ」

「……おう」

回収し纏めた鉤爪縄を腰に吊るし、俺は甘寧の素っ気ない指示に従い後に続く。城壁を下り、警戒を厳に注意深く気配を探りながら路地から路地へと目的地に向けて移動を続けていると、通りを巡回中の黄巾兵二人を発見する。黄巾兵達は俺達が潜む路地の方

へとゆっくり近づいてくるが、まだ俺達の存在には気づいていない様だ。

息を潜めて気配を殺し、じっと黄巾兵が通り過ぎるのを待つ。足音が近づき、そしてそれが路地の前を通り過ぎた瞬間、俺は素早く路地から飛び出し二人組の内の一人の首へと背後から手を回す。

「ふんっ」

「ぎっく……」

驚愕の声を上げさせる間もなく、その首を真横に思い切り捻り、へし折る。手の中の黄巾兵の体から力が抜けるのと同時に隣りからも男の苦悶の聲が上がる。見ればもう一人の黄巾兵が首から鮮血を吹き出して地面に倒れ伏していた。その傍には返り血一つ浴びずに佇む甘寧の姿がある。喉笛を一閃とは……まったくもって、見事な手際の良さだ。

「他愛も無い」

そう独り言ち、剣を鞘にしまふ甘寧の姿は随分と様になっている。しかし俺としてはその後ろでせつせと死体を物影に引つ張り込んでいる隠密達を手伝ってやれと言いたい。ちなみに俺は既に自分の手で死体を路地の方へと放り込んであるので問題無し。

見張りを手早く始末し終え移動を再開する。一応、黄巾党も最低限の警備網の構築はしているようで、一区画ごとに数人の見回りが巡回をしていた。とは言え、その殆どが

談笑をしていたり、酷い奴らは座り込んで居眠りをしていたりで、役に立っていない奴らが多い。真面目に警戒をしていたのは最初に始末した二人を含めてほんの数組だけ。おかげで余計な手間が省けて済んだが……やはり所詮は烏合の衆という事か。

ざるな警備網に内心呆れかえりながら、それでも油断はせず見張りの目に止まらぬよう物影から物影へと素早く移動する事を繰り返して、ようやく予定の地点へと到着する。現在地は目標地点の蔵から南側に通りを二本ほど挟んだ路地だ。僅かに顔を覗かせ周囲を探る。

ここからすぐ目の前の一本目の通りに見張りが二人、その先の二本目にはここからでは見張りは見当たらず。流石に蔵は見えないが見通しは良く、その横に位置している兵舎が遠目に見て取れる。まさにあの見取り図の通りだ。

「よし、予定通り二人一組になって分かれる。お前たちはここから迂回してそれぞれ別方面に回れ。合図は銅鑼の音が三回だ」

甘寧の言葉に隠密達は音も無く俺達の背後から消え去り、俺と甘寧の二人のみが路地に残される。彼らは彼らでまた別の場所から黄巾党に対して陽動を仕掛けてもらうのだ。ただでさえ少ない戦力を分散してしまう訳だが、もとより総数六人の戦力とも言えないような数だ。さほど問題にはならない。それに俺達の目的は陽動であつて戦闘をすることじゃあない。どんな方法であれ、要は敵の目を引き付けられればそれでいいの

だ。

「凌統、私から貴様に出す指示はない。好きに動くといい」

「随分と適当だな」

「ならば、私が貴様に盾になれと言えぱそう動くのか？」

「ああ」

皮肉交じりの甘寧の言葉に俺はあつさりと答える。あまりに予想外の反応だったのか甘寧は呆気にとられた表情浮かべる。そしてそれを見計らったかのように、遠く城門付近から一回目の銅鑼の音と兵士達の雄叫びの聲が聞こえてきた。

「作戦開始か。合図まで残り二回」

眩きながら、いつでも動けるようにと身構える。城門での戦闘に対応するためか兵舎からは武装した黄巾兵が姿を見せ、各々弓と松明を手に次々と城門に向かって行く。雪蓮様達は随分派手に攻め入っているのか、黄巾兵達が集結するのも合わせて城門方面の空が松明の火でぼんやりと赤く染まっている。確かに囷として敵の目を引き付けるには十分だが、あれだけ明るくしては城壁上からの弓の狙撃が厄介だろうに……。

まあ、その辺りは祭さんの部隊が対応する心算なのだろう。今、二回目の銅鑼の音が鳴った。間もなく俺達に先行して明命達が動き出すだろう。目と鼻の先まで明命達が来る事になる訳だが、残念ながら顔を合わす事はない。

兵舎からの人の流れが先程よりも弱くなる。兵舎で待機していた兵の殆どが城門への加勢へと向かった様だ。本丸が近いためか流石に全員出払う心算は無い様だが、これで火計に対する即応は十分難しくなった。仕掛けるのならば今——。

そんな俺の心を読んだかの様に、三回目の銅鑼の音がより一層強く響き渡る。隣りから漏れる殺気に目をやれば、目を細めた甘寧がその手を腰の剣に添えている。先程の呆気顔はどこへやら、甘寧は既に臨戦態勢を取っていた。

「……」

「さて、やりますか」

無言の甘寧を相手にそう呟き、俺も腰の戦鎚に手をやる。それを横目で確認した甘寧が静かに鞘から剣を引き抜く。次の瞬間、ぐつと足を踏み込んだ甘寧が前傾姿勢のまま兵舎に向かって飛び出した。地を滑る様に一本目の通りまで走り抜け、あつという間に松明を手にして一人の黄巾兵に近づくと剣を一閃。ドチャリと湿っぽい音と共に、黄巾兵の首から上が地に落ちる。

血飛沫が吹きあがる光景を横目に見ながら、甘寧に気付いた黄巾兵が声を上げる前に、既にその眼前まで肉迫していた俺も戦鎚を一振り。鉄の塊は鈍い手ごたえを残して黄巾兵の頭蓋を砕き血と脳漿をぶちまける。

まずは一本目の通りを越えた。

「ん、今何か音が……っ?! て、敵しゅ——」

二本目の通りは、どうやら見張りが建物の死角に隠れていたらしい。異変に気付きこちらへ顔を覗かせた瞬間、血と松明に照らされた甘寧の剣が赤く閃き彼の首が宙に舞う。幸いにして見張りの数は一人。俺は先行して二本目の通りを駆け抜け、一つ遅れて甘寧が続く。

そして二本目の通りを越える。

「敵だ、敵が攻めてきたぞ！ 城内に侵入者だ！」

「敵襲！ 敵襲——！」

しかし流石に正面から攻め込んだ以上、ここまでくれば馬鹿でも気付く。というか気付かない方がおかしい。仲間が殺されたのを見て、兵舎前にいた黄巾兵達が口々に襲撃の報を口に叫ぶ。俺はそんな黄巾兵達を無視すると近くに立つ松明を片っ端から家屋へ向けて蹴倒し始める。

蔵が近いこの辺りが燃えれば、必然蔵にも火の手が回る。と言っても、この程度の火付けでは嫌がらせ程度にしかならないだろう。確かに木はよく燃えるが、紙の様に燃えやすい訳ではない。

だが、それでも相手の気を引くには十分だ。

「いっつら火い付け始めたぞ！」

「さっさと殺して火を消せ！」

「早く水もってこい！ 城が燃えちまう！」

松明が倒れた所から少しずつつ火の手が回り始める光景に黄巾兵達が声を上げて慌て始めた。本丸や周囲の巡回についていた者もこの騒ぎを聞きつけたのか、結構な数の黄巾兵が通り一帯に集まり始める。これだけの数を引つ張つていけば陽動としては十分だろう。むしろ俺達の方が危険に瀕している気がするが……まあ、これが任務だ。仕方がない。

頃合いと見た俺達は視線で頷き合い踵を返して駆け出す。蔵とは反対方向に、道中目につく松明を倒しながら。

「逃がすなあ！ 追ええええええ！」

「ぶっ殺してやる、ぶっ殺してやる！」

逃走を図る俺達を黄巾兵が怨念にも等しい殺気をぶちまけながら追ってくる。良いぞ、それでいい。明命の仕事が終わるまで精々目の前の獲物に気を取られていてくれ。気づくのに遅れる分だけ、こちらの犠牲も少なくなる。

ここまでは万事予定通りに事が進んでいる。にしても俺達を追ってくる黄巾兵の数が多過ぎるんだが……というか明らかに多いだろう。あれはどう見ても二人相手に差し向けられる数じゃない。

どうやら予想以上に陽動作戦は効果を上げてしまった様だ。事前に頭に叩き込んでおいた城内の見取り図を元に、大人数では通り抜けられない様な狭い路地を駆け抜け、あるいは無人となった家屋の裏口を利用し、時には邪魔な壁を鉄鎚でぶち抜き、文字通り逃走経路をその場で確保しながら追手を出来得る限り翻弄する様に走る。

黄巾兵達はそんな俺達を意地でも捕まえる腹積もりなのか、どうやら人手を分けて追い囲む作戦に出た様だ。さつきから周囲に追手の声が鳴り止まないでいる。俺達は一度息を整えるためにも、追手に比較的見つかりにくいだろう狭い裏路地へ再び駆け込んだ。

「やれやれ、血気盛んな事で……」

「私にとっては好都合だがな」

「あなたの護衛が任務の俺にとっては不都合極まりないんだけどな」

澄まし顔でのたまう甘寧と蔵の守備を忘れて俺達を捜す黄巾兵の叫びに辟易しながら、俺は横で息を整える甘寧に目を向ける。黄巾兵を斬り捨てた時に浴びたのか、服や顔には多少の返り血が付着している。俺の視線に気づいた甘寧が怪訝な表情を浮かべた。

「なんだ、私の顔に何か付いているか」

「返り血がな。まあ、戻ったらすぐに洗った方が良いんじゃないか」

俺の言葉に甘寧はちらと視線を自身の服に向ける。かく言う俺も黄巾兵の頭蓋を砕いたあの時にそれなりに返り血を浴びているが、元が真っ黒な装束なので血の色は殆ど目立たない上に普及品ゆえ代えもきく。流石に血特有の鉄錆び臭さまではどうにもならないが、俺にとつては血の臭いなど今更だ。

「……覚えておく」

「そうしてくれ」

一瞬考え込むような間があつたが、やはり返つて来たのは相変わらずのぶつきらぼうな返事だった。

「捜せ！ まだこの辺りのどこかにいるはずだ！」

「つと、もう回り込まれたか。早いな」

近くから聞こえた黄巾兵の声に路地から少し顔を覗かせる。通りには十数人の黄巾兵が陣取つてぎらついた目をして辺りを見回し、更に数十人が手分けして家探りする勢いで家屋の中を覗きこんでいる。どうやら完全に周囲を囲まれてしまったらしい。

「いくら烏合の集まりでも、巢の形くらいは覚えているものだろう」

「違いない。しかしまあ、面倒な事になった」

誰にでも無く愚痴りながら一つため息をつく。先程顔を覗かせた時に気付いたが、俺達を追う黄巾兵の中に弓兵達が少なからず混ざっていた。この状況からの脱出に屋根

伝いに走ろうかなどと考えていたのだが、今屋根に登ろうものなら黄巾兵に見つかった挙句、弓兵達の良い的になるだけだろう。屋根を伝えれば弓兵的、さりとて地面には怒り狂った黄巾党の集団。

どうあつても戦闘は避けられない状況だが……さて、どうしたものか。

「おい！ 蔵の方にも敵だ！ 蔵が燃やされてるぞ！ 奴ら兵糧を焼き払う気だ！」

「という事は、こつちは囷か!？」

まったく、考える暇も無しか。予定より少し早い、どうやら俺達が陽動である事に黄巾兵達が気付いたらしい。異変に気付き、追手の半数が踵を返して蔵の方面へと駆け出して行く。大方、蔵の消火に援軍として向かったんだろうけど――。

「もう既に手遅れだったりするんだよなあ」

俺の呟きに応えるかの様に、通りの黄巾兵達が俄かに騒がしくなった。

「マズイ、本丸にも火の手が上がってるぞ！」

「張角様達が危ない！」

「武器庫でも火事だ！」

「こつちの消火手伝え！」

「くそつ、一体何がどうなつてやがんだよお！」

少し手間取ったみたいだが、どうやら隠密達の方も無事任務を果たせたようだ。次々

と起こる重要箇所への火計に黄巾党は混乱を越えて恐慌状態へと陥り始めている。これでは纏まった連携も取れず、消火作業は到底間に合わないだろう。それどころか城門で奮戦しているだろう防衛部隊にさえ影響が出るに違いない。

あと数刻でこの城は火の海に沈む。兵糧庫だけじゃなく、この出城自体が城としての機能を完全に失うだろう。そうなれば黄巾党は城外への脱出を余儀なくされる。その脱出経路は、この城に一つだけしか存在しない正面の城門以外にあり得ない。そしてそこには囷として動いていたこの策の大本命、呉王孫策率いる精兵揃いの呉の本隊が待ち構えている。

前門の英雄、後門の大火とでも言うべきか。この戦い、もはや黄巾党の敗北は確定となった。あとは俺達が無事城外へと脱出すれば、それで陽動部隊の任務は成功だ。ちなみに甘寧の護衛という俺の任務も無事達成となる。そのためにも、この窮地をどうにかして切り抜けないといけない。

数が減ったとはいえ、退路である城壁方面への通りには依然退却を阻む黄巾兵の壁が存在している。恐慌状態の奴らを相手に不覚を取るはずもないが、しかし時間を掛ければ火にまかれてしまう。そうなれば俺も甘寧も黄巾党と一緒にお陀仏必至だ。幸いでして、ここから城壁までの距離はそう遠くない。

となれば、多少の危険を覚悟の上で脱出口まで突貫するのも一つの手だ。さつきは断

念したが、そうなることやはり屋根伝いに走り抜けるのが一番手っ取り早い。問題は弓兵からの狙撃だが、それは最悪、俺が体を張れば何とかなるだろう。

顔に吹きつける熱風に若干の息苦しさと残る時間の少なさを感じながら、俺はその考えを隣りで警戒をしている甘寧に告げる。

「甘寧、屋根伝いに城壁まで走り抜けるぞ。ここも直に火に飲まれる」

「……奴らの相手をしている時間は無いか」

火の手が迫る方角へと目を向けた甘寧がぽつりと呟く。俺が逃げる道中に仕掛けた嫌がらせもとい道中松明蹴倒し作戦が不幸にも絶大な効果を發揮してしまったようで、俺達が逃げてきた方面は既に火の海に没している。本来なら未だ後方にあるはずだった火の手が脱出までの時間を急かさされる程にここまで迫ってしまったのもこれが最大の原因だ。

まさか自分の蒔いた種もとい火種によつて尻を炙られる事態になるとは……凌公積、一生の不覚である。

「これも一つの経験か」

「随分と気楽なものだな」

まあ、過ぎた事を何時まで悔やんでもしょうがない。今はここから脱出する事に専念するべきだろう。俺は片膝立ちに姿勢を取り、掌を上にして手を組む。

「踏み台をする、先に飛んでくれ」

「礼は言わんぞ」

「さいですか……よつと」

遠慮無く片足を乗せてきた甘寧を勢い良く下から持ち上げる。腕を上げきつた直後に甘寧は飛びあがり、無事に屋根上へと着地した。続いて俺も自身の跳躍力でもって飛び上がり、屋根の淵へと両手を掛ける。そのまま壁を両足で強く蹴り、倒立する要領でくるつと体を放り上げ反転して屋根の上へと着地する。

「腰のそれは重しにすらならないか。非常識な奴だ」

「そりやどうも」

褒めていない、と雄弁に物語る甘寧の冷めた視線が突き刺さる。しかしまあ、長く鉄鎚を振るってきた俺からすれば鉄鎚を含めての体重の方が最早基本の様なものだ。試合の時にも言ったがむしる鉄鎚が無い時の方が体が軽くて違和感を感じるくらいなのだから。

「いたぞ！ 奴ら屋根の上だ！ 屋根の上にいるぞ！」

「矢あ持つてこい！ 纏めて射殺せ！」

屋根の上に昇った俺達に気付いた黄巾兵の一人が声を上げた。周囲を探索していた黄巾兵達が一樣に視線を上に向け、殺意にぎらつくその視線が俺と甘寧に集中する。そ

れを肌で感じた瞬間——。

「走れ！」

叫び、俺達が走り出した一瞬遅れてどこからか矢が飛来した。瞬き一つ分前に立つていた場所に数本の矢が突き刺さる音を背中越しに聞く。それでは終わらず、俺達を追い掛けながら放たれた矢が、また前から迎え撃とうと放たれた矢が、屋根を駆けまた路地を飛び越える俺達目掛けて降り注ぐ。

精度はお世辞にも良いとは言えない。それでも下手な弓矢も数を放てばどれかは当たる。一度足を止めれば確実に捉えられてしまうのは明白だろう。ゆえに時たま軋みを上げる不安定な足場に不安を覚えながらも、決して速度を緩めることなく俺と甘寧は疾駆する。

そんな俺達の決死の逃走をあざ笑うかのように、俺の前を走る甘寧の首巻きを一本の矢が掠めた。甘寧の顔を隠していた首巻きが大きく裂け、向かい風に煽られたそれが空へと舞う。動揺からか体勢を崩し、一瞬露わになる甘寧の首筋に薄く血が滲んでいた。

「足を止めるな、死ぬぞ！」

俺の親父がそうであったように、人間首から上を射抜かれればどうであろうと即死は免れない。今さっきの一矢、放ち手が外したのかそれとも首巻きの所為で矢の軌道が狂ったのかは分からない。もしかしたら単なる流れ矢だったかもしれない。

しかしその一矢が、この状況下においてはこの上なく最悪の一矢だった。

「鬱陶しい！」

体勢を立て直しながら抜剣した甘寧が声を荒げて剣を振るう。迫る矢の軌道に重ねて寸分違わず振るわれたそれは飛来する幾本の矢を確実に打ち払った。俺との戦いでも見せた甘寧の素晴らしい目の良さ前には、視界に入る限りどんな達人の狙撃であつても脅威にはならないのかもしれない。

今一度訪れた危機的状况を甘寧は見事退けた。だがその代わりに今度こそ甘寧の足が完全に止まる。目の端に今にも矢を放とうとする数多の黄巾兵が映る。目前には失策を悟つたらしい甘寧の横顔。そこまで状況を把握した所で、俺は腰の留め具を外すと同時に弾ける様にして加速した。瞬時に甘寧の姿が視界一杯に迫る。

「がっつー！」

次の瞬間、俺の耳元で決して年頃の少女が出してはいけないと思わしき苦悶が甘寧の口から漏れた。俺の突き上げる様な横からの体当たりや軽量の甘寧の体が宙に浮く。もしかしたら肋骨が何本が逝ったかもしれないが、今は気にせずそのまま勢いに任せて甘寧を肩へと担ぎ上げる。直後、甘寧のいた場所へ放たれた全ての矢は、しかし俺が駆け抜けた後へと空しく突き刺さる。

「き、貴様、何を……っつー！」

「こうしてなきや、今頃あんたは針鼠だ。まったく目が良過ぎるのも考えものだな」
「余計なつ、お世話だつ」

「その余計なお世話が俺の任務でね。とりあえず、あんたの剣を借りるぞ」

相変わらずの矢の雨の中、更に面倒な事に俺達と同じく屋根によじ登り前方に現われた三人の黄巾党に、俺は体当たりで体が一時的に麻痺しながらも剣を握りしめて離さなかつた甘寧の手から剣を強引にもぎ取る。自分の得物ではなくわざわざ他人の得物を借りた事に甘寧が疑問を口にする。

「凌統、貴様は、あの鉄鎚は、どうした？」

「……流石の俺もアレとあんたを抱えて走るのはキツイんでね」

「なっ!？」

甘寧が驚愕の声を上げ絶句した。さっきの一言であの時に俺が鉄鎚を放棄してきた事に気づいたんだろう。無論その理由も合わせて。頭を背中側に担いでいるおかげで今の甘寧の表情が俺から見えない事は、俺にとつても甘寧にとつても僥倖だろう。

「くっ、私を下ろせ! 貴様の荷物に、なる心算は、ない!」

「まだ完全には息が戻ってないだろ。いいから暴れずじつとしてくれ」

甘寧から呻き声が漏れるくらいに担ぐ左腕に力を込めて拘束を強くし、右手で甘寧の曲刀を構えながら俺は進路を遮る黄巾兵達に突進する。一般のそれよりは肉厚とは言

え、最早後方に落してきた双鎚よりは遙かに軽いそれを最速で閃かせ、振り下ろされた三本の凶刃を軽くないす。そして正面の邪魔な一人だけを体当たりで吹っ飛ばすと、その勢いのまま俺は甘寧を抱えて跳躍。路地に背中から落ちていく黄巾兵の悲鳴を聞きながら、城壁までの最後の路地を危なっかしくも飛び越える。

その時カシャンと小さな音が足元で鳴った。まさか着地した屋根が二人分の重さに耐えきれなかったのかと一瞬焦るがそんな事は無く、直後に着地の瞬間に甘寧の口から漏れた女性としてかなり頂けない悲鳴がそれをかき消す。俺の肩が甘寧の腹に食い込んだ事以外に特に問題が起こった様子は無く、俺は安堵してつい本音をポロっと漏らす。

「年頃の女がさっきの悲鳴はちよつとどうかと思うんだが」

「だ、誰のせいだと」

「よし、恨み事を言える内は大丈夫だ」

「貴様……後で覚えていろ」

言い出しておいてあからさまに話を逸らした俺に甘寧がぼそりと呟く。家から家へ飛び移りながら味方の殺気を背後から零距离で当てられるというのはなかなか体験できない事だろう。というか初めての体験な訳だが、正直二度と体験したくない事であるのは把握した。落ち着かなくて思わず足元が狂いそうだ。

そうして変な冷や汗をかきながらも黄巾兵の追跡を何とか振り切り、俺達はようやく脱出口である城壁にたどり着いた。

第十五話

「ここまでくればもう大丈夫だな、下ろすぞ」

辺りに追手の姿が見えないのを確認し、俺は甘寧の腰に回していた左腕を解いて甘寧を肩から下ろす。担がれた状態で激しく揺さぶられたせいも、甘寧は少しふらつきながら城壁に寄りかかるとそのままずると座り込む。そして俯き加減にぼつりと小さく呟いた。

「……助けるなどと頼んだ覚えはない」

「俺も頼まれた覚えはないよ。俺が勝手にやった事だ。ほら、あんたの剣」

疲れた顔をしている甘寧に俺は借りていた剣を差し出す。乱れた服装を整えつつ、冷たい視線を向けてくる甘寧は半ばひったくろく様にして剣を受け取ると、一通り刀身を確認した後には鞘へと納める。

「勝手に借りて悪かったな。一応、刃毀れには気を付けたつもりだ」

「……身軽な上に器用とまで来たか。つくづく非常識な奴だ」

「よく言われるけどな、怪力だから不器用だつてのは偏見だ」

甘寧の憎まれ口に真顔で答え、俺も甘寧と同じ様に城壁に凭れかかる。侵入した時と

同じく見張りの姿は見当たらない。最も、城内外であれだけ騒ぎが起こっているのだから誰もこんな城壁の端っこにまで手を回す余裕はないだろう。

ともすれば任務も終わったのだし、少し休んで体力を回復したら迷わずさつさと脱出しよう。そう思い、侵入した時に使った鉤爪縄を用意しようと腰に手をやり、そこで俺は気が付いた。

最初に侵入した後、確かに回収し「腰帯」に纏めて引っ掛けていたはずの鉤爪縄が、跡形も無く消えている事に――。

「あ……」

無意識に口から声が漏れた。特に意味もなさなそれは、だが今の俺の心境を一番に表していたに違いない。なかなか洒落にならない事態に、俺はがっくりと頭を落ち込ませる。甘寧が訝しげな視線を向けてくるが……ふっ、笑いたければ笑うがいい。そうとも、鉄鎚を吊るしていた腰帯には鉤爪縄も一緒に吊るしてあった。そして俺は、その腰帯を仕方が無かったとは言え外して落としてきた。ゆえに鉤爪縄がここに無いのも至極当然の結果であり、つまり俺が脱出用具を失う羽目になった責任の半分はあんたにあるのだよ甘寧いいいい!!

などと、自分の不注意を棚上げに心中で甘寧を罵りつつ、いやましてばしと俺は荒ぶる自分に言い聞かせる。確かに俺は脱出用具を失った。だが周囲に敵の姿は無く、火の

勢いも届かないこの場所ならば、何も急いで脱出する必要など無いのではないか。

そうとも脱出するのは二人だが、脱出に必要な道具は最低一つで十分なのだ。何を慌てる必要がある。落ち着け浩牙、冷静になれ。気を取り直して悶絶から立ち直り、俺は務めて冷静な表情を顔に張り付け甘寧の方へと向き直る。

「あー、こほん。甘寧——」

ちよつといいか、と続けようとした所で、俺もまた甘寧の異変に気がつく。先程まで怪訝な表情を浮かべていた甘寧が何故かあたふたと自分の体を見回し、せわしなく手を動かして全身を弄り、果てに背中を確認しようと体を左右に捻ったかと思えば、その場でびよんびよんと跳ねたりしていた。その光景に今度は俺が訝しげな視線を送っていると、俄かに静かになった甘寧が顔を俯かせ一言ぼそりと呟く。

「……無い」

今一番聞きたくない言葉を口にされ、ピキリツと張りつけた表情にひびが入る。だが一体何が無くなったというのか。前髪に隠れて表情の伺い知れない甘寧に俺は恐る恐る問いかける。

「な、何がだ？」

出来れば返ってくる言葉は三文字以上が良い。略さずに言うなら七文字以上を推奨だ。最初の一文字が「な」や「か」で無い事を切に願う。しかしそんな俺の願いも空し

く、果たして返って来たのは案の定最悪の答えと言える言葉だった。

「……縄だ」

「……」

「……縄が無い」

「……なぜ？」

「……」

「……」

お互い会話が続かない。この気まずい沈黙をどうすればいいのか、誰か教えてくれな
いだろうか。というか、自分で落とした俺はともかくとして、何故甘寧まで縄を無くし
ているのだろうか。正直、思い当たる節が見当たらないが……いや、一つだけある。それ
もついさつき。最後の路地を飛び越えた時、足元で聞こえた小さな金属音が――。

「あの時か……」

紛失の経緯に思い当たり、深くため息を吐いた俺は自分の犯した失態に天を仰ぐ。恐
らくだが、俺が甘寧を抱えて飛んだあの時、腰に強く手を回した拍子に運悪く縄を纏め
ていた留め具が外れてしまったのだろう。チカチカと瞬く星がまるで俺をあざ笑って
いる様に見えるのは、きつと落ち込んだ気のせいだと思いたい。

「どうする、戻って回収を試みるか？」

「いや、どうせ戻った所で見つかる可能性は低い。それにあの場所は既に火の海だ。よしんば見つけれられたとしても、たぶん使い物にはならない」

鉄製の鉤爪の部分とはかく、肝心の縄の部分が燃え尽きて跡形も残っていないだろう。代わりをその辺りの家屋から拝借するにしても、長い事ここを本拠にしていた黄巾党が使える物資を放置している訳も無し。仮に回収し忘れがあったとしても、城壁を下りに必要な長さがあるとは思えない。精々前の住人が荷を縛るのに使うくらいの長さだろう。

縄無しでこの城壁を下るのも手だが、この暗闇の中でそれをするのは自殺行為に等しい。一つ手足を滑らせれば、奈落の底に真つ逆さま。朝には真つ赤な花が地面に咲いている、なんて事態になりかねない。

結論、現状での脱出は不可。いやはや、こりや帰ったら明命達に顔向けできないなあ。というか、雪蓮様達に大笑いされそうだ。冥琳様には……たぶん呆れられるだろう。帰還してからの事を想像して、少しへこむ。

「くつ、何か方法は……凌統、貴様何を呑気に座っている。貴様も何か方法を考えろ！」
「いや、考えた結果、俺は悪あがきを止めて体力を温存するに決めた。あんたも休むといい、慣れない任務で結構消耗してるだろ？」

「なっ……」

というのは、まあぶつちやけ建前である。しかし何をしようにも出来ないのだから、じたばたして無駄に体力を消耗するのは頂けないと俺は思うのだ。折角、俺達は城の隅っこにいて敵も火の手も来ないのだし。ならばこのまま戦が終結するまで大人しく待機し、戦が終わった後の戦後処理に力を注ぎ込めばいい。もともと今回の任務である陽動作戦は既に達成したのだから、今戻ったところで俺達には特にする事は無い。

いや、正確に言えばあるにはあるが、それも後方待機となつている蓮華様率いる各部隊に参加し、討ち漏らした黄巾兵の追撃の指揮を執る程度の役目でしかない。正直その辺りは各方面に布陣している諸侯達に任せてもいいくらいなので、どちらにしろあまり重要ではない。

今はまだ規模の小さい孫策軍にとつて少しの疲弊でも下手を打てば命取りとなる。疲弊の大きい殲滅戦を仕掛けるなど無謀の極みだ。既に城破りの第一功は孫策軍が手にしたのだから、これ以上の欲をかく必要は俺達には全く無いのである。

ゆえに戦が終わった後、戦を終えて疲弊した将兵達に代わり温存した体力を使って戦後の撤収作業などを引き受けた方が軍全体に対して効果的だと思ふのだが、どうやら根っこからの生真面目武人な甘寧からすれば、それはどうにも我慢ならない様で。現に先程から城壁に寄りかかつて休息する俺を、甘寧は憤怒の表情を浮かべ上から見下ろしている。

女性があまり眉間に皺を寄せるのも、頂けない事だと俺は思うのです。

「貴様、ふざけるのもいい加減に——」

しると、続けようとした甘寧の言葉を遮るかの様に、連続して鳴らされる銅鑼と太鼓の音が本隊の方から響き渡った。戦場に赴く戦士達を鼓舞する強く猛々しいそれは、孫策軍の全軍突撃の合図である。逆巻く火炎に尻を炙られ、とうとう城門を解放し脱出を図ろうとする黄巾党に本隊が最後の引導を渡しに行くのだろう。今頃は血化粧で真っ赤に染まった雪蓮様の姿が容易に想像できるといふものだ。

「くそつ、間に合わなかった！」

「もとから俺達が帰還しなくても支障の無い布陣を敷いているんだ、何も問題は無いさ」「貴様はツ……今あの場所では、我らの同胞が命を賭して戦っている！ それを——」

「それが彼らの役目だ。俺達は俺達で、与えられた役目を果たした結果ここにいます。まあ、確かに陣まで帰還出来なくなったのは俺達の落ち度だけど、あの場にはいない事に関しては何もやましい事は無い。それでもあんたが焦るのは、軍議の時に冥琳様が言つた事を気にしているからか？」

甘寧が信用に足る人物かどうか、今回の任務はそれを見極めるためのものでもあるとは軍議における冥琳様の言である。だが俺からすれば既に甘寧は呉に深く忠誠誓つていると見えるし、少なくとも蓮華様からは全幅の信頼を寄せられている。当主である雪

蓮様も認めていると言ったのだから、甘寧もそんなに不安がる必要は無いと思うのだ。

それでもやはり、甘寧自身がそれを信じられるだけの結果が欲しいのだろう。その姿勢だけで最早十分だと思うが、そこは蓮華様に劣らずの真面目さなのか。

「与えられた任務は完遂したんだ。なのに何故そこまで焦る」

「代々仕えてきた貴様と違って、所詮私は他所者だ。己の力を認めて貰うには、求められる以上の結果を出さなければ意味が無い！」

「それはあんた一人の考えだ。冥琳様は武功の差で人の扱いに差をつける様な人じゃない」
「」

「そんな事、貴様に言われずとも分かっている！ それでも私はッ!!」

蓮華様を守るだけの力があると証明するために――。

絞り出す様に甘寧が呟いたその一言に、一体どれだけの思いが込められているのか。きつと俺には計り知れないのだろう。それでもなお伝わってくる強い意志は、甘寧の本気具合を雄弁に物語っていた。

「……これ以上、貴様と話しても時間の無駄だ。貴様がここから動かないというのなら、私は一人で行く」

「正気か、甘寧」

「……」

俺の問い掛けに甘寧は答えない。しかしその視線は真つ直ぐ、孫策軍と黄巾党がぶつかり合う城門へと向けられている。

「乱戦真つ只中の敵陣へ単騎突入……そんなものは勇猛さでも何でも無い。ただの無策無謀、自分から死に行くのと何も変わりはない」

「最早貴様には関係の無い事だ。言つたはずだぞ、私は一人でも行くと」

「本当に、あんたの言う通り関係無いなら、どうぞご勝手にとでも言つてやりたいところなんだけどな」

俺はため息を吐きながら立ちあがり、ここから城門まで続く道を遮る様に甘寧の前へと回り込む。そのあからさまな行為に、甘寧がキツと殺気の籠った視線を俺へと向ける。

「貴様……」

「そう怖い顔をされてもな。言つただろ、余計なお世話が今回の俺の任務だと。あんたに死なれると、俺が色々と困るんだよ」

「貴様の事情など——」

「知つた事じゃない、か？　なら俺の方も、あんたの事情なんか知つた事じゃないな」

明らかに感情を逆なでする俺の言葉に、先程納めたばかりの劍の柄に甘寧が手を掛ける。その瞳は今にも俺を斬り殺してやるとでも言わんばかりだ。しかしそれが出来ない事も十分に承知しているのか、冷ややかな色を湛えた瞳の中に、焦燥と不安の色もまた見て取れる。

「そこを……退け！」

「あんたのその直向きな忠義には敬服する。けどな、それは無理な相談だ。あんたは俺が行く事を認めない限りどうする事も出来ない。よもや本当に俺を斬り伏せて行く訳にもいかないだろう？」

もし仮に俺を斬り捨てないし半殺しにして、これまた仮に黄巾党を相手に大戦功を挙げた所で、所詮相手は賊徒の群れ。どう慮つても味方に剣を向けてまで討つべき手合いではないし、むしろその罪の方が遥かに重い。それは甘寧にとつて決して望むところではないだろう。

「……で戦が終わるのを待つ以外には、今出来る事など何も無い……あんたも、俺も」
「……」

「無言は了承の意と捉えるぞ？」

俺の問い掛けにギリッと歯ぎしりで応えた甘寧は、少しでも目を離そうものなら飛び出してしまいそうな空気を醸し出していた。そんな人物を相手に些かも警戒を解く事

など出来る筈も無く、しかし戦が終わる事までそんな緊張状態を維持し続ける事など正直勘弁願いたい。

ゆえに俺はある一つの決断をし、そして一つ大きなため息を吐いた後、行動に出る。

「え……あ？」

一体何が起こったのか分からないと言いたげな、疑問の表情を甘寧が浮かべた。掠れた呻き声を漏らし、そして俺に凭れかかる様にして甘寧が膝から崩れ落ちる。呼吸すらままならない状態の甘寧の腹部には、俺の拳が深くめり込んでいた。

「悪いが、これ以上あんたの我がままにつきやってやるほど、俺はあんたに寛容じゃないんだ。少しの間、眠っててもらおう」

「ふい、うち……ひきよう、な」

「流石に二度目だし、その不名誉は甘んじて受けてやるさ。だからしばらく寝てるといい。次に目が覚めた時には、全部終わってる」

「りよう、と……」

最後に恨みがましく俺の名を口にし、やがて甘寧が意識を手放す。腹部を強打され喋ることすら億劫な状態だったはずなのに、まったく恐ろしい執念だ。戦が終わわり、甘寧が目を覚ました後、行く先の無くなったその矛先は、きつと俺に向かつてくるのだから。

「はあ、結局こんな役回りか。恨みますよ冥琳様」

ぼやきながらも気絶する甘寧を静かに横たえ、俺も少し離れて甘寧の隣りに腰を下ろし、軽装に身を包む甘寧の体温が夜風に奪われないよう、纏っていた黒装束を脱ぎ甘寧の上に掛ける。対して厚い生地でもないが、無いよりは幾分増しのはずだ。

俺は若干肌寒くなった身を夜風から隠すため、城壁の縁沿いに深くもたれかかる。こんな状況を招いたのは俺の不注意が原因の一つでもあるが、それでもどうしてこなつたと思わずにはいられない。しかしそれを愚痴つたところで、聞いてくれるのは足元にある冷たい石材と、頭上で相も変わらぬ瞬いている星くらいのものだ。当然返事も無ければ、慰めも無い。加えて陣に戻ってからの事を思えば、今回ばかりは本当に損な役回りを引き受けたとしか言い様がない。

身を感じる疲労感心地良いものとは程遠い。これぞまさしく疲労、とでも言いたくなるくらいに、心身ともにずっしりと重くのしかかってくる。割合的には心が七割、身が三割と言ったところだろう。

「うう……蓮……華……様」

「はあ……」

夢の中でも相変わらずな甘寧に、特に心的疲労に關しては全部お前の所為だと込めた一瞥をやつて、俺は深くため息を吐く。気がつけば、先程までは辛うじて夜の帳が下り

ていたはずのこの辺りさえもが、広がった業火によつて赤々と照らされていた。同じくして、火の勢いに煽られ舞い上がった白い何かが、はらはらと俺達の上に降り注ぐ。白と言うには煤けた色のそれらは、さつきまで出城を形作っていた様々のなれの果てだった。

「……」

無言で肩に積もったそれを手で軽く払う。しかし少しもすればまたすぐに積もり、結局俺は払い落とすのを諦めた。代わりに、甘寧に被せていた隱密服の端を肩の位置から鼻と口を覆うところにまで引き上げる。

「夜明け頃には城内一面、灰景色かね……」

まあ、火計を仕掛けた戦である以上、当然の結末だろう。朝日に照らされる、何もかもが燃やし尽くされた光景……黒と白の入り混じった情緒もへつたくれも無い光景を想像し、少しだけ空しい気持ちになる。

黄巾党に奪われる以前は、ここも周囲一帯の治安を維持するために多くの兵達が駐留し、民草の生活の安全を担う役割を果たしていたはずだ。それが今となつては賊徒の本拠地として使われ、そうなつてしまつたがゆえに俺達によつて火計を仕掛けられ、そして最後に諸侯の功名の場となりながら灰に還つていく。

平時であれば決してあり得ない事態、だがそれが起こつてしまう……いや、起こせて

しまうのが今の大陸の現状。もし誰かが俺達の仕掛けた火計が非道だと、後の結果を考えぬ下策だと非難するならば、俺達は声を揃えて言うだろう。

ならばこれ以外にどんな方法があつたのか、と。

正面から正々堂々押し切ればよかつたなどと言わないで欲しい。その結果死ぬのはその役割を担う兵達、ひいては守るべき民達だ。今回の火計にしても、祭さんたちと一緒にに囷となり、そして雪蓮様と共に突撃した兵達の中には、確実に死者が出る事だろう。それでも袁紹軍が取っていた様な正面からのごり押しに比べれば、被害が少ないのは確実なのだ。

まあ、過程はどうあれ、大陸中を騒がせたこの黄巾の乱はこれでようやく終結に向かう事だろう。しかし俺達が目指す目標、孫呉独立に向けての今後を考えれば、終戦の後を訪れるだろう一時の平穩にゆっくり浸る事は出来そうもない。

何が起るのか、誰が起すのか、その予想は立てられても内容までは分からない。だがこの大陸に渦巻く騒乱の渦が、このまま消えて無くなってしまう事だけは確実にありえない。なぜならその騒乱の一端に俺達が関係するのは明らかだから。

考える事はたくさんある。やがて勝利の鬨の聲が響き渡るその時まで、俺は自分が言つた休息を取る事も忘れ、ずっと考えを巡らせ続けた。



「う……」

臉の向こうに光を感じ、甘寧は小さく呻きながら寝台の上で体を起こす。見回せば、そこは自分に宛がわれた天幕の中。布で仕切られた向こうからは兵達の喧騒が聞こえ、天幕の僅かな隙間から差し込む光が、今の時間帯を明確に示している。

それを起きたばかりの頭が認識した瞬間、甘寧の意識は瞬時に覚醒した。

「今の時間は——うぐっ！」

寝台の上から飛び起きるも、腹部に痛みを覚え甘寧は顔を顰めて蹲る。しかしその痛みが、何故自分がこの様な状況にあるのかを思い出させた。そう、全ては自分に不意の一撃を入れてくれた、あの憎らしい男の所為である。

「くそ、凌統め……！」

痛む腹部を摩りながら立ちあがった甘寧は、ふらつく足取りで天幕を出る。途端、浴びせられる陽の光の眩しさに思わず手で光を遮る。そして何度か瞬きを繰り返し明るさに目を慣れさせると、目に映った光景に甘寧は言葉を失った。

そこには、陣の撤収に追われる兵達の姿があつたから……。

「まさか……」

認めたくない現実に呆然と甘寧はその場に立ちすくむ。そう、認めたくはないが、認めるしかない。戦は、当の昔に終わってしまったのだ。自分が知らず、また名を馳せる事も出来ず、凌統の手によって情けなく昏倒していた、その間に。

「ふぎけるな……ふぎ、けるなっ……」

悔しさに、爪が掌に食い込むほど強く手を握りしめる。構わないのなら、今すぐこの場で叫び出してしまいたい。しかしそんな事をして、兵達のいらぬ動揺を招くだけで何の得にもなりはしない。まして自分の心が晴れるでもない。本当にただの八つ当たりには過ぎない。

だが、それならば！ このどうしようもない感情の矛先は、一体どこに向けろというのか。誰に向ければいいというのか！

如何ともしがたい感情のうねりに、甘寧は目の前が真っ赤に染まりそうだった。

「あ、目が覚めたんですかい姐さん！」

「っ!？」

悩むあまり視野が狭まっていたためか、いきなり声を掛けられた甘寧がビクツと体を震わせる。顔を上げ視線を向けた先には、江賊として戦ってきた時から甘寧に付き従っていた信頼できる部下の一人、鶯禁おうきんが心配そうな顔をして、甘寧の顔を覗きこんでいた。

「あ、ああ。鶯禁か。どうした」

いかに感情の折り合いがつかないとはいへ、部下に情けない姿は晒せない。いつもの自分に見えるよう、精一杯取り繕った顔で応える。すると目の前の男は大げさに嬉しそうな表情を浮かべ、と思った次の瞬間には手で顔を覆いオイオイと大声を上げて泣き出してしまった。

「お、おい」

「うおおお！ 良かった、姐さんが無事で本当に良かったああ!!」

「わ、分かった。分かったから。大声で泣くのはよせ!」

「うおおおおん!」

困惑してあたふたする甘寧をよそに、鶯禁は更に大声で泣き出す。その泣き声に釣られて、作業中であつた甘寧隊の面々が甘寧と鶯禁を中心に続々と集まり始める。そしてその全員が喜びもしくは安堵、そして尊敬の眼差しを甘寧に向けている。なぜ自分にそんな目を向けるのか、甘寧には全く分からない。思い当たる節も無い。むしろ自分は気絶させられ寝ていたのだから、逆の対応をされる方が自然であるはずなのに。

目覚めてからの怒涛の状況の変化に、甘寧はすっかり思考が回らなくなっていた。

「お、おれたち、俺達! 改めて姐さんに惚れ直しやした! この命尽きるまで、これからも姐さんの手下として付いていく所存でありやす!」

「そ、そうなのか?」

「はい！ 少ない供を連れ、身の危険も顧みず敵城に飛び込むその勇氣！ 俺達の、仲間のために敵の目を引き付けるため、ひいては作戦を成功させるために敢えて敵前に飛び出し、そして大立ち回りを演じたその強さ！ 聞けば降り注ぐ矢の雨を難なく斬り捨て、敵に声を上げる暇すら与えず斬り伏せたとか。これで惚れ直さずしてどうしろっていうんですかい！」

「……」

そう言ってまくしたてる鶯禁に甘寧は口をポカンと開け再び言葉を失う。何がどうして、部下達にそんな話が広まっているのか。確かに甘寧は凌統を含めた少人数で城に侵入し、周泰の火計部隊から目を逸らさせるために敢えて敵に見つかり、仕方ない場面では何度か敵兵と交戦し、その中で飛んできた矢を弾き落とす事もあったが……なるほど、確かに鶯禁の言葉に何ら間違いは無い。

話が多分に美化され、いくつかの失態が伝わっていない事以外は。

「いやはや、姐さんがそんな活躍をしているとはつゆ知らず、後方待機で退屈していた俺達は恥ずかしい限りでさあ！」

「そ、そうか。しかし、今回私が城に侵入する事はお前達には伝えていなかったはず。その話、一体誰に聞いた？」

「そりあ、姐さんをここに運んできた凌統將軍にでさあ」

「凌統に、だど？」

「一瞬、ぴくつと眉を動かした甘寧には気付かなかった様子で、鶯禁は笑いながら頷いた。

「へい。戦が終わって、精根尽き果てて気絶した姐さんを凌統將軍が担いできた時には、てつきり俺達の知らないところで姐さんが死んじまったのかと思つて肝が冷えやしたがね。なんせ、荷物かなんかの様に肩に担いで来やしたからね、あの野郎お……おつと、んんつ。でもまあ、凌統將軍から話を聞いて納得しやした。まったく姐さんも水臭い、どうせなら俺達にだつて教えておいて欲しかつたつすよ」

「……そうか。いや、済まなかつた。お前達を信用していない訳ではないが、人の口に戸は立てられないという。少しでも情報が漏れるのは避けたかつた」

「分かつてやすよ。流石は姐さん、そんな思慮深い所にも痺れる、憧れるー！」

「馬鹿を言つてないで、そろそろ作業に戻れ。撤収作業中だろう」

「あ、いけねつ。おーし、お前ら作業に戻れ！ 隣の凌統隊なんぞに負けんじゃねーぞ！」

「おーう、と野太い声を上げ、鶯禁以外の男達が撤収作業へと戻っていく。

「そんじや姐さんはゆつくり休んでいてくたせえ。作業は俺達だけで終わらせちまうんで」

「ああ、任せた」

「へい。では！」

鶯禁も一応副官としての気構えがあるのか、最後にびしつと礼を取って作業へと戻っていく。それを見届け、甘寧は張りつめていた糸が緩んだかの様にふうつと大きく脱力した。気がつけば、内に渦巻いていたやりやりのない怒りまでも、すっかり小さくしぼんでしまっていた。

踵を返し、甘寧は天幕に戻る。しかしそのまま寝台には倒れずに、外され置かれていた愛剣を腰に吊るすと、再び甘寧は天幕を出る。鶯禁には休んでいろと言われたが、今の甘寧の気分はとも休んでいようと思える気分ではなかった。そしてその足で、何となしに同じく撤収作業中である凌統隊の所へと向かう。するとそこには、甘寧以外にも先客の姿が既にあつた。

「祭殿……」

甘寧にとつては呼びかけたつもりではない小さな眩きであつたが、一体どれだけ耳が良いのかと疑いたくなる程に耳聡く聞きつけたらしい黄蓋が少し驚いた様な顔をして甘寧の方へと振り返つた。

「おう、思春か。もう起きてよいのか」

「はい。ご心配をお掛けしました。ところで、どうしてここに？」

「それは儂がお主に聞きたいんじゃが……まあよい。儂の目的はあれじゃよ」

そう言つて黄蓋がぴつとある方向を指さす。釣られてその方向に目を向けると、甘寧は飛び込んできた光景に思わず目を疑う。黄蓋が指さした先では、周瑜が凌統隊の撤収の指揮を取つていたので。しかし甘寧が驚いたのはそこではない。周瑜の背中姿のもう一つ向こう。まさしく撤収作業中の光景の中に見つけた、ある人物の姿にであつた。

「どうした浩牙。それしきの事でもうへばつた訳ではあるまい」

「はあ、はあ……あの、冥琳様、はあ、どう考えてもこれは、人ひとりで運ぶような、物じゃ、はあ、ないと思うんですが、はあ」

「何を言う。陣に遅れに遅れて戻つて早々、撤収作業で十人分働くと云つたのは浩牙ではないか」

「いや、それはですね、気構えとかやる気を表したというか」

あの城壁の上での威風纏う立ち姿はどこへやら。すっかり弱つた声で泣き言を言う凌統は、彼の言う通り一人で運ぶには重すぎる資材を積んだ荷台を引き、兵達と同じくして撤収作業に取り組んでいた。その足は生まれたての子馬の様にふるふる震えていて、それを見た黄蓋がさも楽しそうに笑う。

「くつくつ、相変わらず頑張るのう。さっさと倒れてしまえばよいものを」

「確かに顔色が悪い……何故だ、確かあの時休むと言つていたはず……」

「ほう、何やら向こうで話し合いでもしたらしいの。まあ、浩牙のことじゃ。どうせ考え事でもしてるうちに夜が更けていたとか、そんなんじやる」

果たしてそうなのだろうか。昨日今日の付き合いでしかない甘寧には凌統の事など分かる筈も無い。それはいい。それよりも甘寧には、どうして凌統がこの様な重労働を課せられているのかが非常に気になった。

「黄蓋殿、どうして凌統——殿は、この様な事に？」

「うむ、まあ、ちよつと浩牙がやらかしおつてな」

「やらかす？」

眉を曇らせ言い淀む黄蓋に甘寧が首を傾げる。やがて話す意を決したのか黄蓋は甘寧に顔を寄せると、周囲に漏れないよう声を小さく潜めた。

「実はお主が浩牙に背われて帰つてきた時、気絶したお主を見てお主を馬鹿にした輩がおつての。陳勤という男なんじやが、そ奴はそれなりに腕は立つが少々……いや、大口が悪くての。気絶したお主を見て、やれ軟弱だの、役立たずだのと……すまぬ」

「いえ、お気になさらず。それより続きを」

気まずそうな黄蓋に務めて平静な表情を保ち、甘寧は続きを促す。

「うむ。それで終いには、お主が過去討ち取った礼牙——凌操の事まで馬鹿にしおつてな。あ奴は筋金入りのおやじつ子じゃから、それでどうとう堪忍袋の緒が切れたらし

い。お主を背負つたまま、顔面に一発入れてしまつてな。流石に手加減したのか死んではおらんが、陳勤は見事に意識を飛ばしてしまつての。そんな男でも孫家に仕える臣の一人。如何な理由があろうと手を出してしまえばそれは罪じゃ。とは言え陳勤にも落ち度はある。それらを鑑みた結果、倒れた陳勤の分とさつき冥琳が言つておつた浩牙自身言葉もあつて、罰として重労働についていると、そう言う訳じゃよ」

「その陳勤殿は、私はともかく何故凌操殿まで……」

「昔からじゃよ。陳勤は何かと凌操に敵愾心を燃やしておつた。何をするにしても凌操の方が一枚上手じゃつたからな。結局、陳勤は一度も凌操に勝つ事が出来ないまま、凌操がああ戦で先に逝きおつた。陳勤はそれでようやく自分の力が策殿や権殿に認められるかと思いきや、今度はその子である凌統や、権殿のお気に入りであるお主が出てきた。それらに対する当てつけであろうよ」

黄蓋の説明を聞き終えた甘寧は陳勤のその器の小ささに堪らず嫌悪感を露わにする。それを目敏く察した黄蓋は苦笑を浮かべて甘寧に補足する。

「お主の思う事も理解できるが、今この時は例え少しの戦力であっても我ら呉にとつては貴重なのじゃ。問題を抱えているとはいえ、さつきも言つたが陳勤はあれで戦の腕は立つ。浩牙や海苑などには及ばなくても、確実に呉の戦力にはなつておるからの」

「……雪蓮様や蓮華様は、何も言わないのですか」

「言わないだけで思うところはあるじやろうな。その証拠に、お主は軍議の場で陳勤の姿を見てはおらんだろう」

「そう言えば、確かに……」

それどころか、今この時に黄蓋の口から聞かされるまで甘寧は陳勤の名前すら聞いた事が無かった。腕が立ち、孫策達に信頼されているならば、如何に参入して日が浅い甘寧とは言え、名前ぐらいは耳にするはずだ。そしてそれが無かったという事は、つまりはそういう事なのだろう。

「まあ、お主もいずれ顔を合わす機会があるかもしれない。その時はあまり気にせず流せ」

「分かりました。元より程度の低い侮辱を受けた所で、怒りを感じるほど幼くはありませんので」

「ほつ、言いよるわい。だがな、浩牙が怒った理由の中には、お主への侮辱も含まれていた事を覚えておいてやれ。口に出しては言っておらんのだが、でなければああして手を出す事も無かったはずじゃ。いつもは陳勤に何か言われたところで、黙って耐えておる浩牙じゃからな」

「……」

最後の最後に黄蓋から聞かされたその言葉に、不覚にも甘寧は返す言葉が見つからな

かった。自分は凌統にとって親の仇。当然恨まれて然るべきはずの存在で、実際に凌統は甘寧を許す事はないと面と向かつて発言している。

だというのに、目を覚ましてから聞く限りの凌統の行動は、まるで――。

「浩牙は自分が認めた相手にはひたすらに優しい男じや。今回の行いもまた、己の矜持に従ったまでの事なのであろうよ。もつとも、浩牙自身は内心複雑に思うところがありそうじやがな」

「認めた、相手……」

「うむ。まあ、お主にとつても複雑な所であろうが、もし浩牙と話をするならば、穿つた見方をせず、まっすぐに相對してやって欲しい。儂からのちよつとした願い事じや」

我が子の事を頼むように優しい笑みを浮かべる黄蓋の前に、甘寧は言葉では応えずにただ黙つて頷いた。

「ほら冥琳様、こつやつて足も震えてますよ？ 加えて腰も限界ですよ？ これ以上は倒れますよ、本当に倒れちゃいますよ？」

「問題無い。そう短い付き合ひでもないのだ。浩牙がどこまで酷使すれば倒れるのか、逆にどこまでならば大丈夫かくらい、しっかりと把握している。だから心配せずに、私の指示に従うといい」

「お、鬼だ。ここに美人の皮を被つた鬼がいる！」

「ふむ……誰かある！ 次の荷台には大天幕一つ分の資材をくくりつけておけ！ 凌統
將軍が皆の分まで働いてくれるそうだし！」

「凌統隊長、謝謝！」

「ちよ、お前らっ！ この薄情者どもめええええ！」

凌統の悲鳴と共に陣内が兵達の笑いに包まれる。それを黄蓋と共に傍から見ている
甘寧の口元にもまた、我知らず小さな笑みが浮かんでいた。

第十六話

「むう……」

さて、一体全体どうしたものかな、これは。

口では唸り、心の中ではそう呟きながら、俺は傷だらけの大岩を前に佇んでいた。周囲にはそれぞれ形や厚みの異なる刀剣がその刀身を見事に碎かれて散乱し、さながら古戦場跡の様な様相を醸し出している。全く統一感の無いそれらは、強いて括るならば常人が扱うには少々不便が過ぎる作りの品々であるという事だろうか。

その例にもれず、今俺が手にしている折れた剣も、あつて無さそうな切れ味の分厚い刀身と、それに付随する重量ゆえに、とてもじゃないが常人が片手でほしいほど気軽に扱える得物じゃない。両手でもって振り下ろす分には十分な威力が約束されるだろうが、それではもはや剣ではなく鈍器だ。しかしそれも、目の前の頑丈な大岩を相手にしては十合と耐えられるものではなかったらしい。

やはり無理かという失望の念と共に、また一つ使いものにならなくなった得物を地面へと打ち捨てる。空に浮かぶお天道様は少し前に中天を越えたばかりゆえに日はまだ十分に高いが、これが夜にでもなれば折れた剣の数だけ怨霊の類でも出るんだろうか。

そんな束の間の現実逃避を試みるが、残念ながら現実は変わらない。
ここは古戦場でも何でも無い、紛うことなく我らが城の鍛錬場だ。



事のそもそもは、黄巾の乱の際に旧臣達が合流した事で拡大化した軍部の再編成案について、瑾と共に執務室で仲良く頭を悩ませていた際に、何気なく瑾が尋ねてきた事だった。

「なあ、公積よ」

「んー?」

木簡に筆を走らせる手を止めず、俺は木簡に向ける視線をそのままに瑾の呼び掛けに生返事を返す。

「今更な気もするが、無くした得物の代わりはどうするつもりだ?」

「あー、そう言えば……」

割と真面目に考えなければならぬ問題を指摘され、木簡に選別した将兵の名を書き込んでいた手を止めた俺は一息つくと共に天井を仰いだ。黄巾党との戦いの後、何だかんだで忙しかったせいですっかり忘れていたが、瑾の言う通り今の俺の手元には敵と渡

り合うための得物が無い。理由は言わずもがな、あの戦いの中で失ってしまったからだ。

実のところ、時間と人員そして状況が許しさえすれば、丸ごと鉄塊と言つても差し違えなかつた俺の双鉄鎚は、あの出城の焼け跡からでさえ回収可能な代物だつた。かなりの手間が掛かるだろうが、きつと灰と焼け跡の下から掘り起こす事が出来ただろう。しかしそれはとある理由によつて不可能になつてしまつた。

それは、黄巾党との戦いで孫呉が大きく戦功を上げてしまつたからだ。敵軍の首領である張角の頸こそは残念ながら討ち取る事は出来なかつたが、圧倒的寡兵ながら大胆な火計によつて堅城に籠る大軍を相手に一番槍を制し、なおかつ敵軍を大きく瓦解させた孫策軍の戦功は、その場に集つた諸侯達の目を集めるのに余りある戦果だつた。

こいつらはヤバイ、確実に警戒しなければ。

あの場にいた諸侯の誰もが、そう思つた事だろう。終戦後、帰還の準備をしているにも関わらず、俺達の陣の周りにはそれなりの数の斥候が警戒と情報収集を兼ねて終始うろちよろとしていた。そんな中で手勢を引き連れて出城の焼け跡に足を運び、瓦礫を漁つて得物の回収を試みる事など出来るはずが無い。

諸侯に確実に不審を持たれるだけでなく、戦功を羨んだ者達によつて、ある事無い事をでつち上げられ、最悪には孫呉の風評に傷をつけられる可能性だつてある。そうなつ

てはわざわざ危険な策を成功させ、折角手に入れた孫呉の勇名も水泡に帰す。

それだけは絶対に避けなければならない。でなければ、散っていた兵達の死が全て無駄死になつてしまう。ゆえに悲しいかな、長く愛用してきた得物だったが、俺はその回収を断念せざるを得なかつた。

未練が無いと言えば嘘になる。だが何時までも過ぎた事を悔やみ続けても仕方がない。それにあの時、例えば状況が鉄鎧の回収を許したとしても、直後に引き起こした俺個人の問題が、結局のところ鉄鎧の回収を阻んだ事だろう。

というのも、黄巾党との決戦おいて俺が陣に帰還したのは結局、夜明け前ぎりぎりのうす暗い中、戦がほぼ終結してからの事だつた。そして帰還を報告するついでに冥琳様のお小言を食らう、いつもはそれだけで終わるはずだつたのだが……よりもよつて、あの時あの場で一番顔を合わせたくない奴が俺達の出向かいに待機していた完全に予想外だつた。

その男の名は陳勤。韓当こと海苑じいさん程ではないが、それなりに古株な孫呉の将で、おやじが生前の頃におやじに対して何度も突つ掛かつていた男だ。その男が腕を組み、何故か本陣の前で仁王立ちして待っていた。

無論、ただ俺達を待っているはずなどなく。煤と灰塗れで、しかも甘寧は気絶している状態という俺達の姿を見た陳勤が浮かべた表情は心配で歓待でもなく侮蔑。やれ見

るに堪えないだの、軟弱者に相応しい姿だの、思い出すだけでぬっ殺したくなる罵詈雑言の嵐を帰還した直後の俺達にぶつけてきたのだ。

確かに陳勤は腕は立つし、戦も出来る。それは俺も認める。今回の戦でも全戦を率いる将として、それなりに活躍もしたようだ。しかしそれだけで何故あそこまで罵倒される必要があるのか。とは言え、陳勤の口が悪いのは昔からだし、実際帰還が遅くなつたのは俺達の失態である事に違いない。それにこんな事は何時もの事だと思い、あの時の俺は黙って聞き流す事に決めた……はずだった。

しかしだ。そこで何を思ったか、陳勤は俺を罵倒するに飽き足らず関係の無いおやじの侮辱まで始めた。気付いた時には、俺の右拳が陳勤の頬を殺さない程度に殴り飛ばしていた。反省はしなかつたし後悔もしなかつた。それによつて陳勤は気絶、俺は勝手な私闘で陳勤に手を上げた事で罪に問われ、撤収作業の際に冥琳様の監督の下、懲罰労働として、しこたまこき使われる羽目になった。

もとより撤収の際には人一倍働こうと思つていた手前、懲罰労働まで加わつた俺には当然ながら自由に行動できる時間などあるはずもなく。廃城の探索に当てる時間など言わずもがなだ。どうにかして確保出来た時間は少なく、それさえも城壁で殴つてしまった甘寧への詫び代わりに、彼女が心配していた風評の操作に手を打つだけで精一杯だった。

思い返せば本当に我ながら頑張ったと思う。卓上で組んだ両手の上に顎を乗せ、俺はしみじみとしてため息をついた。

「どうするのだ、公積よ。これから鍛冶場まで足を延ばす心算なら、残りの作業は俺が引き受けるが」

「そうだなあ」

嬉しい提案をしてくれる瑾に感謝しつつ、頭を悩ませる。正直なところ、すぐにでも鍛冶場にひと仕事頼みに行きたい気持ちでいっぱいなのだが、気軽によし行こうとは言えない事情もある訳で。

「費用、経費で落ちないかな」

「いや、それは……無理だろう」

「ですよー……はあ」

分かり切っていた事に、自分で言つたため息を吐く。江賊征伐の時の独断専行で棒給を減額されてるから、最近の俺の懐事情は結構厳しい。ゆえに今日まで贅沢を控え、こつこつと懐を温めていたのだが、新しい得物を調達するとなればここしばらくの儉約の成果が吹っ飛ぶこと間違いなしだ。いつその事、凌家の酒蔵から秘蔵の逸品を持ちだして、祭さんに売りつけるというのも……駄目だ、おやじが化けて出る未来しか見えない。「何だ、そこまで懐が厳しいのか。凌家の資産は、そこまで少ない訳でもないのだろう

「？」

「そりやまあ、家の金を使えば得物の一つや二つ用意するのは問題無いけどさ。国のためならともかく、俺個人の問題であんまり家に負担は掛けたくないんだよ。当主の癖に戦に感けてばかりで、家の事は家臣団に丸投げだし」

「その国のために身を粉にして働いているのだ、気にする事も無いだろうに。律義というべきか、難儀というべきか」

「そこは一つ、律義の方で頼む」

そう言つて、俺は苦笑と共に席を立つ。

「行くのか？」

「おう。けどその前に城の武器庫を漁ってくるわ。もしかしたら代わりになる得物が見つかるともしれないし」

「おいおい、武器庫の装備は軍部全体の備品だろう」

「ちやんと許可は貰いに行くつて。それに、兵達に配給されてる様な得物じゃ俺には柔過ぎる。精々常人が使わない様な変わり種を引っ張り出すさ」

「そう都合よく公積のお眼鏡にかなうものがあるとは思えないが……」

ぶつちやけ俺もそう思うが、もしかしたら掘り出し物が見つかる可能性だつてある。何も形状が鎚である事に拘る必要はないのだから。要は頑丈でなおかつ取り回しの効

く得物であればそれでいい。そうと決まれば、今回ばかりは瑾のお言葉に甘えさせてもらうとしよう。

「じゃあ、行つてくる」

「ああ」

編成案の作成を瑾に任せて、俺は城の武器庫へと足を向ける。その途中、武器庫を漁る許可を得るために、冥琳様から兵站の管理を任されている穩に失った鉄鎚の代わりの得物を見繕いに行きたい旨を伝えるため、穩の部屋へと寄る。

「穩、入るぞー」

「はあい、どうぞ〜」

部屋に入る前に一声掛け、穩の返事を待つてから扉を開ける。すると部屋に入った俺の顔を見るなり、穩が丁度良かったとばかりに顔を輝かせた。

「あああ浩牙さん、いいところに来てくださいましたねえ。でも、その前に何か御用ですかあ?」

「あ、ああ。実は――」

先程、瑾と話していたのと同じ内容の話の話を穩に告げる。すると穩は手をパンと前で打ち合わせて、にっこりと笑みを浮かべた。

「あああ、偶然ですねえ。実は私も丁度、蔵に用事があつたんですよお」

「……」

「う・ふ・ふ」

きつと顔を引き攣らせているだろう俺に対し、穩はほんのりと頬を赤く染めて何やら体をもじもじと揺らし始める。俺は無言で即座に踵を返した。

「つて、なに無言で帰ろうとしてるんですかああああああ！」

直後、叫びながら椅子から立ちあがった穩が飛び出す様にして彼我の距離を一瞬で詰めてくる。そして体当たりには半ば近い形で、がっしりと俺の腰にしがみついて来た。

「ええい、離せッ！ そんな顔してる時の穩に関わると、大抵碌な目に合わん！」

「酷い!? そんな決めつけは良くないですう〜!!」

「決めつけじゃない、経験則！ つて、やめて！ 羽織が破れるー！」

「ぜえ〜つたいに、逃がしませんからね〜！」

両の手で陣羽織の裾を固く握り込み、だらんと足を投げ出し全体重を掛けてくる穩に、凌家伝来の朱地の陣羽織がミチミチと悲鳴を上げ始める。いかん、いかんぞ。こんなアホ丸出しの争いが羽織の死に場所だなんて、ご先祖様達に申し訳が立たない！

「は・な・せー！」

「い・や・で・す〜！」

くそう、一体何が穩をここまで駆り立てるんだ。穩の手に怪我を負わせないように手

加減したままでは、まったくもって振り払えそうにない。かといって穩の氣力体力が切れる様に仕向けようにも、その前に陣羽織が討ち死にしてしまう！

「入るぞ、穩。実は先程頼んでいた件についてだが——」

「あつ、冥琳様！　ちよつと助けてください！」

「——特に言う事はないからゆつくりしてていいぞ」

「冥琳様ああああ!!」

扉を開け入って来こうとした救いの神は、こちらを見るなり流れる様な動作で扉を閉めて出ていく。去り際にちらつと俺に向けてきた視線が、まあ頑張れ、と言っていた様に見えたのはきつと気のせいじゃない。

「ううううう！　なんでそんなに嫌がるんですかあ！　別に厄介な仕事を頼む心算はありませんよ〜！」

「じゃあ今すぐその要件とやらを言ってみろ！　悪いが俺には即座に断れる自信があるぞー！」

「えつとですね、私と一緒に孫子のご本を取りに——」

「断る！」

「早っ!?　せめて最後まで聞いてくれても——」

「だが断る！」

「ううう、断る言いたいだけぢやうんかあ……」

そんな事はない。俺がここまで嫌がる理由にはちゃんとした理由がある。それには穩の個人的な事情が深く関係しているのだが……まあぶっちゃけてしまうと、穩の特殊な性癖に問題があるからだ。

実に個性的と言うべきか、穩は知識欲を刺激されると、同時に性欲も大いに刺激されるという何とも困った性癖を持っているのだ。しかもその度合いが尋常ではなく、加えてその発散に場を弁えないものだから、その場に居合わせた者は堪ったものではない。

一応、本人もそのことは自覚しているし、ゆえに多少の事ならば穩も自制が効くのだが、今回ばかりは相手が悪い。何せ、かの孫武が記した、知識人ならば一度は耳にした事のある、あの有名な兵法書『孫子』が相手なのだ。

現に穩は蔵に用事があると目的を遠回しに口にしただけで、顔を赤くしてもじもじする始末。現物を前にしたら、とても理性を保つ事など出来ないに違いない。そしてその時に被害を被るのは、同行する俺という事になる。それだけは絶対に駄目だ、というか俺以外の人物であつても駄目だ。何が駄目かと聞かれれば、それはもう色々な意味で駄目なのだ。

ならば一人で行かせればいいと思うだろうが、残念な事に穩の性癖を知っている冥琳様によって、穩は一人で蔵へ入る事を禁止されている。蔵書数はそこまで多くないとは

いえ、孫子を除いても蔵の中は言わば知の宝庫。そんなところに穩を一人で行かせようものなら……想像するのも憚られる事態になりそうだ、確実に。

「だいたい、別に穩が直接行く必要はないんだから、誰か他の文官に持つてきて貰えば万事解決じゃないか」

「それはそうですけどお……」

「だろう？ その後で、穩が一人、部屋で孫子に熱を上げる分には誰にも迷惑は掛からないし、迷惑にならない以上はそれを止める事もしない。是非とも存分にやってくれ」

「うううう……」

依然、俺の腰にしがみついたまま、うつすらと目尻に涙を浮かべてしよぼくれる穩に若干心が揺らぎかけたが、それを払拭するためにも毅然とした態度で俺は穩に言葉を返す。

「そんな悲しい声を出されても、俺は絶対に行かないぞ。いや、行っても良いけど、その場合、穩はここで留守番だ」

「そんなご無体なあ。一度だけ、一度だけで良いですから。中を覗くだけで構いませんから、いつそ香りを嗅ぐだけでも我慢しますからあ……！ どうか冥琳様には内密で！」

「む・り・だ！」

「うっ！ う、うううううう、ううううううあああああん!! 浩牙さんの鬼い！ 分からずやあ！ この、性欲枯れ枯れの鬼畜童貞ええええええ！」

「ちよ、おまつ!？」

ついに不満が爆発したのか、穩がとんでもない台詞を口にしながら大声で俺を罵り出す。というか、年頃の女の子がそんな言葉を口にするんじゃないやなああああ!

「童貞！ 童貞！ 冥琳様が怖くて何も出来ない浩牙さんなんて、どーせ下の逸物も、しなちく程度の役立たずに違いありません！」

「しなちく!? いやそりゃ、確かに童貞だけ……ていうか、そんな大声でいきなり何言いで出してんだ！ 周りに聞かれたら変な誤解されるだろうが！」

「誤解じゃないから問題ありませんもんね！」

「ありまくりだ！ 俺はまだ全然枯れてないし、人並みに性欲もある！ 加えて鬼畜なんかじゃ断じてない！ って、何でこんな恥ずかしい事を言わなきゃならんだ、こんなちくしよー！」

売り言葉に買い言葉。穩の勢いに乗せられ、つい熱くなつた俺も、多少の壁など役に立たない程の大声ではしたくない台詞を穩に返す。鎮まれ、鎮まりたまえ、俺！ 名のある孫呉の将が、この様な痴態を見られて良いものか！ 誰にも聞かれていない今なら、まだ――

ガタツ!!

「はっ!?!」

後ろで立つた音を耳聴く聞きつけ、俺は咄嗟に後ろへと振り返る。身を乗り出し過ぎたのか、足がぶつかって半開きになった扉の向こうには、目を見開き中腰の姿勢で固まった明命の姿が――

「み、みんなー、さん?」

「……………はうあ!?!」

棒読みな俺の呼びかけに、随分と長い間を置いてから明命が硬直から復帰する。まさか、今の話を聞いてたのか? いや、そんな馬鹿な。いくら隠密の隊長だからって、あの明命がよもや立ち聞きだなんて真似をするはずが無い。うん、ナイナイ……………無いよな?」

「もしかして、今の話……………聞いてたか?」

震え声で大事なことを明命に尋ねる。頼むから、聞いて無いと言ってくれ、お願いだ。「え、えつとえつと……………廊下を通りがかつたら、何やら穩様のお部屋が騒がしかったので、つい……………」

「……………」

のおおおう、天は我を見捨てたッ!!

「あ、あうあうあうあ……その、その……わ、私は、その……別に浩牙さんが童貞で鬼畜でしなちくでも、全く気にしませんからあああああー!!」

明命が顔を真っ赤に染めて叫び、隠密らしい俊足で廊下を走り去っていく。何だろう、兄貴分としてかなり致命的な誤解を妹分にされてしまった様な気がするんだが……。

これどうするの、馬鹿なの？ 死ぬの？

「なあ、穩さんよ……俺さ、もし明日にでも明命に鬼畜とかしなちく呼ばわりされたら、ちよつと生きていける自信が無いんだが……」

「いいじゃないですか。だって、浩牙さんつてば実際に——」

そこから先の出来事を的確に言葉で表現するのは少し憚られる。ただ一つ言えるのは、流石の穩も断末魔の叫び声までは緩くないということだ。

閑話休題。

ひと仕事終えて完全に沈黙させた穩を寝台に放り込んだ俺は、穩の引き出しからとりあえず武器庫の鍵を拝借する。得物を求める旅路は、道中ちよつと失うものがあつたりと紆余曲折あつたが、これでようやく終着点へと向かう事だろう。そして話は冒頭に戻る。



「やつぱり適当に見繕った得物じゃあ駄目だったかあ」

そう呟きながら、刃が大きくこぼれ落ちた蛮刀を手から落とす、俺は空を仰ぎながら大きくため息を吐いた。今ので武器庫の奥から引つ張り出してきた掘り出し物は最後。あとは残らず、この目の前に鎮座する試し切りの大岩を前に敗れ去って朽ちた。

死蔵されていた物の中でも特に頑丈そうなものを選んだつもりだったが、やはりというか、結局それらは全て剣という武器の範疇を出ないものばかりだった。いくら刀身が分厚かろうが、それはあくまで剣という規格の中での事であって、俺が求める様な圧倒的な耐久力を持つには程遠い代物だった。

まあ、それこそ殴殺するしか技の無い、鉄の塊であった双鉄鎚と比べてやるのも可哀想な話だが……悲しいかな、俺はそんな得物で無ければ力を十全には発揮できない。その証拠に、この程度の大岩一つ未だに壊す事が出来ずにいる。俺の力が足りていても、それを伝える手段たる得物の方が耐えきれずに先に潰れてしまうからだ。

「本当に、どうしたものかな」

鍛錬場に散乱していた、使い物にならなくなった得物達を拾い集め、ここまで運んでくる時に使った木箱の中へと纏めて放り込む。少し前まで武器の山だったものが鉄く

ずの山になってしまったその光景を見て、そこでふと思いつく事があった。この鉄塊の山を鍛冶屋に持ち込んで、これらを材料に鉄鎚を作つて貰えば、その分だけ支出が減るんじゃないだろうか。

劍という形ゆえに俺の扱い方に耐えきれず破損してしまったこの得物達も、その刀身に使われた鉄そのものは、頑丈さを求めただけあつてなかなか良質なものが使われているに違いない。

壊した本人が言うのもおかしい話だが、どつちみちこのままでは鉄くず以外の何物でもないのだし、ならばいつそ新しい得物の礎となつて生まれ変わる方がこれらのためにもいいんじゃないだろうか。ああ、そうだ、そうしよう。俺は新しい得物が手に入つて幸せ、こいつらは長く死蔵されていたところを新しく生まれ変わる事で、戦場という活躍の場で日の目を見る事が出来る。

これぞまさしく天啓という奴かもしれない。俺の破壊活動は決して無駄ではなかつた。俺は鼻歌交じりに木箱を担ぎ上げると、軽い足取りで鍛錬場を後にする。道中すれ違ふ見張りの兵達に怪訝な顔をされながら、軍部掛かりつけの鍛冶師の工房を目指す。俺も何度か鉄鎚の手入れで世話になつてゐるため、城からの道順はすっかり頭の中に入つてゐる。手元をがちやがちやと鳴らしながら、そうして歩く事半刻ほど。目的地にたどり着いた俺は、お目当ての鍛冶師の工房の暖簾をくぐる。来客に気付いた一人の青

年が、俺の抱える荷物に目を丸くしながらも対応に出た。

「らっしやい。随分とでつかい荷物を抱えてるみたいだけど、ウチに何か用かい？」

「おうとも。ちよつくら、ひと仕事頼みに来た。よいせつと」

抱えていた木箱を足元に置く。その中身を覗いた青年が、眉間な皺を寄せて難しい顔をして顔を上げた。

「お客さん、一体どんな使い方したらこんな事になるんだ？ 悪いけど、ここまで壊れちゃ修復は無理だと思っせ」

「まあ、修復を頼みに来た訳じゃないからな。おーい、おやつさん！ 居るかー？ 一つ仕事を頼みに来たんだが！」

再び壊れた武器達に目をやりながら唸る青年を横目に、受付の奥、仕切りを隔てた向こう側の作業場の方へと俺は声を大きくして呼びかける。しばらくして、手拭いを額に巻いた、小さい子が見たなら思わず泣き出してしまいそうな強面の男……俺が先程おやつさんと呼びかけた、この工房の親方が額に汗を滲ませながら顔を出した。

「おお!! これは凌將軍、毎度ご鼻屑に」

「どうも、おやつさん。作業中に呼び出して悪いね。悪いついでに一つ、急ぎで仕事を頼まれて欲しい」

「わはは！ 作業と言っても弟子に教えを授けていただけゆえ、お気になさらず。それ

で、仕事と言うと……もしや、そこに置いてある？」

未だに青年が覗きこんでいる木箱に、親方も厳しい視線を向ける。それに気づいた青年が場所を譲ると、壊れた剣群を良く見ようと傍に寄った親方が腰をおろし、その中から真つ二つに折れた剣を適当に選び手に取ると、うーむと唸り声を上げて顎を撫でた。

「ふうむ、なるほど。確かに凌將軍が振るうとなれば、これらには些か荷が勝ち過ぎたようですね。加えて剣の本分のない使い方を為されたと見える」

「やっぱり分かる？」

俺からすれば、どれも同じく折れたもしくは刃毀れした剣にしか見えないが、本職の人物から見ればその理由すらも分かかってしまうらしい。なんだか自分の愚行を見透かされた様で、少し恥ずかしい気分になる。

「恐らくですが、何かとてつもなく頑丈な物を斬ろうとしたのでは？」

「いやまあ……城の鍛錬場に長い事居座ってる大岩を思いっきりぶった斬ろうとしただけ……かな？」

茶目つぼく説明した俺に親方は呆れるでもなく、くくつと小さく笑みを浮かべる。

「それはそれは、また随分をお硬いものを斬ろうとしたものですね」

「正確に言えば、斬るといふより砕こうとしたんだだけだな。それに向いてそのような物を選んだつもりだったんだけど、やっぱり基の頑丈さが足りていなかったみたいだね」

「剣は殴るものではなく、斬るものですゆえ。その様な使い方をされては、こうなる事も致し方ない事かと」

「そこにあるのは、どう見ても斬る用途に適していないっぽいけどなあ」

「きつと、これらを鍛えた工匠達は皆、凌將軍と同じ考えを持った工匠だったのでしよう。始めから斬るのではなく、重さで叩きつけて殴殺するのを是とするならば、これらも理に適った作りと言えますからな。もつともそれが、人ではなく大岩相手に振るわれるなどは、流石に作り手の工匠達も予想しなかったものでしよう」

「まあ、そうだろうけどさ。でもそれって別に——」

「必ずしも剣でやる必要は無いでしょうなあ。凌將軍が大岩を相手にする必要が無かったように」

「おつと、これは一本取られたか」

俺が言おうとした言葉を親方が苦笑を浮かべながら皮肉交じりに先に口にし、それから手にしていた剣を木箱へと戻す。次いで青年に目配せをして木箱を工房の奥へと運ばせると、しばらくしてから親方は立ちあがり、今までと打って変わって真剣な職人の目付きをして俺の方へと向き直った。

「では凌將軍、改めてお話をお聞きしましょう」

「ああ。以前、俺がおやつさんに頼んで何度か見てもらった鉄鎚があつただろ？ 実は、

あれと同等の物を鍛えて欲しい。先の戦で、不手際ながら紛失してしまつてね」

「なるほど、なるほど。さっきのあれらを材料にですな。そしてその材料費の分、手間賃を割り引いて欲しいと」

「流石はおやつさん、話が早い」

「以前、酒屋の主人に仕事を頼まれた際に、世間話に凌將軍が財布の紐を少々気にしていたと噂してましたので」

それはもしや、俺のおごりで祭さんと夜通し飲み明かしたあの時の事だろうか。あの時は確か、俺と祭さんがあまりに長居し過ぎて、店主に涙目でお帰り下さいと懇願された記憶がある。あれからそれなりに時間は立つが、よもやそれがこんなところでひよいと顔を見せるとは……恐るべし、商人同士の情報網。

「わはは！ 他に広めたりなどはしておりませんゆえ、ご安心ください」

「既に手遅れな気もするんだが……まあ、おやつさん達の話のタネにでもなれば幸いか。それで、手間賃はどれくらいになりそうかな」

「凌將軍を始め、孫家の武官の皆様方にはご贖罪にしておりますからな。それらも踏まえて……これ位でいかがでしょう」

若干間を入れて提示された金額は幸いにして、一般に業物と呼ばれる得物に付けられる相場の価格よりもかなり安い金額だった。材料費の分を差し引いて、本当に親方と弟

子達の手間賃分しか要求していないのだろう。それでも庶民からしたら十分に高価であるし、減給中の身である俺にとつてはやはり懐に響く程なのだが、少なくともこの先しばらく、懐の寂しさに城の食堂通いに徹するなどという事にはならないと思う。本当にありがたいことだ。

「ならば非それで頼む。時間はどれくらい掛かりそう?」

「出来る限り迅速を心がけはしますが、正確にはお答えできかねますな。完成し次第、城へ弟子を遣わせます」

「分かった。他の誰でもない、おやつさんの鍛える鉄鎚だ。期待して待つてるよ」
「工匠の誇りに掛けて、至高の品を鍛え上げて見せますとも」

そう言つて、自信に充ち溢れた笑みを浮かべた親方が、その大きな手を俺に向けて伸ばす。それに応える様に、俺もまた親方の方へと手を伸ばして、がっしりと固く握手を交わす。それから手間賃の半額を先払いとして親方に手渡し、工房を後にしようとした丁度その時だった。

「おや、興覇様。今日も砥ぎ直しの依頼ですかな?」

俺が踵を返すよりも早く、俺の背後に視線を向けた親方が苦笑を浮かべてそう口にした。俺がギョツとして振り返ると、そこには何時もと変わらない澄まし顔をした甘寧が工房の入り口で、ほんの僅かだが目を見開いて固まっていた。どうやら甘寧の方も俺が

ここに在る事が予想外だったらしい。

「……」

「……」

距離を開けたまま、無言で睨みあう事しばらく。背後で親方が若干、きまずそうな氣配を醸し出しているのを察し、俺は視線を切つて甘寧に親方の前を譲る。甘寧は特に表情を変えず親方に近づくと、劍を劍帯から外し鞘ごと親方に手渡す。俺と甘寧の間に流れる不穏な空氣に戸惑つていた親方も、流石に仕事を前にしては工匠らしく鞘から劍を抜いてその状態を調べ始めた。

「これはまた、随分と短期間に使い込みましたな。以前お持ちになつた時より日もそう経つていないはずですが、よもやこれほどとは……」

「頼めるか」

「砥ぐのは構いませぬ。ですがこの劍は見る限り、随分と刀身が細くなつてきております。その上ここ最近、興覇様はこの劍をかなり酷使していらつしやるご様子。此度もまた砥ぎ直すとなればいつその事、劍の寿命を縮めるでしょう。そうなれば戦の最中、不意に折れてしまう事も十分に考えられます。そろそろ新しい得物をお求めになつた方が宜しいかと」

伺う様にして打診する親方に甘寧が考え込むようにして目を閉じる。甘寧は一体何

をして、親方にそうまで言わせるほどに得物を使い込む必要があったのか。黄巾の討伐を終えてから今日まで、甘寧がどこかに出陣する様なことは無かったはずだ。

いや、何も戦ばかりが得物を消耗させる理由にはならない。俺の様に大岩をぶった切ろうとして武器を壊してしまう場合もある。流石に俺の場合は極端な例だが、それほどに得物を酷使する何事かを、甘寧は俺の知らないところでやっているのだろう。

そんな風に考え込む俺の視線に気づいたのか、甘寧がぱちりと目を開き、訝しげな表情を浮かべながら俺の方へと振り返った。

「……何を見ている」

「いや、別に」

何とも素っ気ない俺の返事に甘寧がムツと目付きを険しくする。

「言いたい事があるならハッキリ言えばいい」

「……ふむ」

——意外だな。

甘寧の厳しい視線にさらされながら、内心で俺はそう思った。今までの付き合いから鑑みれば、舌打ちの一つで甘寧の方から即座に話を切るだろうに。それを俺が吹っ掛けるならまだしも、まさか甘寧の方から俺に因縁をつけくるとは……。

「なんだ、その意外そうなものを見る目は」

「ん、顔に出てたか」

「……貴様は、私を馬鹿にしているのか？」

「まさか」

悪態をつく甘寧に俺は軽く戯けてみせる。町人なら震えあがりそうな甘寧の鋭い眼光も、戦場での雪蓮様の殺気と比べれば可愛いものだ。自分の死が情景に浮かぶほどではない。もつとも、町中でそんな殺気を放たれるのも迷惑な話だが。

「まあ、生憎と俺からあんたに聞く様な事は何も無い。あんたから俺の方がどうかは知らないけどな」

「……」

「どうやら、そつちも無いみたいだな」

無言を貫く甘寧に軽く問いかける。すると以外にも反応を示した甘寧が、ポツリと小さく呟いた。

「いや……一つ、聞きたい事がある」

「ほう、何かな？」

「城壁で貴様に意識を狩られたあの後。貴様は私が気を失っている間に、皆に私が先の戦いで武功を上げたと言ったな……なぜだ？」

「あんたが武功を上げたのは事実だろう」

「だが、そこに至る過程を貴様は丸々抜かして伝えただろう。教える、なぜそんな事をした」

問い詰める様にして聞いてくる甘寧の瞳に真剣な光が浮かぶ。あまりに真つ直ぐで強いその視線に、どの様に問いをはぐらかそうかなどと画策していた俺の思考は軽く吹き飛ばされ、否応なしに求められる真摯な返答を汲み出そうと俺は新たに思考を巡らせ始める。

あの時、甘寧を止めた自分の判断に関しては、決して間違っていないなかったと俺は自信を持って断言できる。しかし殴って気絶させた事に関しては、多少の申し訳なさを感じたのも事実だ。だからこそ俺はせめてもの詫びにと甘寧の風評操作に手を回した。甘寧の部下達にその英雄譚を語って聞かせ、冥琳様には十分以上の働きをしていたと報告した。

それらは別にやましい事でも無し、わざわざ隠し立てする必要もないのだろうが、甘寧を性格を含めて考えれば詫び代わりにやったのだと伝えたところで、甘寧が不快な思いをあらわにするのは目に見えている。あの時はこちらに道理があったとは言え、それでも俺は甘寧の意思を力づくで曲げたのだ。その事を後になって勝手な手土産と共に詫びられたところで、甘寧からすれば屈辱的なのだろう。

我ら将の名誉や義は、時に命よりも重い。ただでさえ甘寧は責任感の強い生真面目な

頑固者だ。己が名誉にいらぬ情けを掛けられていたなどと聞かされたなら、次に戦場に立った時にどの様な無茶をしようとするのか、想像するだけでも億劫だ。

ならばここは勝手な手土産ついでにもう一つ、憎まれ役を俺が演じ甘寧を納得させるのが一番だろう。今更一つ二つ憎まれ事が増えたぐらいで何が変わるでもない。それで目の前の問題が片付くのなら安いものだ。余計ないざこざなど、起こさないに限るのだから。

「伝える必要が無いと思ったから伝えなかつた。それ以外に理由は無い」

考え抜いた末に突き放す様に放つた俺の言葉に案の定、甘寧は肩を怒らせて噛みついてきた。

「それで私が納得すると思うのか。侮るのもいい加減にしろ」

「あんたが納得しようがしまいが知つた事か。他人の些細な失態を懇切丁寧に言いふらすほど俺は暇じゃないんだ。何だったら、今から俺の代わりを務めてみるか？」

「……ちつ」

俺の問い掛けに甘寧が舌打ちし口を噤む。まあ、無理だろうとも。確かに黄巾征伐は終わったが、それが最終目的ではない孫呉は今も次の足掛かりを作るために水面下で忙しく動いている。それを蓮華様の側近を務める甘寧が知らないはずがない。実際、ここ数日の俺は中間管理職の実態をまざまざと見せつけられるほどに忙しかった。暇じゃ

ないとは言い得て妙だなと、思い返してため息をつく。

「何を呆れる！」

「別の事だ、気にするな。それよりも、さっきの俺の答えであんたは納得したのか、それとも否か……どうなんだ？」

「否だ」

「即答かよ……一体何が気に食わないのやら」

「貴様の言、全てがだ。貴様は虚言を吐いてはいないが、真実を語ってもいない」

「言い切るんだな。俺の心でも見透かしたか？」

「私の勘がそう告げている」

「……」

当たり前のように断言した甘寧に束の間、俺は言葉を失った。その勘とは所謂女の勘という奴なのか。何時もなら馬鹿らしい事をと言いつ返したいところだが、残念ながらその勘はしっかりと的を射ている。それとも、冥琳様達が言っていたように俺が分かりやすいだけなのか。もしそうだとしたら、それはそれで困ったものだ。

「どうだ、本心を話す気になったか」

「はあ……なあ、甘寧よ。さっきも言ったが、あんたは先の戦での働きで間違いなく結果を出した。それは揺るぎない事実だ。あんたが命を賭けて成し遂げ、そして手に入れた

名譽は誰にも卑下される事は無い。あんたの働きが、失われるかも知れなかった幾人も孫呉の勇者達の命を生かした。そんな大きな結果を前に、ただの過程に犯したほんの些細な失態なんて、取るに足らない細事だと思わないか？」

「そう思えていたなら、今ここで貴様を問い詰めてはいない」

「生真面目ここに極まれりだな」

「これが私だ、文句を言われる筋合いは無い」

「至極」もつともな意見をどうも」

そんな性格だから、きつと気苦労やら何やらも溜めこむ夕チに違いないんだろうなと、俺は表面で苦笑を浮かべながら内心でそう思った。

「まあ、どれだけ問い詰められようと、俺があんたに語る理由はさつき言ったので全てだ。それで納得できないなら、甘興覇自身の考えを周りに説くなり、好きにすればいい。殆どの奴が謙遜だろうと笑うだろうけどな」

そこまで言つて、俺は甘寧から視線を切る。これ以上は何を言つても蛇足にしかならないだろう。あとは全て甘寧次第だ。

「俺は先に城に戻る。あんたも何やら忙しいみたいだが、程々にしておけよ」

「貴様に言われるまでも無い」

「くつくつ、そうだったな」

釘刺しと僅かな心配の言葉に返って来たぶつきらぼうな憎まれ口に、思わず笑いがこみ上げる。それは望外に憎まれ役を演じきれた自分に対してのものだが、しかし踵を返した俺の背中には痛いくらいの視線が突き刺さる。

恐らく嘲笑か何かと勘違いしたんだろう。だがまあ、それもまた憎まれ役には心地よい。そんな勘違いの視線に見送られながら、俺は鍛冶場を後にした。